三重県埋蔵文化財調査報告３６０

東条１号墳・屋敷の下遺跡

～伊賀市東条～

２０１５（平成27）年３月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、三重県伊賀市東条字屋敷ノ下 548-1 番地ほかに所在する東条１号墳・屋敷の下遺跡の発掘調査報告書である。
2　この調査は、平成 24 年度県営地すべり対策事業（府中６期地区）に伴って新たに発見された遺跡を緊急調査し、記録保存を実施したものである。
3　発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。
調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
平成 24 年度（現地調査）　調査研究１課　主幹　伊藤裕偉　　技師　相場さやか
平成 25 年度（整理作業）　調査研究１課　主幹　伊藤裕偉
平成 26 年度（報告書作成）　調査研究１課　主幹　伊藤裕偉
4　調査にかかる諸費用は、執行委任を受けて三重県農林水産部が負担した。
5　報告書作成にあたっては、下記の方々から有益なご助言を得た。記して感謝申し上げます（敬称略）。
大賀克彦（奈良女子大学）、田村朋美（独立行政法人国立文化財研究所奈良文化財研究所）
福永伸哉（大阪大学大学院）、早川和子
6　本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
7　当報告書の作成業務は当センター調査研究１課が行った。報告文の作成は伊藤裕偉・髙松雅文・相場さやかが分担した。編集は伊藤・相場が行った。

凡　例

＜地図類＞
1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図、2006 三重県共有デジタル地図（平成 19 年測図）、これらの地図は、全て世界測地系（測地成果 2000）に対応している。
2　2006 三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号；三総合地第 93 号）。
3　調査区は世界測地系に基づく国土座標第Ⅵ系で示している。挿図の方位は座標北である。なお、磁針方位は西偏６°50′（平成 19 年）である。
＜遺構類＞
4　現地土壌の色調と土質は、小山正忠･竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967 年初版、2003 年第 23 版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
5　遺構は、調査時に付加した遺構番号を踏襲している。
＜遺物類＞
6　当報告での遺物実測図類は実物の 1/1、1/2、1/4 があり、各図面に示した。
9　実測図のうち、上下の外郭線（口縁部･底部など）に切り目を入れているものは、残存が少ない（1/12 以下）が、既存事例に基づきおおよその大きさを推測して示したものである。
10　当報告書での用語は、「つき」は「坏」、「わん」は「碗」「椀」を状況により使い分けた。
11　遺物観察表は、以下の要領で記載している。
番号 ･････････････････挿図掲載番号である。
実測番号 ･････････････実測段階の登録番号である。
様・質 ･･････････････「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。
器種等 ･･････････････遺物の器種を示す。
地区 ･････････････････出土遺跡を記した。
遺構・層名等 ･････････遺物の出土した遺構や層名を記した。
法量（cm）････････････遺物の法量を示す。（口）は口縁部径、（底）は底部径、（体）は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での 「接地点」ではない。
調整・技法の特徴 ･････主な特徴を外面（外；）・内面（内；）で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。
胎土 ･････････････････小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
色調 ･････････････････その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。
残存度 ･･････････････指示部位を 12 分割した際の残存度を示した。6/12 は約半分、12/12 は全体が残っていることになる。
特記事項 ･････････････遺物の特徴となるその他の事項を記した。
＜写真図版＞
12　挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。
13　遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の契機・経過と行政的諸手続 ……（1）
1　調査の契機と協議経過
2　発掘調査の経過と法的措置
3　発掘調査と記録の方法
4　整理作業とその方法
5　出土遺物の分析と保存処理

Ⅱ　遺跡と周辺の諸環境 ……（5）
1　位置と地形
2　歴史的環境
3　東条古墳群と屋敷の下遺跡

Ⅲ　遺構 ……（12）
1　調査区周辺の地形環境
2　東条１号墳
3　屋敷の下遺跡（西地区）

Ⅳ　調査の成果～出土遺物～ ……（25）
1　東条１号墳埋葬施設１出土遺物
2　東条１号墳埋葬施設２出土遺物
3　屋敷の下遺跡出土遺物

Ⅴ　調査資料の科学分析 ……（63）
1　分析の目的
2　東条１号墳埋葬施設２出土木製品の樹種同定結果

Ⅵ　調査のまとめと検討 ……（64）
1　東条１号墳の構造
2　古墳の立地と占地
3　須恵器の生産と供給
4　東条１号墳出土の大刀
5　東条１号墳出土の四獣鏡
6　東条１号墳出土の玉類
7　古代・中世の東条地区
8　総括

挿　図　一　覧

第１図　遺跡位置図
第２図　東条古墳群・屋敷の下遺跡周辺地形図
第３図　東条４号墳石室実測図
第４図　調査区位置図
第５図　東条１号墳調査区全体図
第６図　東条１号墳土層断面図
第７図　東条１号墳墳丘断面模式図
第８図　東条１号墳埋葬施設１平面・立面図
第９図　東条１号墳埋葬施設２平面・立面図
第10図　東条１号墳埋葬施設２鏡・玉類出土状況
第11図　東条１号墳埋葬施設２腕輪出土状況平面・立面図
第12図　東条１号墳埋葬施設３平面・立面図
第13図　屋敷の下遺跡西地区土層断面図
第14図　東条１号墳出土遺物実測図（1）
第15図　東条１号墳出土遺物実測図（2）
第16図　大刀の細部名称
第17図　大刀の復元
第18図　東条１号墳出土遺物実測図（3）
第19図　東条１号墳出土遺物実測図（4）
第20図　東条１号墳出土遺物実測図（5）
第21図　玉類計測部位図
第22図　ガラス製小玉・丸玉法量散布図
第23図　東条１号墳出土遺物実測図（6）
第24図　東条１号墳出土遺物実測図（7）
第25図　東条１号墳出土遺物実測図（8）
第26図　東条１号墳出土遺物実測図（9）
第27図　東条１号墳出土遺物実測図（10）
第28図　東条１号墳出土遺物実測図（11）
第29図　埋葬施設２出土鏡の付着物
第30図　東条１号墳出土遺物実測図（12）
第31図　屋敷の下遺跡西地区出土遺物実測図
第32図　埋葬祭式段階図
第33図　東条古墳群の築造変遷
第34図　才良吉田谷古墳群の変遷
第35図　ガラス製小玉ａの製作技法別法量散布図
第36図　ガラス製丸玉の材質
第37図　ガラス製丸玉の製作技法
第38図　小玉ａの色調
第39図　小玉ａの製作技法
第40図　小玉ａ（引き伸ばし法）の材質
第41図　小玉ａ（鋳型法）の色調
第42図　首飾り復元図
第43図　伊賀の旧郡と前方後円墳・古墳時代鏡出土地の関係

挿　入　写　真　一　覧

写真１　現地確認段階の東条１号墳
写真２　掘削時立会状況
写真３　発掘調査の状況
写真４　現地説明会の様子
写真５　東条１号墳から南方を望む
写真６　東条４号墳
写真７　東条３号墳上の石仏
写真８　鉄刀と直立して出土した鉄鏃
写真９　須恵器出土状況（埋葬施設１）
写真10　提瓶出土状況（埋葬施設２）
写真11　鏡と玉類出土状況（埋葬施設２）
写真12　翡翠製勾玉ほか出土状況（埋葬施設２）
写真13　銅釧と玉類（埋葬施設２）
写真14　銅釧ほか出土状況（埋葬施設２）
写真15　埋葬施設２の南部須恵器群
写真16　墓壙上の土器群（埋葬施設２）
写真17　出土木製品樹種同定顕微鏡写真

表　一　覧

第１表　東条１号墳出土金属製品観察表（1）大刀ほか
第２表　東条１号墳出土金属製品観察表（2）鉄鏃
第３表　東条１号墳出土金属製品観察表（3）鞘片
第４表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表（1）
第５表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表（2）
第６表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表（3）
第７表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表（4）
第８表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表（5）
第９表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表（6）
第10表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表（7）
第11表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表（8）
第12表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表（9）
第13表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表(10)
第14表　東条１号墳埋葬施設２出土玉類観察表(11)
第15表　東条１号墳・屋敷の下遺跡出土土器類観察表
第16表　東条１号墳・屋敷の下遺跡（西地区）出土須恵器の区分
第17表　埋葬施設２出土玉類の出土地点と種類
第18表　ガラス製小玉ａ・ｂの出土地点と色調別個体数
第19表　小玉ａの色調別個体数と製作技法
第20表　小玉ｂの色調別個体数と製作技法
第21表　ガラス製丸玉の材質と製作技法

写　真　図　版　一　覧

写真図版表紙　東条１号墳埋葬施設２出土遺物集合
写真図版１　遠景（1）
写真図版２　遠景（2）・調査前風景・作業風景
写真図版３　全景（1）
写真図版４　全景（2）
写真図版５　埋葬施設１（1）
写真図版６　埋葬施設１（2）
写真図版７　埋葬施設１（3）
写真図版８　埋葬施設２（1）
写真図版９　埋葬施設２（2）
写真図版10　埋葬施設２（3）
写真図版11　埋葬施設２（4）
写真図版12　埋葬施設２（5）
写真図版13　埋葬施設２（6）・屋敷の下遺跡
写真図版14　出土遺物（1）　集合写真
写真図版15　出土遺物（2）　集合写真
写真図版16　出土遺物（3）　集合写真
写真図版17　出土遺物（4）　埋葬施設１　大刀・鏃
写真図版18　出土遺物（5）　埋葬施設１　大刀細部
写真図版19　出土遺物（6）　埋葬施設１　大刀細部
写真図版20　出土遺物（7）　埋葬施設１　大刀鞘片
写真図版21　出土遺物（8）　埋葬施設１　土器類
写真図版22　出土遺物（9）　埋葬施設２　玉類
写真図版23　出土遺物(10)　埋葬施設２　玉類
写真図版24　出土遺物(11)　埋葬施設２　玉類
写真図版25　出土遺物(12)　埋葬施設２　玉類
写真図版26　出土遺物(13)　埋葬施設２　玉類
写真図版27　出土遺物(14)　埋葬施設２　鏡
写真図版28　出土遺物(15)　埋葬施設２　釧・刀子・土器類
写真図版29　出土遺物(16)　埋葬施設２　土器類
屋敷の下遺跡　土器類
写真図版30　出土遺物(17)　金属製品Ｘ線画像

Ⅰ　調査の契機・経過と行政的諸手続

1　調査の契機と協議経過

a　総説

ここで報告する東条１号墳および屋敷の下遺跡（西地区）は、平成23年度（繰越）地すべり対策事業（府中６期）に伴い、平成24年11月から平成25年１月にかけて断続的に調査（記録保存）を実施し、平成25・26年度の２ヶ年で報告書作成にかかる業務を実施したものである。工事の事業主体は三重県農林水産部（農業基盤整備課）、実施機関は伊賀農林事務所（以下、伊賀農林）で、発掘調査および資料整理作業を三重県埋蔵文化財センター（以下、当センター）が行った。

b　事前協議の経過

東条１号墳は今回の工事に伴って新たに発見された遺跡で、屋敷の下遺跡（西地区）は、周知の埋蔵文化財包蔵地が当地まで拡大することが判明した遺跡である。当センターでは、県営公共事業にかかる文化財の影響を事前に把握するため、毎年度の後半期に次年度の公共事業照会を実施している。照会対象は、掘削を伴う全ての事業である。工事範囲に周知の埋蔵文化財包蔵地が該当していた場合、その取り扱いを協議し、必要に応じて範囲確認調査や工事立会、あるいは発掘調査を実施している。

一方で、周知の埋蔵文化財包蔵地以外の工事についても、確認作業を実施している。遺跡の存在が疑われる地点に関しては事前に現地確認を行い、そのうえで該当開発部局と取り扱いを協議するという方法を採っている。今回の対象地は、平成24年度事業地ということで、平成24年３月６日に現地確認を実施した。

現地確認の段階で、工事予定地点と同じ尾根上の上手に横穴式石室墳が新たに発見された（東条４号墳）。また、工事予定地点は尾根先端部にあたり、上部が平らであったことから、古墳の可能性があると思われた（写真１）。しかし、確実に古墳であるという確証は得られなかった。

写真１　現地確認段階の東条１号墳（北から）

写真２　掘削時立会状況（北西から）

この結果をもとに、当センターと伊賀農林とで取り扱いに関する協議を行った。その結果、工事発注し、当地へ掘削が及ぶ段階に掘削時立会を実施することとなった。

c　遺跡の発見と対応

平成24年度に至り、当該工事の発注がなされた。受託業者は株式会社三和工務店である。伊賀農林との協議の結果、工事の進捗に合わせ、11月14日に掘削時立会を実施することとなった。

立会は、すでに搬入されていた重機（バックフォー）での掘削となった（写真２）。この掘削により、須恵器坏蓋（第30図551）が出土した。これにより、この地点が古墳であることが確認されるに至った。

写真３　発掘調査の状況

これを受け、当地点が古墳であること、工事を進めるにあたっては、事前に発掘調査が必要であること、の２点について、当センターと伊賀農林とで再度の協議を行った。その結果、当地点の遺跡発見通知を県農林水産部から提出することと、当地点の発掘調査を 11 月 26 日から実施することで合意した。

2　発掘調査の経過と法的措置

a　調査の経過

発掘調査は、工事の中に組み込むかたちで実施した。そのため、工事受注業者である㈱三和工務店の土工管理と資材提供を受けた。

平成 24 年１月 26 日から始まった調査は、断続的に実施しながら翌平成25年１月16日には終了した。最終的な調査面積は、東条１号墳が 92㎡、屋敷の下遺跡が 60㎡である。

以下、調査の経過を記す。

11 月 26 日　降雨。伊賀農林・株式会社三和工務店と現地打ち合わせ。

11 月 27 日　調査開始。表層部は重機にて除去。北西部で須恵器壺と蓋が出土。また、六文銭状態に並べられた須恵器が出土（埋葬施設１）。北壁部分に石列を確認（埋葬施設３）。

11 月 28 日　埋葬施設１の墓壙輪郭を確認。中央部に土層観察用の断ち割りを実施。大刀を確認。墓壙内に棺の据方を確認。埋葬施設１の東にもう１基の埋葬施設を確認（埋葬施設２）。上部に須恵器甕・横瓶など。墓上祭祀か。埋葬施設２の棺内に鏡および須恵器提瓶などを確認。埋葬施設３は横穴式石室と判明。

伊賀農林と現地にて今後の取り扱い協議。現地説明会の開催を決定する。

11 月 29 日　埋葬施設１の大刀および鉄鏃周辺の精査。埋葬施設２の棺内調査。鏡は四獣鏡と判明。鏡付近から勾玉・管玉類、さらに、やや北部から銅釧と多量の小玉を確認。墓壙内の遺物出土状況写真の撮影。実測基準点を配置する。東条地区の区長さん宅へ状況説明に伺う。

11 月 30 日　埋葬施設の実測。埋葬施設１の刀下からも鉄鏃出土。埋葬施設２の勾玉・管玉は、首飾り状態と判明。遺物の取り上げを開始。

現地説明会開催の段取り。資料提供準備。

12 月３日　玉類の取り上げ。埋葬施設２の土層図作成、その後に土層畦外し。畦下から刀子出土。墓壙の完掘写真撮影。遺構の全体実測。

12 月 16 日　午前中に実測補足作業。丘陵裾部にも遺物の散布を確認(屋敷の下遺跡西地区)。一部調査。

午後、現地説明会の開催。224 名の参加。丘陵裾で遺物の展示と全体解説。道が細いため、古墳には適宜上がってもらう。

１号墳部分の調査終了。伊賀農林に引き渡し。

１月 16 日　屋敷の下遺跡（西地区）の土層図作成。谷状落ち込み内に古墳時代後期の土器多い。他に平安期土師器など。

b　遺跡の取り扱い

東条１号墳の発掘調査は、工事中の不時発見に伴って実施した。この結果、極めて貴重な副葬品を伴う古墳であることが確認された。一方、当該工事は地すべり対策として実施されるものである。

この２点を踏まえ、当センターと伊賀農林とで協議を行った。その結果、東条１号墳を現地保存するのは極めて難しいため、工事はそのまま着工すること、調査区外に大部分が及ぶ埋葬施設３については、現状のまま保存すること、当該遺跡の資料整理およびその他の必要経費は、次年度以降の執行委任により県農林水産部が負担することで合意した。

c　調査成果の普及・公開

現地説明会　工事中の不時発見に伴って急遽実施した調査であったが、内容が極めて豊富な古墳であることが判明した。そのため、現地説明会を開催する

写真４　現地説明会の様子

必要があった。一方、工事自体も期間の切迫が懸念されていた。

これを踏まえ、当センターと伊賀農林とで協議を実施した。開発部局である伊賀農林も、当遺跡の重要性は充分に理解を示された。その結果、12 月 16 日に現地説明会を開催することで合意した。

調査からほとんど間を開けない状態での現地説明会開催となったが、当日は 224 名もの参加を得て盛況であった（写真４）。

その他の公開普及　平成 25 年２月 11 日には、地元の伊賀市府中公民館で「東条１号墳と伊賀の後期古墳」と題した報告会を開催した。約 30 名の参加があった。

県公共事業にかかる発掘調査の成果報告会である「おもろいもん出ましたんやわ@三重 2012」（平成 25 年３月９日開催）で、当遺跡出土資料の展示や、パワーポイントによる説明を行った。また、「同 2013」（平成 26 年３月 15 日開催）では、保存処理の終了した遺物を展示し、解説を行った。

他には、当センターの普及連絡誌である『三重県埋蔵文化財センター通信みえ』No.53（平成 25 年１月発行）に記事を掲載している。

ｃ　文化財保護法等にかかる諸通知

上述のように、東条１号墳は新発見遺跡、屋敷の下（西地区）は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲拡大である。それぞれの遺跡にかかる文化財保護法（以下、「法」）の諸通知は、以下により行われている。

【東条１号墳】

・法第 97 条第１項にかかる遺跡発見通知（県教育長あて県知事通知）

平成 24 年 11 月 22 付、賀農第 660 号

・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知（伊賀警察署長あて県教育長通知）

平成 25 年１月 25 日付、教委第 12-4429 号

【屋敷の下遺跡】

・遺跡発見通知

平成 26 年 10 月９日付、賀農第 699 号

・遺跡範囲拡大通知

平成 26 年 11 月 26 日付、教埋第 302 号

３　発掘調査と記録の方法

ａ　掘削の方法

調査は工事立会形式である。表層部を重機により除去し、以下は人力掘削を行った。屋敷の下遺跡（西地区）については、掘削終了後に確認したため、断面観察をしたに止まる。

ｂ　地区設定と遺構番号

調査地は、東条１号墳と屋敷の下遺跡（西地区）の２地点である。いずれも工事立会形式での調査であるため、地区設定は行っていない。遺構番号は、埋葬施設毎に付与している。

ｅ　遺構図面

東条１号墳では、古墳全体の図を 1/50 で作成し、個別の埋葬施設は 1/10 で作成した。また、玉類など微細な遺物に関しては、1/1 での作図を行った。屋敷の下遺跡（西地区）は、土層断面図の作成を 1/50 で作成した。

なお、調査地点の工事は、任意座標によって施工されており、国土座標基準点は配点されていなかった。そのため、発掘調査段階では任意座標をもとに記録を作成し、国土座標の配点を平成 25 年度の測量委託業務として実施した。

測量委託業務は、オープンカウンタによる見積徴収の結果、株式会社弘洋コンサルタンツが落札して実施した。

ｆ　遺構写真

調査の状況は、35㎜のモノクロ・スライドで撮影し、６×７のブローニーも適宜撮影した。また、副葬品の出土状況は４×５でモノクロおよびスライドの撮影を行っている。この他には、デジタルカメラ

で適宜撮影している。

4　整理作業とその方法

a　遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

出土遺物は、発掘調査担当者が報告書掲載用遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測図を作成した。未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納した後に、専用収蔵庫へと搬入した。報告書掲載遺物については、それぞれ１枚づつラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。

出土遺物は、整理の結果をもとに、報告書掲載分および参考資料としての保管分（Ａ遺物）と、報告書未掲載分（Ｂ遺物）とに区別して保管している。

b　図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレース図類については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真をデジタルカメラで撮影した。遺物写真の撮影は、報告書掲載資料全てではなく、掲載資料のうちの主立ったものとした。

c　記録類

以上にかかる発掘調査の記録類は、調査関連図面（平面図･土層断面図など）、調査日誌、写真類（フィルムおよびデジタル画像）がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで保管している。

5　出土遺物の分析と保存処理

今回の発掘調査では、記録保存の一環として、遺跡の性格解明のための分析と、脆弱遺物に関する保存処理を実施した。実施したのは平成25年度である。

分析対象は、東条１号墳埋葬施設２から出土した鏡の横に遺存していた木片の樹種同定である。また、保存処理は東条１号墳出土の金属製品（鉄刀･鉄鏃･刀子・鏡・銅釧）である。これらを一括して発注した。

一般競争入札（最低価格）方式による入札の結果、株式会社吉田生物研究所が受託し、実施した。

（伊藤）

Ⅱ　遺跡と周辺の諸環境

1　位置と地形

東条１号墳および屋敷の下遺跡は、行政上は三重県伊賀市東条字屋敷ノ下に位置する。伊賀市と名張市を含めたこの地域は「伊賀地域」と呼ばれている。「伊賀盆地」の名も知られているように、山に取り囲まれた盆地地形をなしている。

伊賀盆地は、現在の河川認識では木津川の上流部にあたる。木津川は京都府南部に至って淀川へとつながり、大阪湾へと注ぐ。三重県域東部の河川は、伊勢湾から太平洋へとつながるのに対し、県域西部にあたる伊賀地域の河川は淀川を経て大阪湾から瀬戸内海へと至る。このことからも、三重県内での伊賀地域とは、近畿地方とのつながりが深い地域として認識できるであろう。

伊賀地域を流れる木津川は、大きくは木津川本流と柘植川・服部川の２水系に区分できる。柘植川・服部川は、現在の河川認識では木津川の支流となるが、伊賀地域内では木津川本流の規模と大きく変わらない。柘植川と服部川は東条地区の西方約２㎞で合流し、またさらに２㎞西の地点で木津川本流とも合流する。この３河川が合流する地域には、伊賀盆地では広めの低位段丘が広範囲に形成されているところである。

木津川・服部川流域は、伊賀盆地のなかでも北部にあたる。そのため、伊賀北部地域とも呼ばれる。伊賀北部地域は、有史以前には古琵琶湖が広がっており、服部川の流域では300万年ほど前の足跡化石（ゾウなど）が確認されている。

東条１号墳のある丘陵は、柘植川北岸部に形成された段丘を望む位置にある。古墳の標高は約185ｍ、近隣の川寄りの水田地は標高約145ｍである。

2　歴史的環境

伊賀北部地域を中心とした当地の歴史的諸環境について、既存の調査や資料をもとに概観する。今回の東条１号墳ほかの発掘調査成果を踏まえ、弥生時代以降の状況に限定して見ていくこととする。

写真５　東条１号墳から南方を望む

a　弥生時代の伊賀北部地域

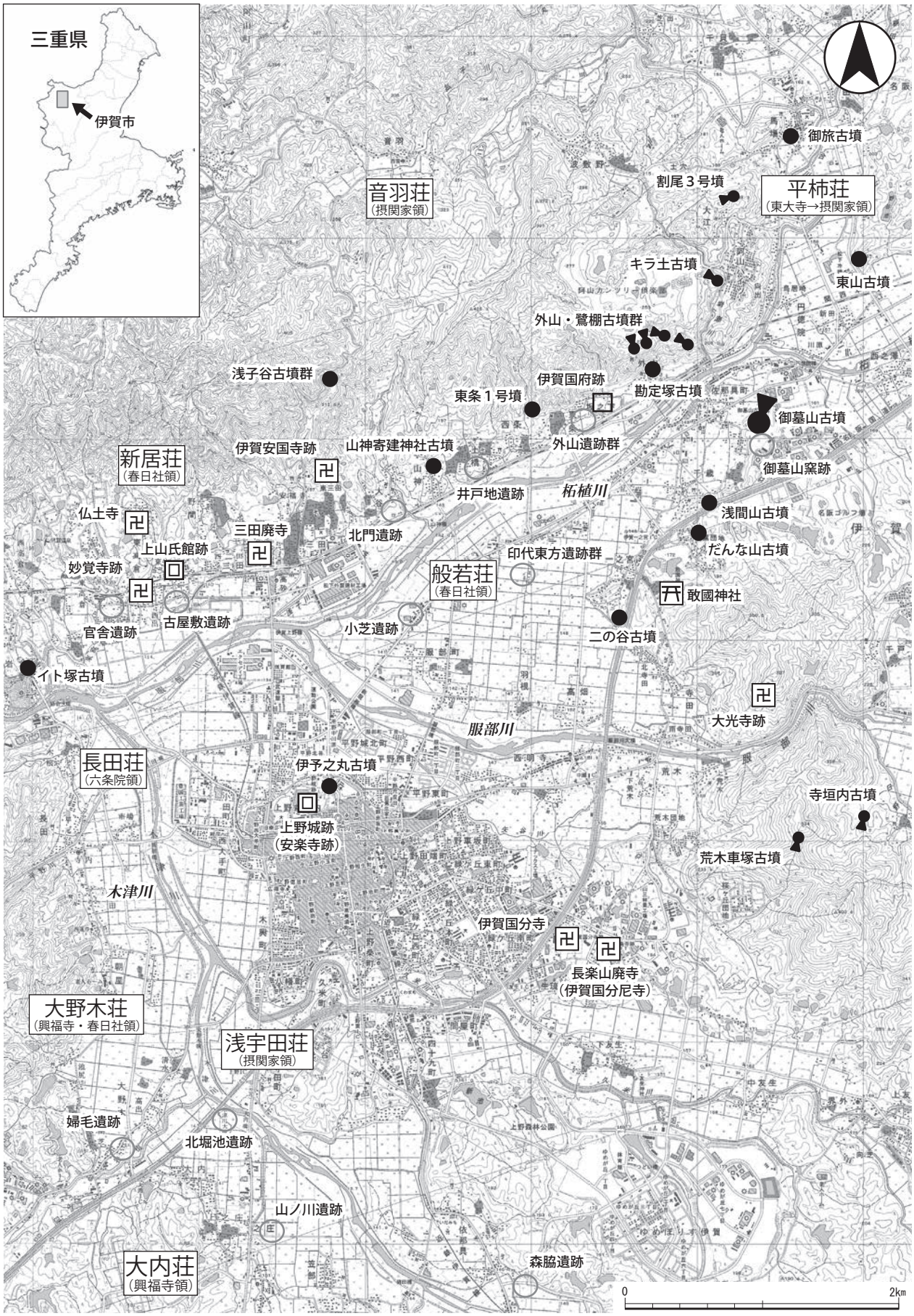
木津川を通じて近畿地方と通じる伊賀地域は、弥生時代以前の段階でも近畿地方とのつながりが強い。総じて伊賀地域の弥生土器は、東海地域との共通性も有するが、大和・山城・近江といった近畿地方との関係の方がはるかに強い。代表的な弥生時代遺跡としては、小芝遺跡（前･後期）、山ノ川遺跡（後期）、印代東方遺跡群（中･後期）、森脇遺跡（中期）などがある。伊賀の弥生時代としては、拠点となるような大規模遺跡が未だ明確ではなく、各期ごとに遺跡が散在する状況と考えられている。

これらの遺跡から出土する土器類の傾向としては、大和地域および近江地域との関係が大きい。大和・近江ともに、個性的な地域色を有する土器類を生産している。一方、伊賀地域の土器類は、大和や近江とは明らかに異なる地域色を発現しているわけではない。当時の伊賀地域が置かれた状況をよく表しているといえる。

b　古墳時代の伊賀北部地域

伊賀北部地域では、古墳時代に至ると伊賀地域の中でも代表的な古墳が造作される。それは、とくに中後期段階で顕著となる傾向がある。

古墳時代前期では、その初期に東山古墳が造作されている。柘植川北岸の丘陵上に造作されたこの古墳は、墳裾も明瞭ではない直径15ｍ程度の円形墳だが、舶来の四神鏡や銅鏃が副葬されていた。



第１図　遺跡位置図（国土地理院『月ヶ瀬』『島ヶ原』『上野』『伊勢路』）（１：40,000）

次いで三角縁三神二獣鏡の出土で知られる山神寄建神社古墳がある。直径30ｍ程度の円墳であろうか。この古墳は柘植川・服部川・木津川の３河川が合流する盆地低地部を望む位置にあり、当時の中核的な古墳であったと考えられる。

これらの古墳は、墳形が円墳であること、いずれの規模もさほど大きくないことなど、伊賀北部地域の同時代が、他を抜きんでるほど強大な勢力を輩出しなかったことを物語っている。

状況が一変するのが中期である。中期前葉には、全長約180ｍの御墓山古墳が造成される。御墓山古墳は伊賀最大の前方後円墳である。その他にも、柘植川北岸部の丘陵上に、外山１号墳・鷺棚１号墳などの前方後円墳が造成される。中期前方後円墳がこれほど集中するのは伊賀地域内でもとくに北部で顕著な傾向といえる。

伊賀北部地域を特色づける、古墳時代中期末から後期前半にかけての特徴に、鏡を副葬した小規模古墳が数多く確認できることが挙げられる。第１図には鏡を出土した古墳を示しているので、それに基づいて概観しておく。

イト塚古墳は、木津川と服部川との合流地点に近い北岸丘陵部にある。６世紀前半頃の古墳と考えられている。墳形は不明。変形四獣鏡の可能性がある鏡が出土している。

伊予之丸古墳は、服部川と柘植川の合流地点に近い南岸丘陵上にある。円墳・方墳を含む４基ほどの古墳をまとめてその名を付与されたと見られる。５世紀後半から６世紀前半頃の古墳があり、四禽鏡が出土している。

二の谷古墳は、服部川と柘植川に挟まれた丘陵南側にある。やはり複数基がまとめられてその名が付与されているようである。変形四獣鏡と四禽鏡が出土している。５世紀後半から６世紀初頭頃の古墳群と考えられる。

だんな山古墳は、柘植川南岸の丘陵部に位置する。墳形は不明で地点も不明確。変形六神鏡、捩文鏡のほか、鏡片がもう一点出土している。ただし、出土地点が明確ではないため、これも複数基分の古墳に伴う遺物である可能性が残されている。

浅間山古墳は、だんな山古墳の東部にあたる。やはり墳形は不明で、古墳の地点も不明確。六鈴鏡の出土が伝えられるが、これも要検討とされている。

キラ土古墳は、柘植川北岸の丘陵部にある。全長50ｍほどの前方後円墳で、６世紀前半頃の築造と考えられる。乳文鏡が出土している。

本書で報告する東条１号墳を含め、柘植川・服部川・木津川の合流地点を取り囲むように、７基（前期の２基を含めれば９基）の古墳に鏡が副葬されていることになる。当地域の特色としてよいであろう。

古墳時代後期を中心とした群集墳は、柘植川北岸部の丘陵上に数多く展開している。発掘調査された浅子谷古墳群は、横穴式石室墳や小石室墳を埋葬施設とした９基の古墳で構成されていた。

古墳時代後期後葉の代表的な古墳に、勘定塚古墳がある。柘植川北岸部で、東条古墳群の東方約１㎞にあたる。墳丘・石室ともに損壊著しいが、玄室幅3.6ｍの巨大な横穴式石室を有している。

このように、伊賀北部地域では古墳時代を通じて多彩な古墳の造成が見られる。極めて重要な地であることを示している。

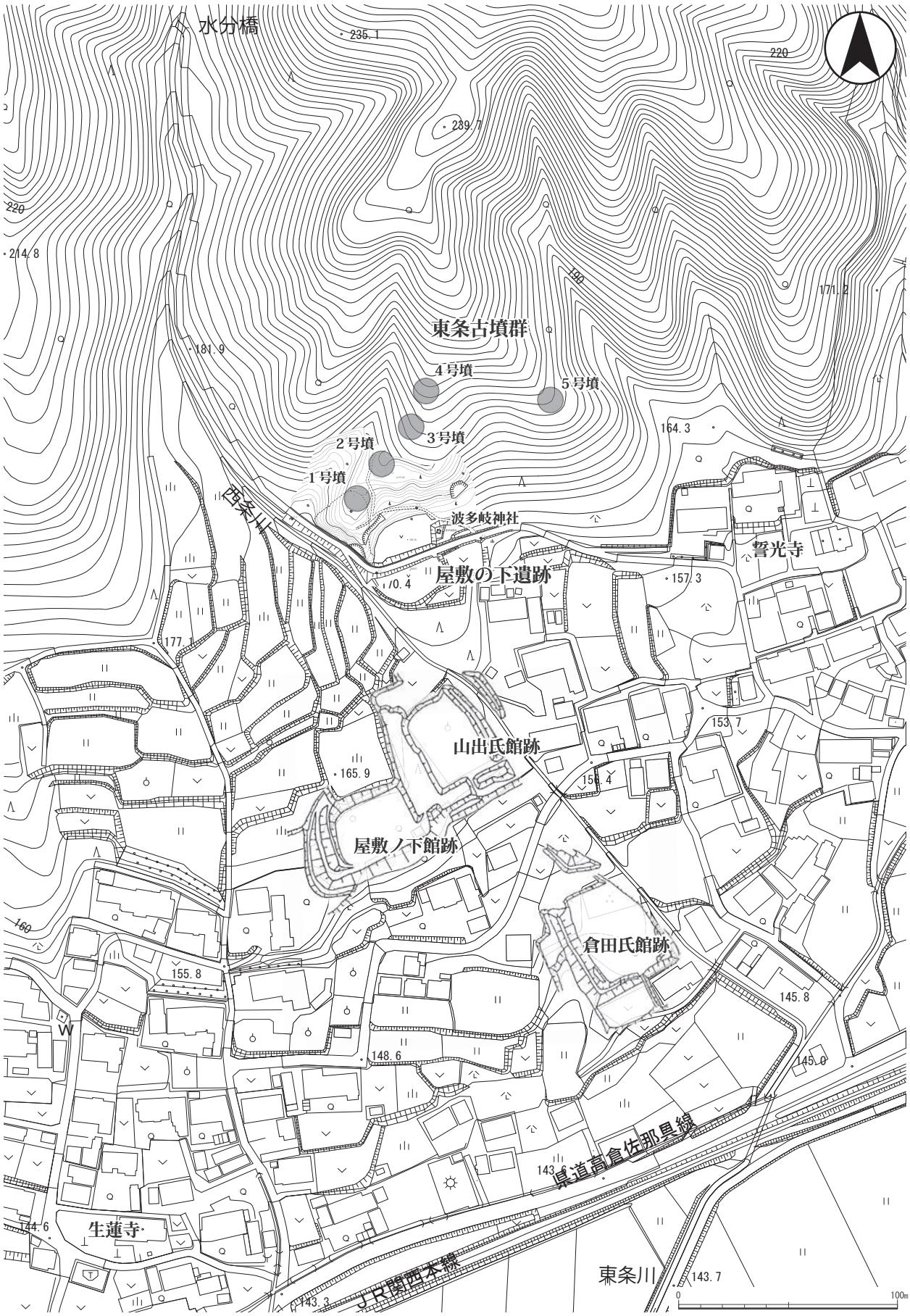
ｂ　古代の伊賀北部地域

古代の伊賀北部地域は、伊賀国阿閉郡にあたる。『倭名類聚抄』には柘植・川合・印代・服部・三田・新居の六郷が記載されている。東条古墳群の付近は、伊賀国府所在地と同じ印代郷に比定されている。

この時期の当地を考える上で重要なポイントは、官道と伊賀国府、そして駅家である。五畿七道の制が実施されて以降、伊賀国は東海道に含まれる。なかでも伊賀国は、東海道の最西端（つまり最も畿内に接した位置）にあたり、その玄関口である。

「道」そのものの観点からすれば、平安時代前期の仁和２（886）年以降の東海道は、平安京（京都）から近江・鈴鹿峠を経て伊勢北部へと至るルートとなったが、それ以前の東海道（以下、「初期東海道」とする）は伊賀北部を経由していた。現在の伊賀市外山地区で確認された伊賀国府跡は、初期東海道沿いに北接して造成されている。東条古墳群の東方約400ｍと至近距離である。

初期東海道沿いには、それと関連する遺跡が点在する。『続日本紀』和銅四（711）年一月丁未（２日）条に登場する伊賀国新家駅は、かつての新居郷地内



第２図　東条古墳群・屋敷の下遺跡周辺地形図（１：2,500）

である現在の伊賀市東高倉周辺と考えられている。残念ながら遺跡の特定には至っていないが、官舎遺跡や古屋敷遺跡はその関連遺跡として注目できる。

伊賀国新家駅想定地から東進すると、山田寺式軒瓦の出土で著名な三田廃寺がある。そこからさらに東進すると、井戸地遺跡・北門遺跡など奈良・平安時代の集落跡が点在している。伊賀国府跡の南西部に広がる外山遺跡群は、伊賀国府と密接に関連した集落跡と考えられている。

伊賀国府跡の南方約1.5㎞には、伊賀国一宮である敢国神社があり、さらにその南方３㎞には伊賀国分寺・国分尼寺（長楽山廃寺）がある。この３者は概ね一直線上にあり、国府～一宮～国分寺という、国府中枢域の主軸の有り様が見て取れる。

なお、伊賀北部地域は、古代豪族・阿閉（敢）氏の拠点とされている。伊賀国一宮が敢国神社であることや、当地に伊賀国府が設置されていることなど、伊賀国のなかでも北部地域は、古代国家との関係が深い地域と見ることができよう。この状況は、基本的には古墳時代まで遡り得るものと考えられる。

ｃ　中世の伊賀北部地域

平安時代後期から鎌倉時代になると、伊賀北部の各地で荘園が増加する。伊賀といえば東大寺領荘園が著名だが、伊賀北部では興福寺・春日社領を含む摂関家領や六条院領などの王家領が目立つ。かつて新居駅家があった地域は、春日社領新居荘であった。平安時代末期には服部川中流域の六条院領平田荘が平氏の拠点となり、平氏宿老の平家貞や、その子息である平田家継らが勢力を振るった。

この一方、宗教的な要地もこの時期に増える。浄土信仰の進展に起因すると見られる補陀洛寺や、それと相俟った熊野信仰の進展を示すと見られる高倉神社の造立もこの時期に遡ると考えられる。また、大光寺・妙覚寺といった『西大寺諸国末寺帳』に記載される律宗系寺院のほか、仏土寺などの大規模寺院もこの時期に成立していると考えられる。

南北朝期の抗争を経て室町戦国期には、当地にも足利幕府の影響が及ぶ。14世紀中葉に全国に造立された安国寺は、東条古墳群の西方約２㎞の地に建立された。

伊賀国には守護として仁木氏が入部した。伊賀国は他地域に比べて比較的独立性の高い小規模領主層が多かったためか、室町期守護による地域支配はあまり進展しなかったが、古屋敷遺跡に近い上山氏館跡が伊賀守護の館とされている。

上山氏館跡を含めた伊賀北部地域では、「土符」と呼ばれる独特の遺物が集中して確認されている。土符は、年月日・花押のほかに「米」などの文字が刻まれた状態で焼かれた陶器質の焼き物である。15世紀代を中心とした時期に集中することから、伊賀守護も関与した、伊賀北部地域を中心とした徴税に関わる遺物として注目されている。

このように、中世後期（室町戦国期）の伊賀北部地域は、前代より継続して伊賀国の中枢として機能していたと考えられる。

ｄ　近世の伊賀北部地域

織豊期から江戸期にかけての近世に至ると、柘植川南岸地域の動向が際だってくる。豊臣政権期に伊賀へ入部した筒井氏は、伊賀上野城の前身を築造する。関ヶ原の戦いを経て伊賀国を拝領した藤堂氏は、筒井氏時代の上野城を大改修し、ここを伊賀支配の中枢とした。

ｅ　伊賀北部地域の意義

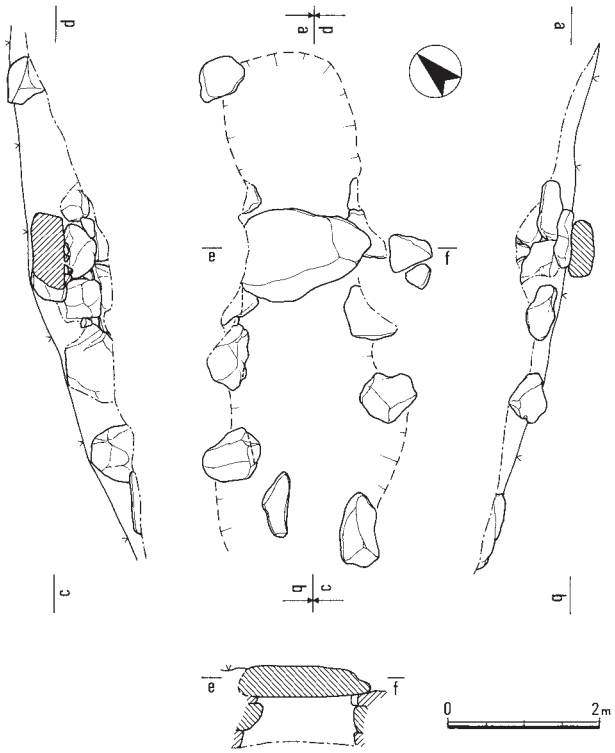
伊賀北部地域の動向を概観した。この結果、室町戦国期以前の当地は柘植川北岸部にその中心があり、織豊期以降は柘植川南岸にその中枢が移動することがおぼろげながら見えてくる。いずれにしても伊賀北部地域は、近世以前においても伊賀国の中心的な地域であったことがわかる。

3　東条古墳群と屋敷の下遺跡

東条古墳群と屋敷の下遺跡近隣の状況について、第２図を基に見ておく。

東条古墳群　東条古墳群は、今回の発掘調査に伴う分布調査によって新たに発見された古墳群である。東条地区西部の丘陵、南に派生する尾根筋に４基（１～４号墳）、東に派生する尾根筋に１基（５号墳）の、計５基で構成されている。

４号墳は直径10ｍ程度の小規模墳で、横穴式石室が開口している（第３図）。尾根筋の異なる５号墳は、同じく10ｍ程度の墳丘で、背後には周溝が見られる。墳丘形状から、１号墳と同様の木棺直葬



第３図　東条４号墳　石室実測図（１：100）

写真６　東条４号墳（南から）

写真７　東条３号墳上の石仏

墳と考えられる。

屋敷の下遺跡　屋敷の下遺跡は東条地区の３ヶ所に分散していた（Ａ～Ｃ地区）。東条古墳群の発見に伴い、今回の調査地点が新たに屋敷の下遺跡に含まれることになった（Ｄ地区）が、平成26年度の調査により、Ｃ・Ｄ地区を含めて「屋敷の下遺跡（西地区）」と把握されることとなった。

屋敷の下遺跡には、いくつかの削平段がある。東条２号墳の東側は、墳丘の一部を破壊して東西約18ｍ、南北約８ｍの「Ｌ」字形に成形された区画がある。また、東条３号墳の位置には、室町期と考えられる石仏と五輪塔残欠が見られる（写真７）。東条４号墳脇には「秋葉三尺坊」と刻まれた石碑がある。

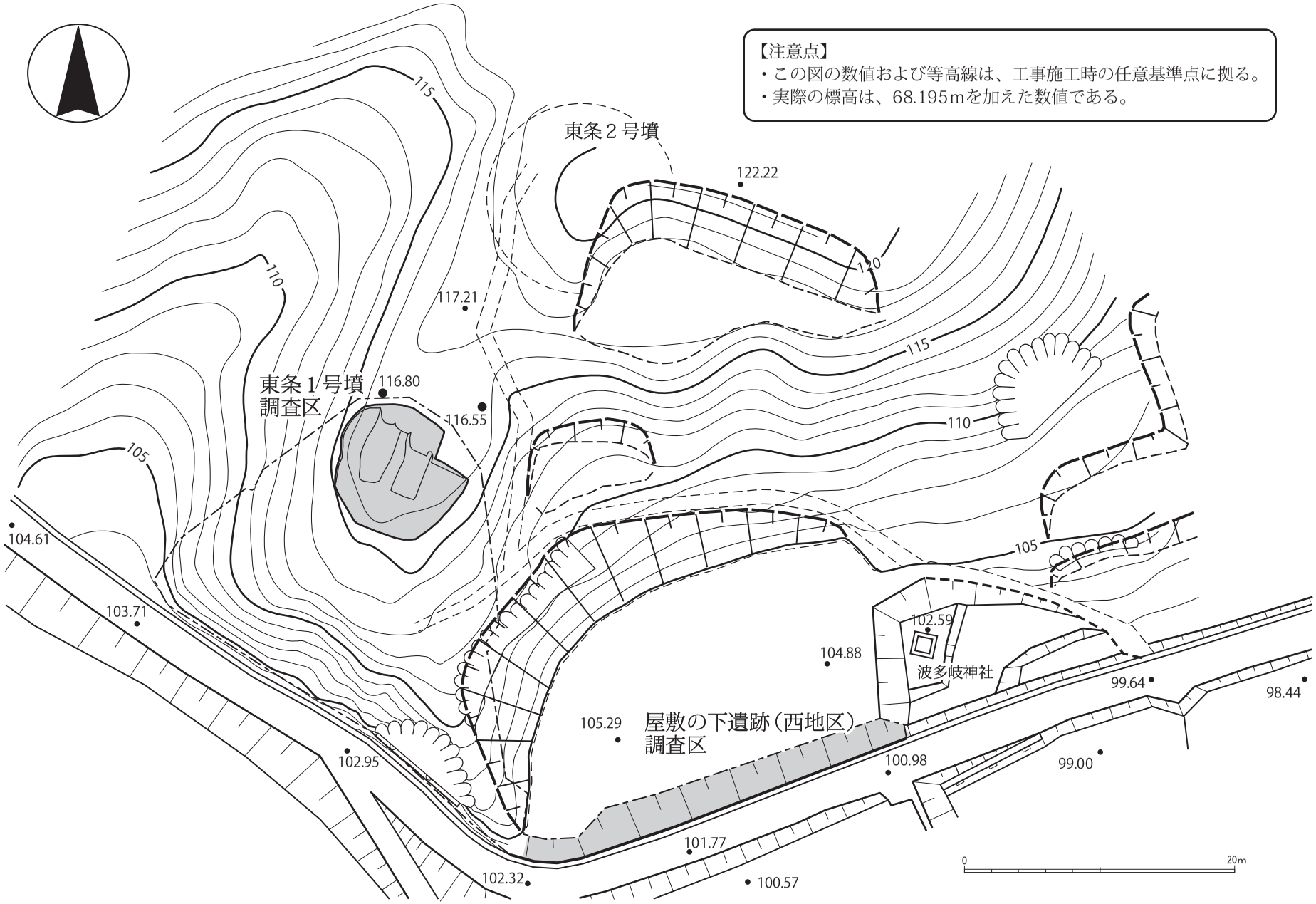
丘陵裾部には小祠がある。地図では波多岐神社と記載されている。また、この付近には菰枕（こもまくら）神社があったと伝えられる。これらのことから、屋敷の下遺跡（西地区）は、中世以降の寺院を中心とした宗教施設が含まれていると考えられる。

地元での聞き取りに拠れば、周辺には「トノモト」「カマノシタ」「ミヤノシタ」といった地名があり、「セイコウ寺」という寺院があったという。現在の東条にある誓光寺の前身寺院であろうか。近世前期に菊岡如幻によって作成された『伊水温故』（貞享４・1687年刊）では「盛弘寺」とある。

屋敷の下遺跡の西側には、山出氏館跡・屋敷ノ下館跡・倉田氏館跡などの小規模方形城館が連なる（第２図）。宗教施設とあわせ、様々な施設が密集していた地であることが分かる。　（伊藤）

【参考文献】

・伊賀市編『上野市史』考古編（2005年）。
・伊賀市編『伊賀市史』第１巻通史編古代中世（2011年）。
・『三重県の地名』（日本歴史地名大系24、平凡社、1983年）。
・木下良編『古代を考える　古代道路』（吉川弘文館、1996年）。
・『続日本紀』（新訂増補国史大系、吉川弘文館）。
・三重県埋蔵文化財センター『婦毛遺跡（第２次）発掘調査報告』（2012年）。
・三重県埋蔵文化財センター『沖打越１号墳・沖打越中世墓発掘調査報告』（2012年）。
・三重県埋蔵文化財センター『浅子谷古墳群発掘調査報告』（2012年）。
・三重県埋蔵文化財センター『古屋敷遺跡発掘調査報告』（2013年）。



第４図　調査区位置図（１：400）

Ⅲ　遺構

1　調査区周辺の地形環境

a　立地と地形

東条古墳群は、伊賀市の東条地区北西にあたる丘陵中にあり、５基で構成される。古墳群は南に派生する小尾根上に展開しており、今回調査した１号墳はその南端にあたる。

古墳群が展開する尾根の西には西条川が南流し、東条地区と西条地区の境になっている。東条地区の標高は 150～160 ｍで、古墳群はそれよりも 20～40 ｍ高い丘陵内にあたる。

b　地質の状況

当地は花崗岩およびその媒乱土で構成されている。表土直下には黄褐色系粗粒砂が認められ、花崗岩の媒乱土と考えられる。岩盤は非常に脆く、崩れやすい。したがって、後述の古墳石材は、当地で採集したものではなく、近隣から持ち込まれたと考えるのが妥当である。

丘陵裾部の屋敷の下遺跡（西地区）付近では、地山として青灰色系の粘性を帯びたシルト層が確認できる。これは基本的には第四紀完新世以降の堆積層と考えられる。現在の東条地区集落域は、小規模ながら西条川が形成した扇状地に相当するため、それに伴う堆積土と見られる。

2　東条１号墳

【東条１号墳概要】
・直径約 11 ｍの円墳。
・埋葬施設は３基。中央に割竹形木棺直葬２基、北部に横穴式石室１基。
・木棺直葬は６世紀前半、横穴式石室は同後半。

a　調査前概況

１号墳は､工事中に新たに発見された古墳である。調査前には、丘陵先端部がやや丸みを帯びた地形になっていたが、古墳と断定するには至らなかったものである。

古墳の東側には山道が通っていた。山道の周辺には 50cm 大の石材を数点確認していたが、それが横穴式石室の部材かもしれないという可能性を認識したのは、調査途中であった。

墳丘の南側、全体の 4/5 が事業地内で調査対象となり、北端部は事業地外である（第４図）。

b　墳丘

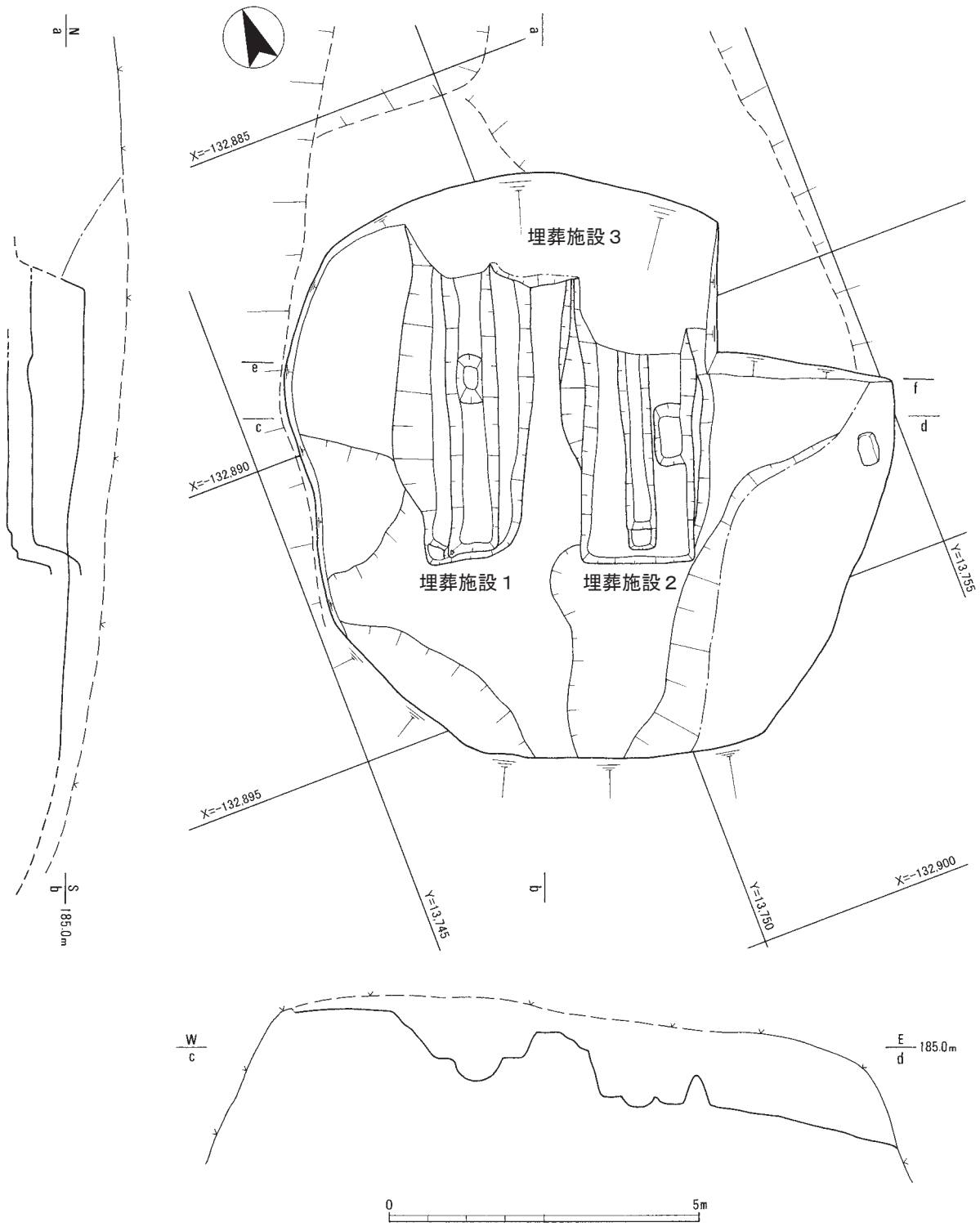
【規模と周溝】　南に派生する小規模な尾根上の、標高約 185 ｍの位置にあたる。古墳は尾根の南端部で、南側は急峻な崖となる。すなわち、１号墳からの眺望はすごぶる良い。

工事中の不時発見であるため、墳丘測量は実施していない。幅 10 ｍ程度の尾根いっぱいを墳丘としているものと考えられる。調査地のすぐ北側にはわずかな落ち込みが確認でき、周溝の一部と考えられる。調査の結果を踏まえその規模を推定すると、東西約 10 ｍ、南北約 11 ｍのやや楕円形を呈した円墳と判断した。尾根幅そのものが 10 ｍ程度であるため、周溝は北側の高い部分にのみ堀切状に開削されているのではないかと考えられる。

【墳丘盛土】　墳丘の状況を、調査区東西土層（第６図）から観察する。また、模式的に表現したものを第７図に示している。調査前段階の墳頂部は比較的平坦であったが、実際に調査をしてみると、古墳築造地点の基盤層は東に傾斜していることがわかった（第７図）。

第６図第 29～31 層は墳丘構築以前の旧表土および地山である。墳丘盛土に相当するのは第２～４層である。埋葬施設２と旧表土（第 29 層）との関係を見ると、墳丘盛土構築以前に墓壙が掘削されていることがわかり、墓壙埋め戻し後に墳丘の構築がなされると見ることができる。つまり、盛土は後述の埋葬施設１・２の墓壙を埋設した後に形成されていることになる。

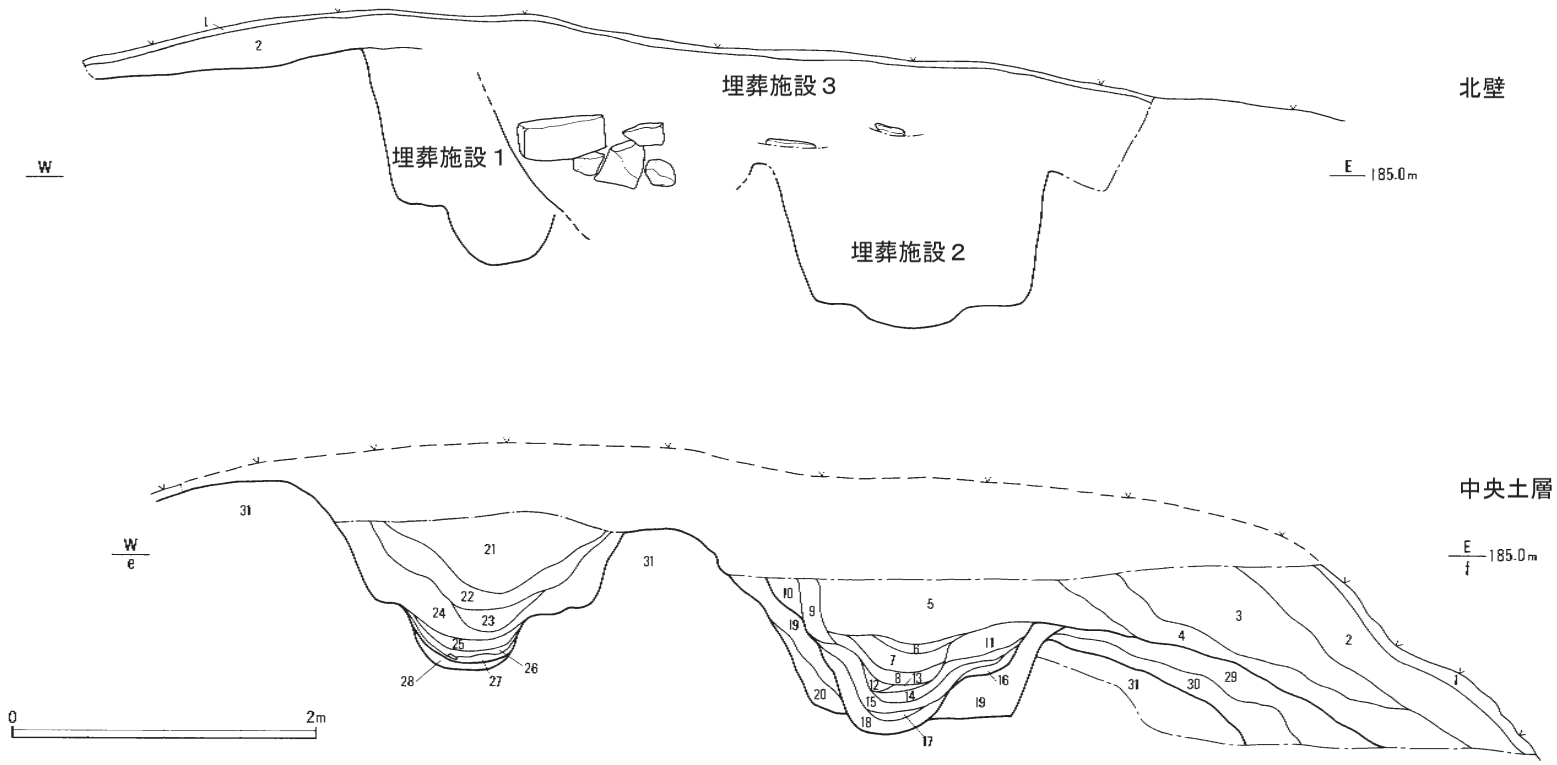
とすると、埋葬施設１・２の掘削時の墳頂部は極めて不安定な斜面であったことになる。なお、第２～４層の一部は後述の埋葬施設３（横穴式石室）に



第５図　東条１号墳調査区全体図（１：100）

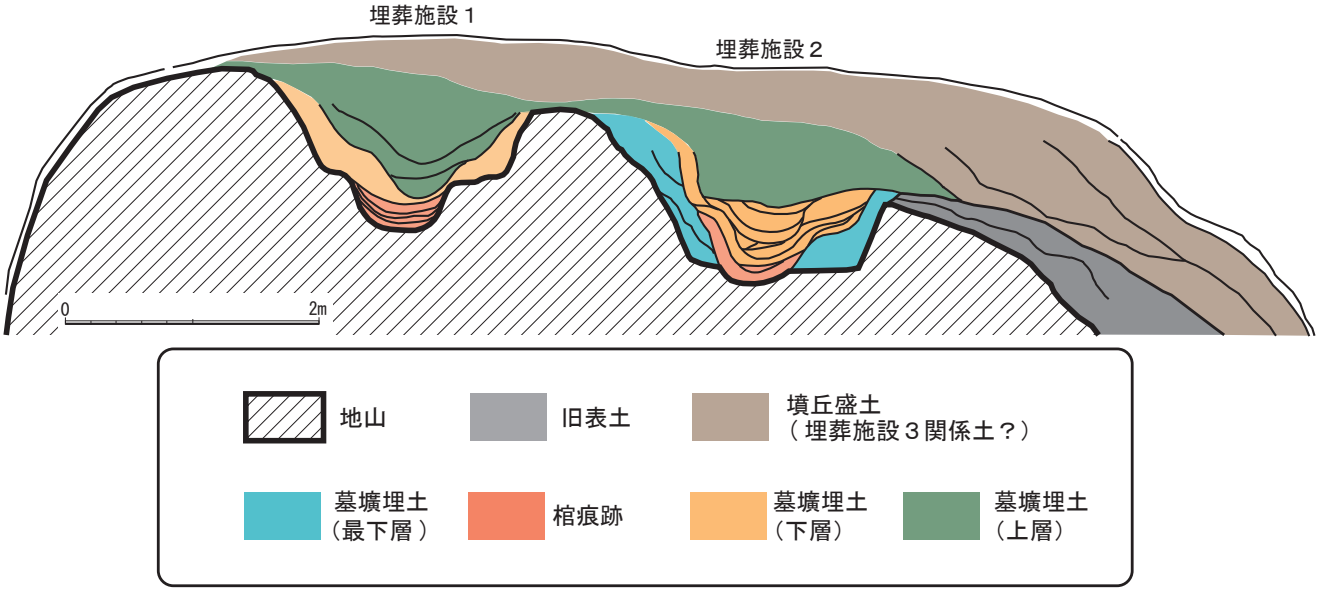
伴う盛土の可能性がある。

埋葬施設１・２の段差は大きく、埋葬施設２の東に見られる旧表土が西側に向かってどのようにつながっていくのかが想定できない。現状では、埋葬施設１と同２との間に存在していた段差をそのまま活かして埋葬施設１・２が構築され、比高が低い埋葬施設２の上を中心に盛土を施したのか、あるいは古墳構築時に段差は存在せず、その後に発生した地滑りなどによって埋葬施設１・２間に段差が生じたのか、いずれかであろうと考えておく。



1　表土
2　黄褐色シルト質細砂、小礫含む　10YR5/6
3　明黄褐色シルト質中砂　10YR6/8
4　黄褐色シルト質粗砂　10YR5/6
5　にぶい黄褐色中粗砂　10YR5/4
6　明黄褐色中粗砂、シルト含みやや粘質　10YR6/6
7　黄褐色中細砂　10YR5/6
8　にぶい黄褐色中細砂、地山ブロック含む　10YR4/3
9　明黄褐色中粗砂　10YR6/8
10　黄褐色粗砂　10YR5/6
11　記入漏れ
12　黄褐色シルト質中細砂　10YR5/6
13　褐色中粗砂　10YR4/4
14　にぶい黄褐色シルト質中細砂　10YR5/4
15　にぶい黄褐色シルト質細砂　10YR5/3
16　黄褐色中粗砂、シルトブロック含む　10YR5/6
17　黄褐色中細砂　10YR5/8
18　黄褐色シルト質細砂　10YR5/6
19　褐色土、シルト・地山ブロック含む　10YR4/4
20　明黄褐色粗砂　10YR6/8
21　にぶい橙色土、砂・地山ブロック含む　7.5YR6/4
22　黄褐色土、砂・地山ブロック含む　10YR5/6
23　明褐色土、地山ブロック粒含む　7.5YR5/6
24　にぶい黄褐色粗砂　10YR5/4
25　明黄褐色中粗砂　10YR6/6
26　にぶい黄褐色中細砂、地山ブロック含む　10YR5/3
27　明黄褐色シルト質中砂　10YR6/6
28　褐色土、地山ブロック多い　7.5YR4/6
29　褐色土、粘土・砂混じり（旧表土）　10YR4/4
30　褐色土、砂混じり　10YR4/6
31　明黄褐色～黄橙色岩盤（花崗岩媒乱）　10YR7/8・10YR6/6

第６図　東条１号墳土層断面図（１：50）



第７図　東条１号墳墳丘断面模式図（１：600）

【周溝】　前述のように、調査区外北側にわずかな落ち込み地形がある。これを周溝と判断している。周溝は墳丘を全周せず、標高の高い北側のみを堀割状に区画していると想定される。

ｃ　埋葬施設１

【概要】　墳丘中央西側に設置された、割竹形木棺の直葬墓である（第８図）。北端部は調査区外。埋葬施設２と並列し、埋葬施設３よりも古い。副葬品およびそれに関わる遺物は、棺内・墓壙内棺外・墓壙上の３地点に区分できる。

【墓壙】　最大幅約 2.3 m、最深約 1.3 mで、長さは 5.5 mまで確認している。かなり大規模な墓壙といえる。平面形は長方形だが、短辺部はやや不整である。掘削面から約 70cm（標高約 184.8 m）の高さで平坦面を形成し、その後、棺据形として幅約 80cm、深さ 25～50cm をその中央付近に掘削している。

棺据形の中央付近と思われる位置に、長さ約 70cm、幅約 40cm、深さ約 10cm の小土坑がある。小土坑内からの出土遺物は無く、排水を目的とした施設と考えられる。

【棺】　棺据形の断面形状から、割竹形木棺と考えられる。棺据形の全体を棺と見なした場合、木棺の全長は確認範囲で 4.6 mとなる。実際には 5.0 mを越える長さと考えられる。棺の直径は、土層断面の形状から約 70cm と考えられる。

棺据形の南木口部分は微細な段がある。当初は木棺の木口形状を示すかと考えたが、掘形下部にこの段が及ばないため、別物と考えられる。

【墓壙・棺内埋土】　墓壙および棺内の土層は、大きくⅠ～Ⅲの段階に区分できる（第６・７図）。

Ⅰ段階は第 25～28 層で、棺内に相当する埋土。第 27 層中に副葬品が見られるので、第 28 層は棺底の整地土、第 26・27 層は棺そのものの腐朽に伴って形成された層と考えられる。第 25 層は棺蓋の腐朽土と上部埋土が混じった層と考えられる。

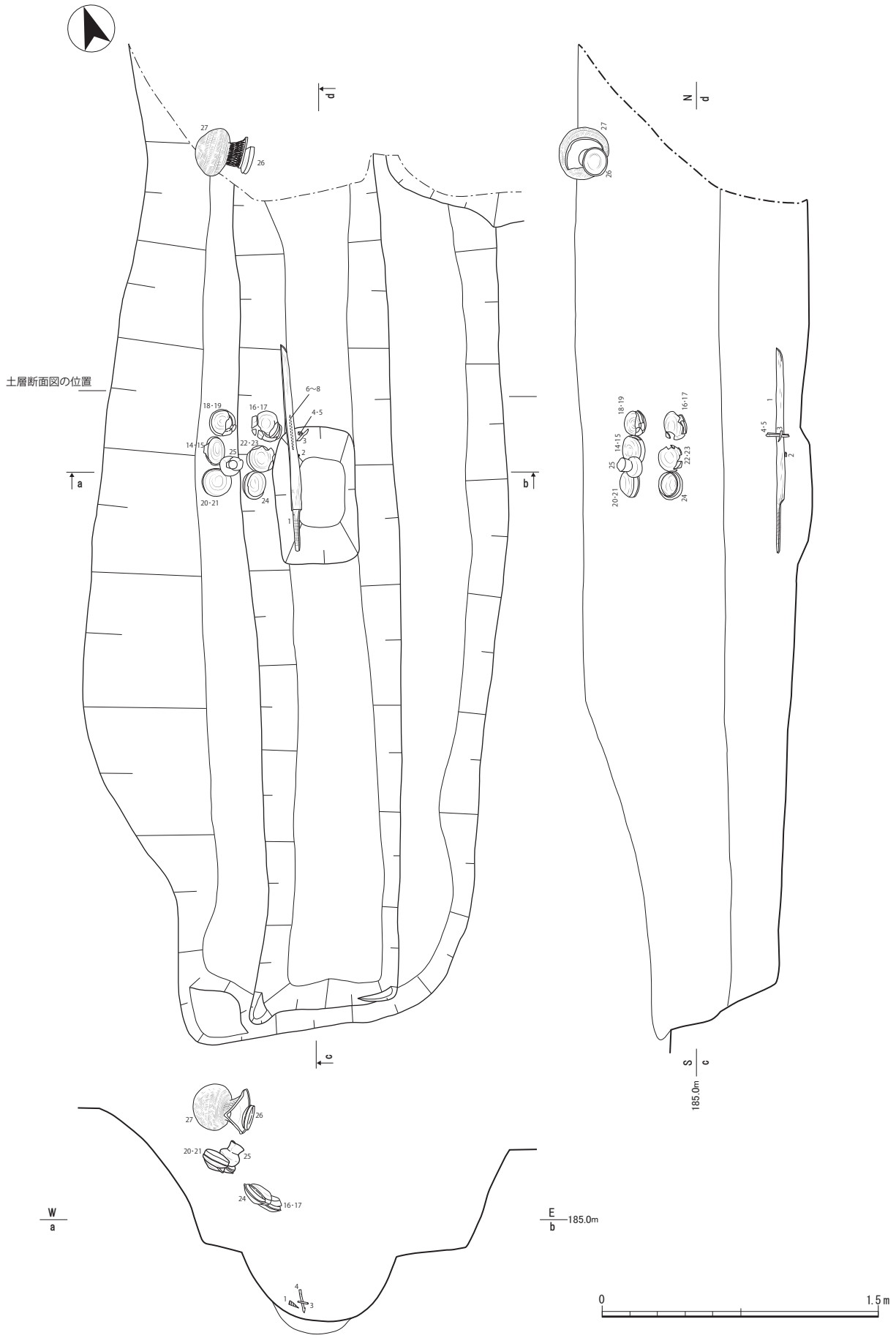
Ⅱ段階は第 24 層が該当する。棺を覆う埋土である。この段階で一度中断があり、後述の「六文銭祭式」が行われていると考えられる。

Ⅲ段階は第 21～23 層が該当する。墓壙を完全に埋める土である。第 21 層の埋め立て後に、墓壙上に須恵器が置かれていると考えられる。

【副葬品】　上記埋土の段階にあわせ、３段階の副葬品が伴っている。

棺内　Ⅰ段階に伴うのは、棺内の副葬品である。棺中央西寄りに鉄刀が添えられるが、その下には鉄鏃が、刃先を刀の柄部方向に向けて３本置かれていた。また、鉄刀の中央付近には、一部直立するように３本分の鉄鏃が出土した（写真８）。刀よりも上から出土した鉄鏃は、刃先が揃わずに出土している。このことから、この鉄鏃は棺蓋上に置かれていたものが、棺の腐朽に伴って転落したものと推測できる。

鉄刀は、刃先を北に向けており、刃部は東にやや傾いていた。棺底に近い位置であるため、遺体の脇に添えられるようにして副葬されたと考えられる。



第８図　東条１号墳埋葬施設１平面・立面図（１：30）

写真８　鉄刀と直立して出土した鉄鏃（写真中央）

写真９　須恵器出土状況（埋葬施設１）

なお、鉄刀刃先の方向から、遺体は南枕であったと考えられる。

棺外墓壙内　Ⅱ段階に伴うのは、棺外墓壙内の遺物である。遺物は第22層内であるが、出土状況から、第24層上面に並べられたと考えられる。

出土したのは「六文銭祭式」[1]と呼ばれる状態のものである。すなわち、須恵器蓋坏を六文銭状態に並べ、さらに中央南寄りに土師器小形壺(25)を置いている。須恵器蓋坏は、南東隅のもの(24)のみ坏身単独で、他は蓋と身が一組になっていた。なお、22・23の一組を除き、他は焼成時の組合せと合致している。

一群となって出土したこの土器群は、東側の列３組分が下に傾いて出土している。棺の腐朽に伴って転落したと考えられる（写真９）。

墓壙上　Ⅲ段階に伴うのは、墓壙上に置かれた遺物である。墓壙上北端部で、横転した須恵器壺(27)と、その蓋として用いられていたと考えられる須恵器坏蓋(26)が出土した。遺物は、第21層に相当する層からの出土である。

須恵器壺(27)は口縁部が意図的に打ちかかれており、仮器化されたものと考えられる。

【構築時期】　埋葬施設１の須恵器類は、田辺昭三氏による陶邑編年[2]（以下、「田辺編年」）のTK10型式のうち、やや古い段階に併行すると見られる。概ね６世紀前半代の築造と考えられる。

ｄ　埋葬施設２

【概要】　墳丘中央東側に設置された、割竹形木棺の直葬墓である（第９図）。北端部は調査区外。埋葬施設１と並列し、埋葬施設３よりも古い。副葬品およびそれに関わる遺物は、棺内・墓壙内棺外・墓壙上の３群に区分できる。

【墓壙】　最大幅約1.8ｍ、最深約1.2ｍで、長さは4.6ｍまで確認している。平面形は整った長方形を呈している。法面も垂直に近く、全体として箱形を呈する。掘削面から約1.1ｍのところで平坦面を形成し、その後に棺据形を掘削している。

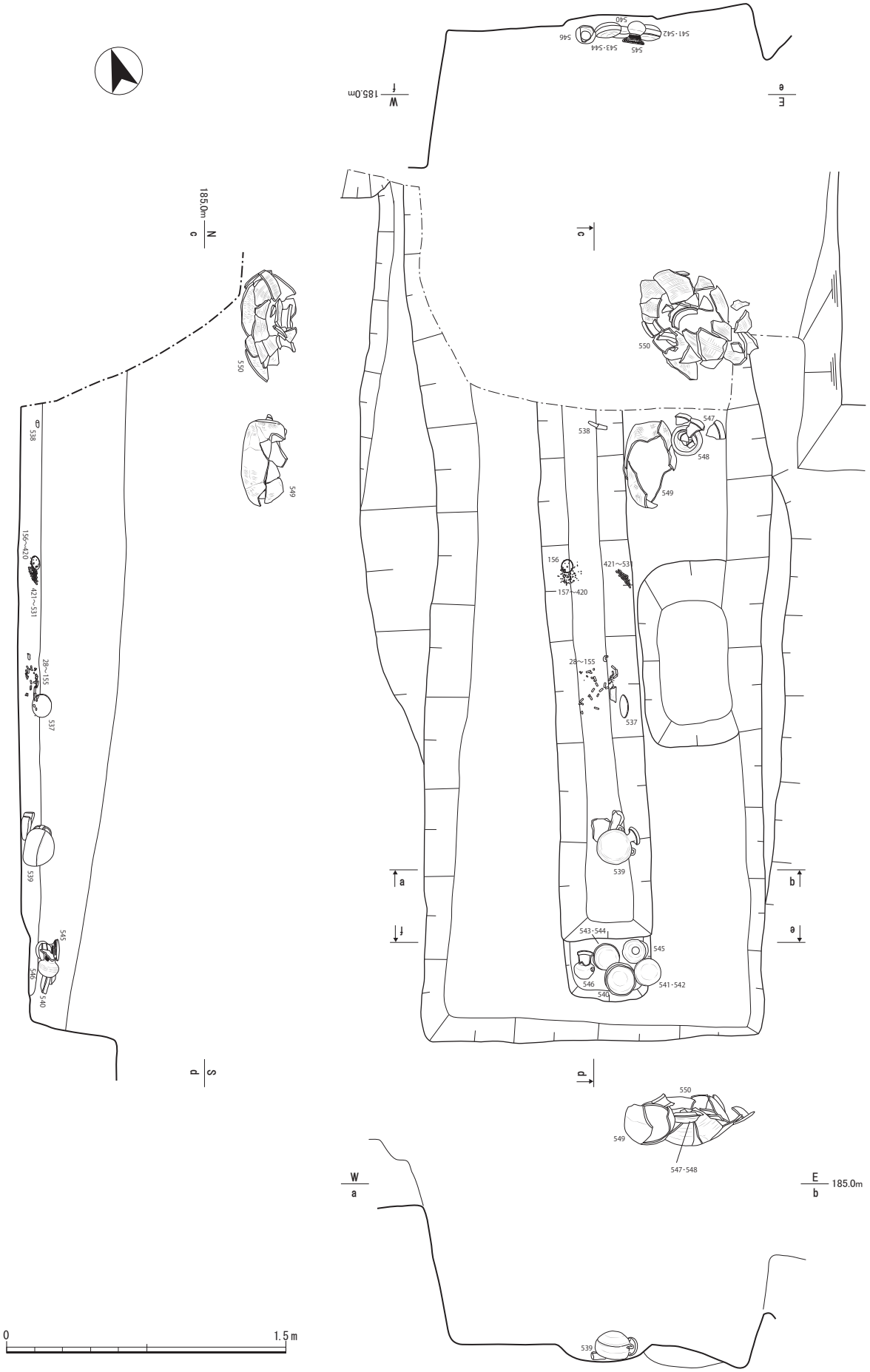
棺据形は墓壙底面の中央にある。墓壙と棺の据形は、完全な平行関係でなく、少しずれている。幅約50cm、深さ15cm程度で、3.3ｍまでの長さを確認している。検出した南端部から約30cmの間は、他の地点よりも５cmほど浅くなっている。これは、実際に据えられた棺と棺据形との隙間に相当すると考えられる。後述の棺外墓壙内に納められた須恵器は、この隙間を利用したものである。

棺据形の東側には、長さ約１ｍ、幅約50cm、深さ約10cmの小土坑がある。小土坑内からの出土遺物は無い。埋葬施設１と同様、排水を目的とした施設と考えられる。

【棺】　棺据形と土層断面の断面形状から、割竹形木棺と考えられる。上述の棺据形の隙間を除き、確認範囲での木棺全長は2.9ｍである。墓壙との関係から、実際には4.0ｍを越える長さと考えられる。棺の幅（直径）は、土層断面から見て70cmほどであったと考えられる。棺底は、北に向かってやや下降している。

【墓壙・棺内埋土】　墓壙および棺内の土層（第６図第５～20層）に関しては、大きくⅠ～Ⅳの段階に区分できる。

Ⅰ段階は第19・20層が該当する。墓壙掘形の下



第９図　東条１号墳埋葬施設２平面・立面図（１：30）

部を中心に埋める埋土である。墓壙を深く掘りすぎたための整地土と考えられる。この層からの出土遺物は無い。

Ⅱ段階は第17・18層で、棺底および棺内に相当する埋土。第17層と第18層の間に副葬品が見られるので、第18層は棺底の整地土および棺そのものの腐朽に伴って形成された層と考えられる。第17層は棺蓋の腐朽土と上部埋土および棺底の腐朽土が混じった層と考えられる。なお、後述する副葬品の出土状況から、埋葬施設２の被葬者は南枕で埋葬されたと考えられる。

Ⅲ段階は第６～16層が該当する。棺を覆う埋土である。棺の上部は、棺の腐朽による陥没に伴って形成されたと考えられる細かな層序が見られる。この層が形成される直前に、棺据形南端に「六文銭祭式」の須恵器が置かれたと考えられる。

Ⅳ段階は第５層が該当する。墓壙を完全に埋める土である。第５層の埋め立て後に、墓壙上に須恵器が置かれていると考えられる。（伊藤）

【副葬品】 上記埋土の段階のうち、Ⅰ段階以外に伴う副葬品がある。

棺内 棺内の副葬品は、Ⅱ段階に伴っている。埋葬施設２棺内からは、埋葬施設１とは対照的に装身具が多く出土した。墓壙内出土遺物は概ね原位置を留めており、首飾りや腕輪といった装身具の配置から、被葬者は南に頭を向けて埋葬されたと推測することができた。

棺の南端付近からは須恵器提瓶が出土した。被葬者の頭上にあたる。提瓶の横からは、幅10cm弱の川原石が出土した。川原石の出土は他では見られないため、提瓶に伴うと考えられる（写真10）。おそらく提瓶は、埋葬時には口縁部を上に向けて納められ、周囲に川原石を配して安定させたものと考えられる。

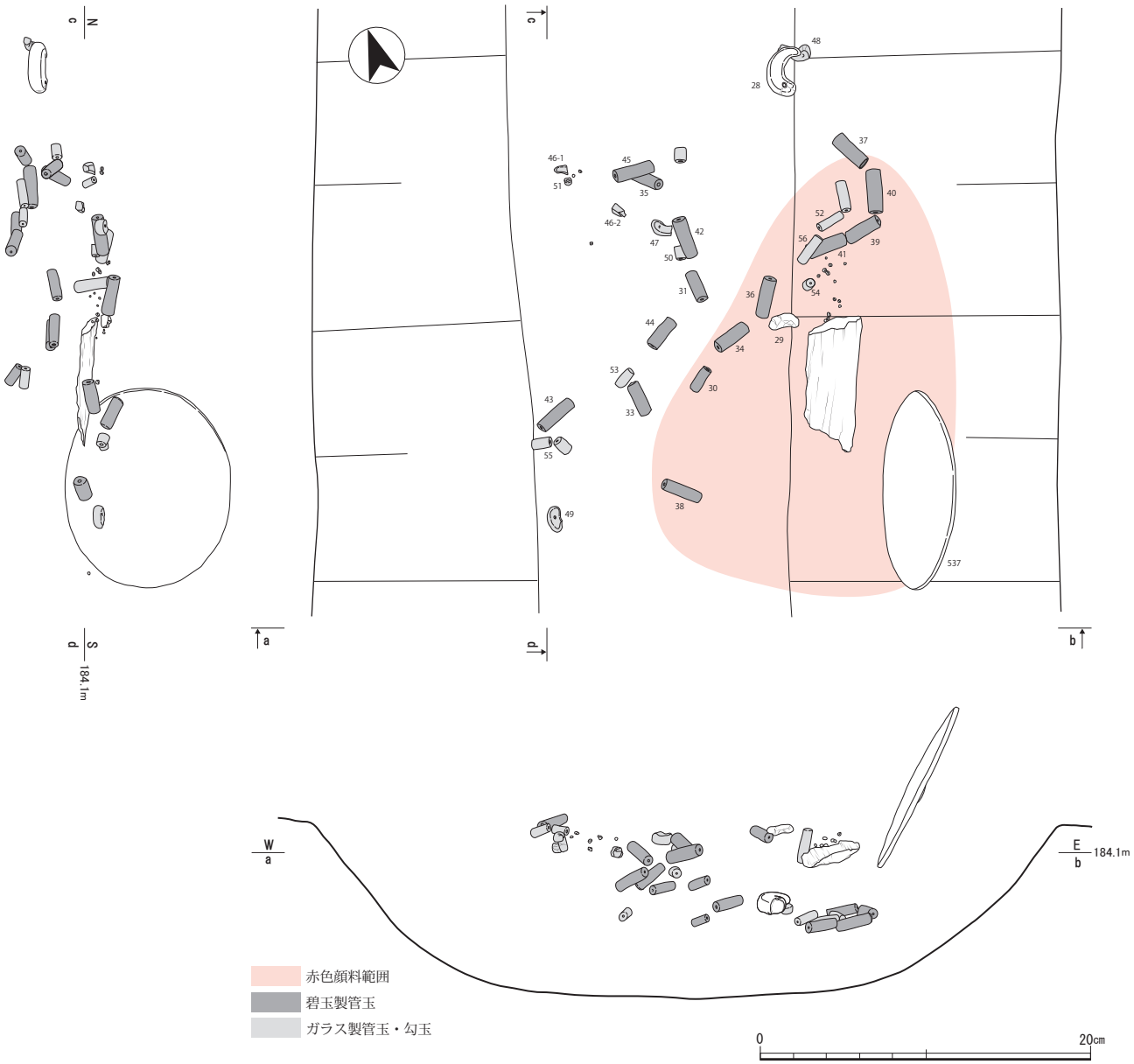
被葬者の首から胸にかけての範囲からは、鏡１面・木棺の残片・玉類（首飾り）が出土した。鏡、木棺片やガラス製小玉の一部には赤色顔料の付着が確認されたことから、胸部を中心に顔料が散布されていたと考えられる。

鏡は被葬者の頭部右側から出土した。出土状況は、鏡面を顔側に向け、やや外側に傾く状態であった（第10図、写真11）。鏡背面に赤色顔料が付着していることから、鏡は顔料の散布後に納められたことが推測される。なお、鏡面には平織物の付着が見られた。したがって鏡面は露出していたわけではなく、布状の容器か袋に収納された状態で副葬されたと考えられる。

写真10　提瓶出土状況（埋葬施設２）

写真11　鏡と玉類出土状況（埋葬施設２）

写真12　翡翠製勾玉ほか出土状況（埋葬施設２）

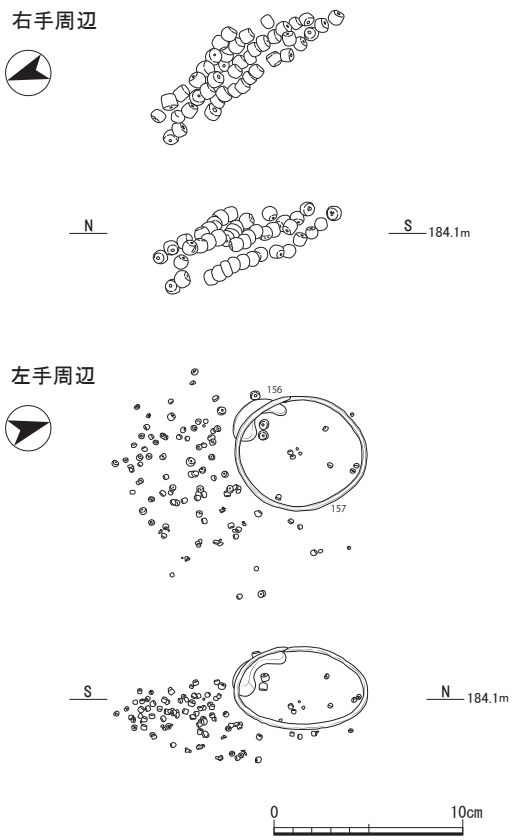


第10図　東条１号墳埋葬施設２鏡・玉類出土状況（１：４）

胸部周辺から出土した装身具は、翡翠製勾玉１点・碧玉製管玉16点・ガラス製勾玉４点・ガラス製管玉７点・ガラス製丸玉６点（重層ガラス１点・コバルト系５点）・ガラス製小玉94点で、これらはいずれも首飾りに伴うものと考えられる。出土状況では、碧玉製管玉列の内側をガラス製管玉列が巡っていたため、首飾りの単位は一連ではなく二連であった可能性が高い（第10図、写真12）。ガラス製勾玉は出土位置にまとまりが認められず、元々点々と配置していたのか、原位置から動いてしまったのかはわからない。ガラス製小玉も同様で、いずれの管玉列に伴うかは不明である。

棺の東壁寄り、すなわち被葬者の右手周辺からは、コバルト系のガラス製丸玉が110点出土した（第11図、写真13）。先述の翡翠製勾玉からは約45cm離れている。丸玉は連珠状に連なって４列並列した状態で検出し、この列は上下２層で確認されたことから、腕輪は手首に４重に巻きつけていたと想定される。なお、ガラス製小玉110点を結ぶと約67cmで、女性の手首に４重に巻きつけることが可能な長さとなる。

棺の西壁寄り、すなわち被葬者の左手周辺からは、銅釧１点・瑪瑙製勾玉１点・ガラス製丸玉７点・ガラス製小玉256点が出土した（第11図、写真14）。先述の翡翠製勾玉からは約50cm離れている。勾玉は、銅釧と重なるように横向きで出土した。ガラス



第11図　東条１号墳埋葬施設２腕輪出土状況
平面・立面図（１：４）

製丸玉･ガラス製小玉は、面的に多量に出土したが、元々は紐に連なっていたものと考えられる。なお、ガラス製小玉を全てつなげると全長約 58.5cm になり、手首には３重に巻きつけることができる。

棺内北中央部からは刀子が出土した。刃先を東に向けている。先述の翡翠製勾玉からは約 1.3 m離れているので、被葬者の足下付近かと思われる。

なお、刀子の付近からはガラス製小玉が３点ほど出土している。これらは足首の装飾に用いられたと考えられる。（相場）

棺外墓壙内　Ⅲ段階に伴う遺物として、墓壙内南端に置かれた須恵器の一群がある。棺の南端にわずかな段差が認められたことと、先述の提瓶が棺内南端に相当するので、この一群は棺外と判断した。

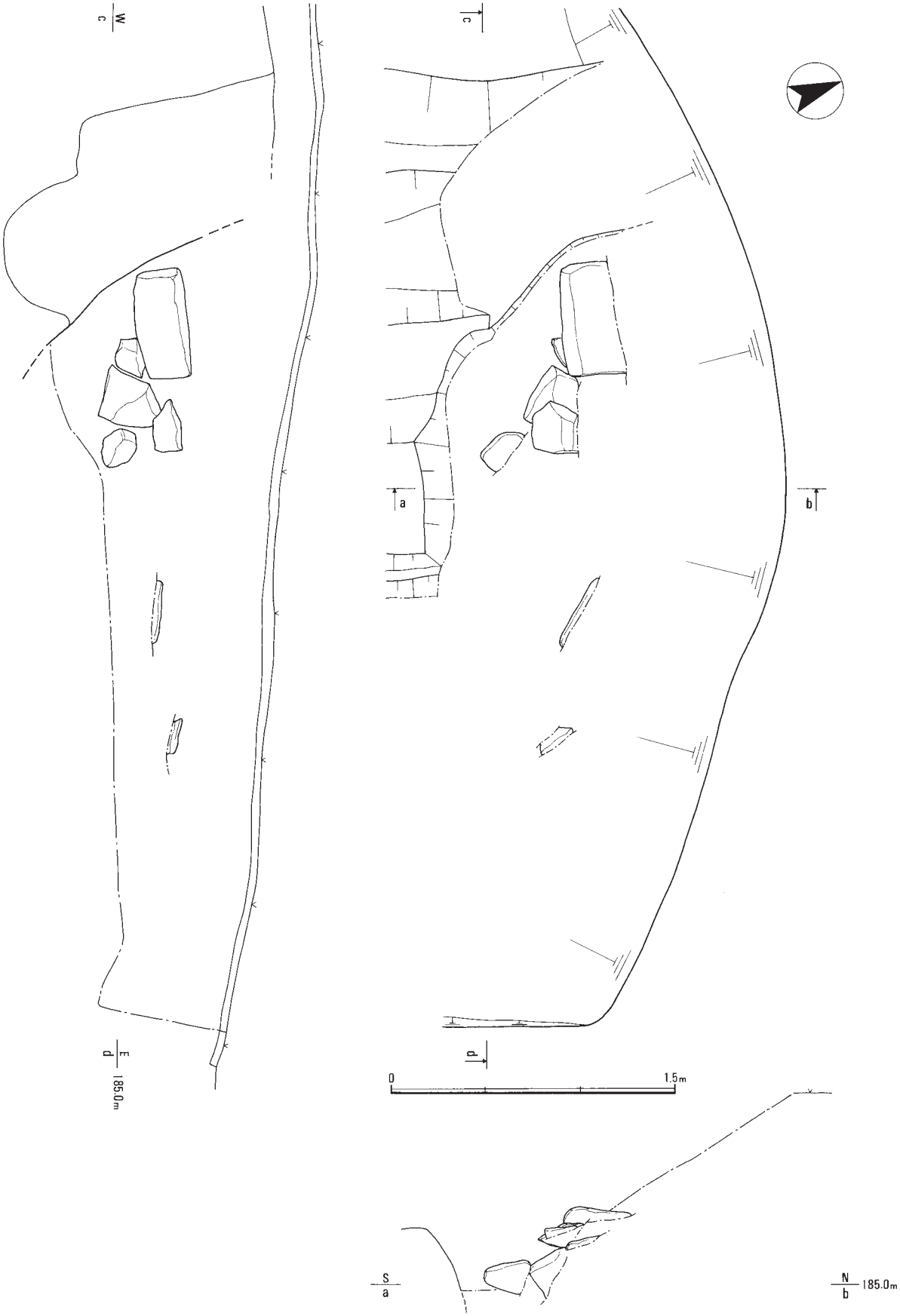
置かれていたのは、須恵器蓋坏３組と瑳２点である。このうち、蓋坏 541・542 の一組は焼成時の組合せではないばかりか、坏身よりもかなり大きな蓋を用いている。また、540 の坏蓋は裏返しの状態

写真13　銅釧と玉類（埋葬施設２）

写真14　銅釧ほか出土状況（埋葬施設２）

写真15　埋葬施設２の南部須恵器群

写真16　墓壙上の土器群（埋葬施設２）



第12図　東条１号墳埋葬施設３平面・立面図（１：30）

で置かれていた。２点の甕は、545 は正立状態だが、545 は口縁部を意図的に打ち欠かれ、横倒し状態であった（写真 15）。

以上のように、埋葬施設１とは異なり、やや異質な様相での収納だが、整えて並べられており、大きくは「六文銭祭式」の範疇で把握できるであろう。

墓壙上　Ⅳ段階に伴う遺物として、墓壙上に置かれた遺物がある（写真 16）。墓壙上に置かれた土器群は、北部に集中し、南部には見られない。ここからは須恵器横瓶と壺が各１点、須恵器蓋坏が１セット出土した。

壺（550）は土圧で潰れた状態の口縁部を上に向けて出土しており、正立状態で置かれたと考えられる。しかし、底部に相当する破片は全く見られなかった。このことから、底部を意図的に打ち欠き、仮器化した状態で置かれたと考えられる。

横瓶（549）は口縁部を上に向けた状態で、やはり正立して置かれていた。口縁部が出土していないが、これは仮器化されたものなのか、それとも後世に紛失したものなのかは不明である。

須恵器蓋坏（547・548）は、横瓶の東脇から出土した。坏身が正立状態で置かれており、蓋がその上に破片となって散らばっていた。坏身は原位置を留めていると考えられるが、坏蓋については何とも言えない。

【構築時期】　埋葬施設２の須恵器類は、田辺昭三氏による陶邑編年のＭＴ15 型式に併行するものもあるが、ＴＫ10 型式に併行するものも見られる。したがって、ＴＫ10 型式に併行する時期に造成されたと考えられる。なお、埋葬施設１と土器型式上は同じだが、埋葬施設２の方がやや新しい様相を含んでいる。したがって、６世紀前半代のなかでも、やや新しい時期の築造と考えておく。

ｅ　埋葬施設３

【概要】　墳丘北部に設置された、横穴式石室である（第 12 図）。大部分が調査区外で、工事に合わせた調査範囲のため、掘削範囲も斜めになっている。埋葬施設１・２よりも新しい。副葬品およびそれに関わる遺物は明確ではないが、墳丘上から出土した須恵器坏蓋がそれに該当する可能性が高い。

【石室掘形】　調査区北壁に近い西側から、南北約 1.3 m、東西約 1.5 mの落ち込みが確認できた。この内側に後述の積まれた石材が見られるので、これが石室の掘形と考えられる。確認できた範囲では、掘形の掘削はかなり強い角度だと見られる。

【石室】　調査範囲が限られているため判然としないが、上記掘形の内側に、積まれた状態の石材が認められる。状況から見て、横穴式石室と判断できる。掘形との関係から、調査区内で確認したのは石室の裏側にあたり、石室の本体は調査区外の北側にあると考えられる。

地形の状況から判断して、石室は東に開口すると考えられる。石材は東西約 2.5 mの範囲に見られる。確認範囲の西側に、幅約 60cm、長さ 30cm 以上、厚さ約 30cm の石材がある。北端部は調査区外に及んでいるが、石材は南北方向を長軸とすることは明らかである。おそらくこの石材が奥壁の一部を構成していると考えられる。

以上の状況から、この石室は大きく見積もっても長軸３m程度の、小形の横穴式石室であると考えられる。

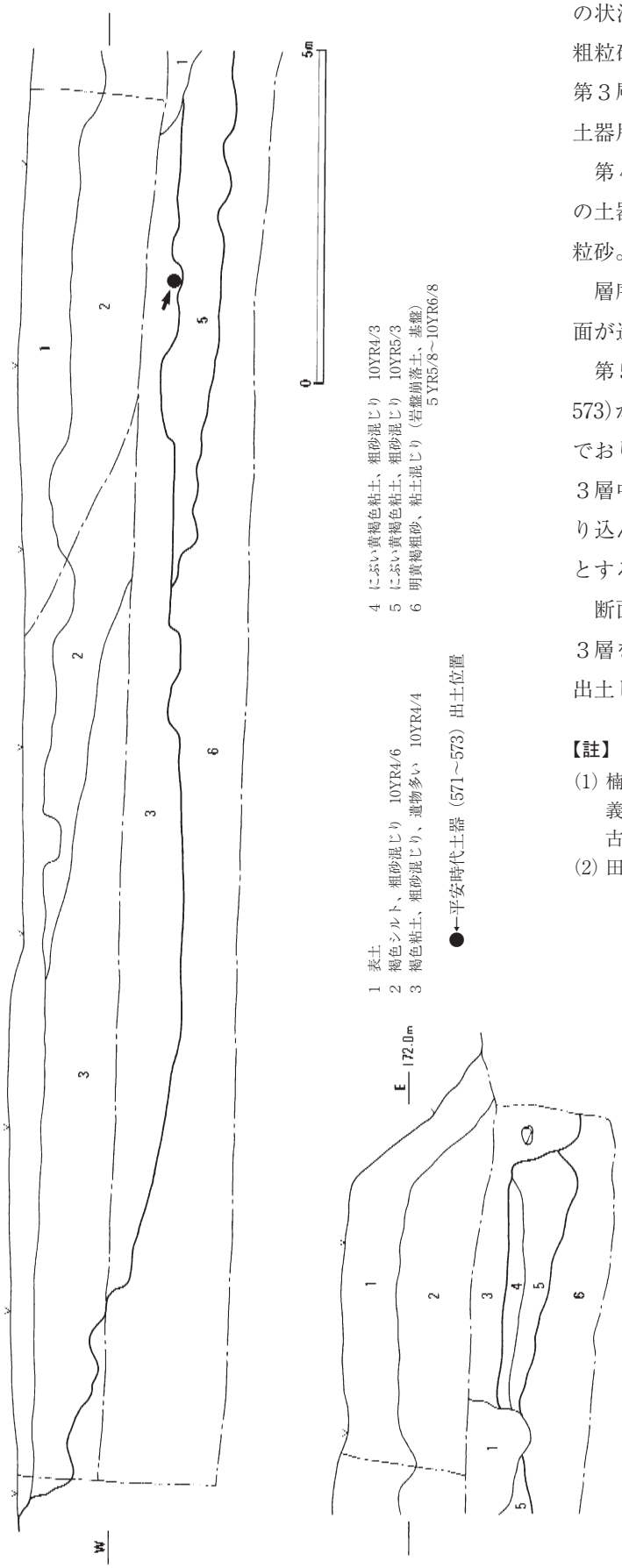
【副葬品】　石室の裏側と掘形を確認したに止まるため、ここからの出土遺物は無い。ただ、工事立会開始直後に出土した須恵器坏蓋は、前述の埋葬施設１・２とは明らかに時期が異なる（第 30 図 551）。したがって、この須恵器が石室に伴う遺物である可能性が高い。

【構築時期】　埋葬施設３に伴う明確な遺物は無い。埋葬施設１・２よりも新しいため、それ以降の築造と考えられる。先述した須恵器坏蓋（551）がこの古墳の時期を示すとすれば、田辺編年の TK43 型式に併行すると考えられる。須恵器の時期としては６世紀後半頃にあたるので、石室の時期としては妥当である。以上により、埋葬施設３は６世紀後半頃の築造と考えておく。

３　屋敷の下遺跡（西地区）

【層序】　屋敷の下遺跡（西地区）は、東条１号墳の南麓にある（第４図参照）。工事がほぼ終了した段階で、法面に土器の散布を確認したため、急遽精査を行ったものである。

確認したのは、谷状の落ち込み地形である。層序



第13図　屋敷の下遺跡西地区土層断面図（1：100）

の状況を第13図で見る。第１層は表土。第２層は粗粒砂を含むシルトで、中世土器片を含んでいる。第３層は粗粒砂混じりの粘土層で、古墳時代後期の土器片を多く含んでいる。

第４・５層も粘土層である。この層にも古墳時代の土器片が含まれている。第６層は粘土混じりの粗粒砂。岩盤の媒乱土で基盤層にあたる。

層序の状況を見ると、第３層下面および第５層下面が遺構面になっていると考えられる。

第５層の上面で、平安時代の土師器坏・皿(571～573)が重なった状態で出土した。完形のものも含んでおり、何らかの遺構に伴うものと考えられる。第３層中で確認した状態となっているが、第３層を切り込んだ遺構の中なのか、あるいは第３層を包含層とする時期の遺構なのかは判然としなかった。

断面観察程度の調査であったにもかかわらず、第３層を中心に、古墳時代後期の土器類が比較的多く出土したことは、注目してよいであろう。　（伊藤）

【註】

(1) 楠元哲夫「六文銭～古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景～」(『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ V、1992 年)。

(2) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1981 年)。

Ⅳ　調査の成果～出土遺物～

今回の調査で出土した遺物には、東条１号墳に伴う遺物として、金属製品類（大刀・鏃・鏡・釧・刀子）、玉類（勾玉・管玉・丸玉・小玉）、土器類（土師器･須恵器）などがある。また､屋敷の下遺跡（西地区）では土器類の出土が見られた。

東条１号墳出土遺物は、埋葬施設１に伴うもの、埋葬施設２に伴うもの、その他、の３つに区分できる。以下、個々の遺物を見ていく。出土地点や属性の詳細は、後掲の出土遺物一覧表（第１～15 表）を参照されたい。（伊藤）

１　東条１号墳埋葬施設１出土遺物

ａ　鉄刀

埋葬施設１から出土した大刀の１は、被葬者の左半身に副えられていた。その際、柄部を頭側、切先をつま先側に向けており、刃は被葬者側を向いていたことから、佩表を上面にした状態だったことがわかる。後述する２が大刀に伴うと見なせることから、１は捩り環頭大刀となる（第 14～17 図、写真図版 17～20・30）。

刀身部および茎部　大刀は全長 112.7cm、刀身部長 91.4cm、最大幅 4.3cm、厚さ 0.9cm、茎部長 21.3cm、最大幅 3.5cm、厚さ 0.85cm で、長刀であることを特徴とする[1]。刀身部に内反りはみられないことから、直刀といえる。先端は緩やかな円弧を描き、フクラを有する。いわゆるフクラ切先である。断面は三角形を呈しており、平造りであることがわかる。関は片関で、直角に浅く切れ込む。茎部は茎元幅がやや広く、茎尻に向かって幅をせばめており、茎尻は直角をなす。茎元には 2.1cm × 0.6cm の方形を呈する茎元抉がみられる。Ｘ線写真によって、茎部には直径 0.5～0.6cm の目釘孔が２ヶ所確認できた。この大刀には茎部および刀身部に木質等の有機物が確認できたことから、柄が装着されていたこと、鞘に収められていたことがわかる。

柄の装具　茎部に木質が残存していたことから、木製柄装具が取り付けられていたことがわかる。その構造は柄全体を一木から作り、柄の背側から溝を彫り込んで、茎部に装着するもので、いわゆる落し込み式による。

茎部への装着後、柄間には糸を隙間なく巻く。以下では葛巻きと呼称する。この上には組紐を柄部主軸に対して斜方向に巻いており、柄頭と柄の間を往復する。以下ではたすき掛けと称する。このたすき掛けを行うことで、柄に菱形と三角形の巻き残りができるが、この部分には赤色顔料を用いて彩色を施す。この朱彩の事例として大阪府峯ヶ塚古墳例が知られている[2]。たすき掛けの後、柄縁と接する部分には、柄と直交方向に組紐を巻く。以下では組紐巻きと称する。なお本例において柄頭は遺存していなかったが、柄頭と接する部分にも同様の組紐巻きが施されていたことが他の事例からわかる。

木製柄　柄縁と柄間を一木で作り出していることが､木目の観察からわかる。柄頭を遺失しているが、本来、柄頭・柄間・柄縁を一木で作り出していたと推定される。茎部への装着は、柄の背側から１条の溝を彫り込む方法が採られている。茎部を柄の溝に落し込んだ後、葛巻きが施される。この際、柄の背側につめ材を用いずに葛巻きを施すため、茎部の背の上に葛巻きが直接のっている。これは捩り環頭大刀においては、通例といえる。ただし、本例では柄頭側において木質らしき有機物がわずかに認められる。この点から、柄木の形状に合わせて、柄頭側のみつめ材を用いた可能性が残る。

柄縁については遺存状態が良好ではないこともあって、形状・幅・厚さ等において柄間と大きな差異は見出せない。他の事例を考慮して、関部から組紐巻きの施された部分までを柄縁としておく。その場合、柄縁の幅は３cm 程度となる。

なお、組紐巻きが途切れる付近において、直線状に加工された可能性をもつ部分が認められる。奈良県布留遺跡の出土例を参考にすると、紐通しのために長方形の孔が穿たれた部分[3]の可能性がある。

葛巻き　柄における有機質の装具として、葛巻き・たすき掛け・組紐巻きの３つがこの順に施される。まず葛巻きは、太さ 1.3～1.5mm の糸を柄間に隙間

なく巻く。この糸の断面を観察すると、内部に直径0.5mmの空洞が２つ並んでいることがわかる。X線写真においても同様の構造が確認できる。この糸は２本の芯に別の繊維を全体に巻いて、１本の糸のようにしている。芯と芯の間にも繊維が観察できることから、横八の字に繊維を巻き付けた後、さらに全体を巻くという構造である。この外側に巻きつけた繊維のために、糸の表面には横方向の筋が無数にみえる。内側・外側の素材は不明だが、これまでの事例・分析から、前者は絹をたばねたもの、後者は麻等の植物繊維の可能性が指摘されている[4]。

たすき掛け　柄間に２周分の巻きが確認できるが、柄頭までの距離から本来３周していたと推測される。すなわち柄縁の佩表側から巻き始めて３周で柄頭に到達し､そのまま折り返してきたと考えられる。

たすき掛けには組紐が用いられている。２間組みと思われるが、残存部が限られており観察が十分ではないため可能性にとどまる。組紐は少なくとも５条確認でき、これらをひとまとまりとして、たすき掛けが施される。紐は太さ1.8mm、厚さ0.5mmである。糸の太さは0.6mmで、右撚り（Ｓ撚り）がかかっているようにみえるが明瞭ではない。したがって糸を引き揃える際や紐を組んだ際に若干の撚りがかかった可能性を考慮しておきたい｡この場合、材質は絹の可能性が高くなる[5]。

柄縁の組紐　たすき掛けの後、柄縁に組紐が施される。組紐は三つ組によって編まれており、紐の太さは幅３～４mm、厚さ２mmで、断面は長方形を呈する。この紐は大刀の長軸に対して直交方向に巻いており、５条確認できる。糸は幅1.7mmで、撚りがかかっているようにみえるが、糸を引き揃える際や紐を組んだ際に若干の撚りがかかった可能性が高い。撚りをかけていないことから、絹を編んだと考えておく。この組紐は､本来柄縁と柄頭に巻かれる。本例は柄頭付近の遺存状況に恵まれないため、柄頭付近での組紐は確認できなかった。

柄縁の平織物　このほか、柄縁において平織物が確認できた。撚りが認められないことから絹で織りだした平絹と考えられる。糸の太さは0.1～0.2mm、密度は16×33本／cmである。柄に伴う装具であるのか否かは明確ではない。

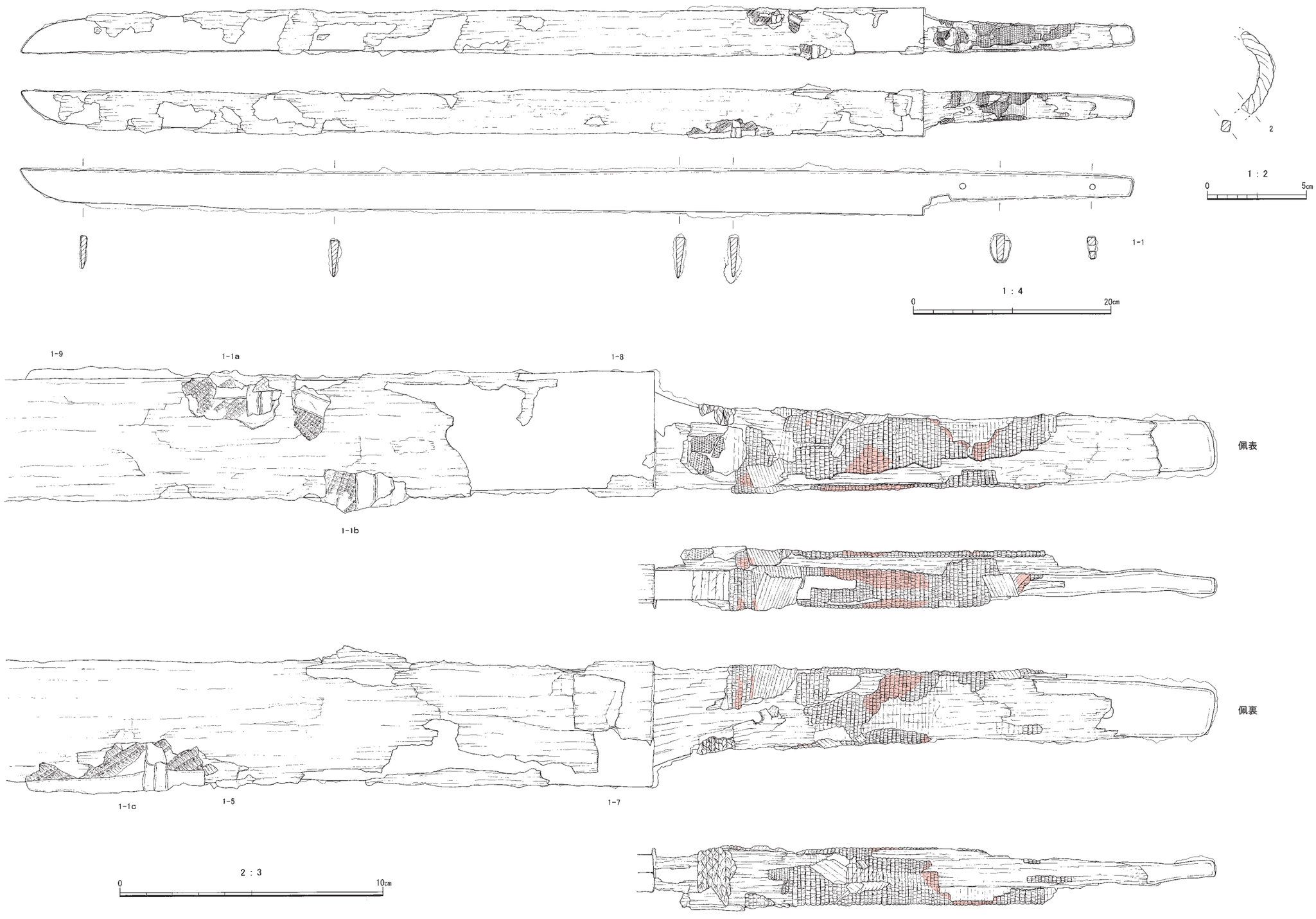
鞘の装具　刀身部の全面にわたって木質が確認できることから、大刀は鞘に収められた状態だったことがわかる。関付近および鞘の破片の状況から、別作りの木製鞘口装具を組み合わせていた可能性が高い。鞘尻に関する手がかりは失われているが、同様に別作りの木製鞘尻装具が組み合っていたと類例から推測できる。

鞘口の構造　関から切先側へ３cmのところでわずかな段が認められ、鞘の破片１－７・８およびX線写真においても確認できる。この点から、鞘口に別作りの木製鞘口装具を組み合わせていた可能性が高い。すなわち、鞘は鞘間全体を２枚合わせにして、鞘口付近を細く削り、別材でつくった鞘口をはめ込む構造だったと推測できる。この場合、鞘口装具の幅は３cmとなり、柄縁の幅と同程度となる。

なお１－７・８の鞘間装具には、鞘口装具をはめ込むために細く削られた枘らしき部分が残る。さらに鞘口装具と鞘間装具の間には幅７mmの隙間が生じており、そこに後述する有機物ＡまたはＤが巻かれていることがわかる。この点から、２枚の鞘間装具を有機物による緊縛・漆による接着の後、鞘口装具がはめ込まれた蓋然性が高くなる。その際、枘部分にも緊縛が及んだため、上記のような遺存状況になったと考えられる[6]。

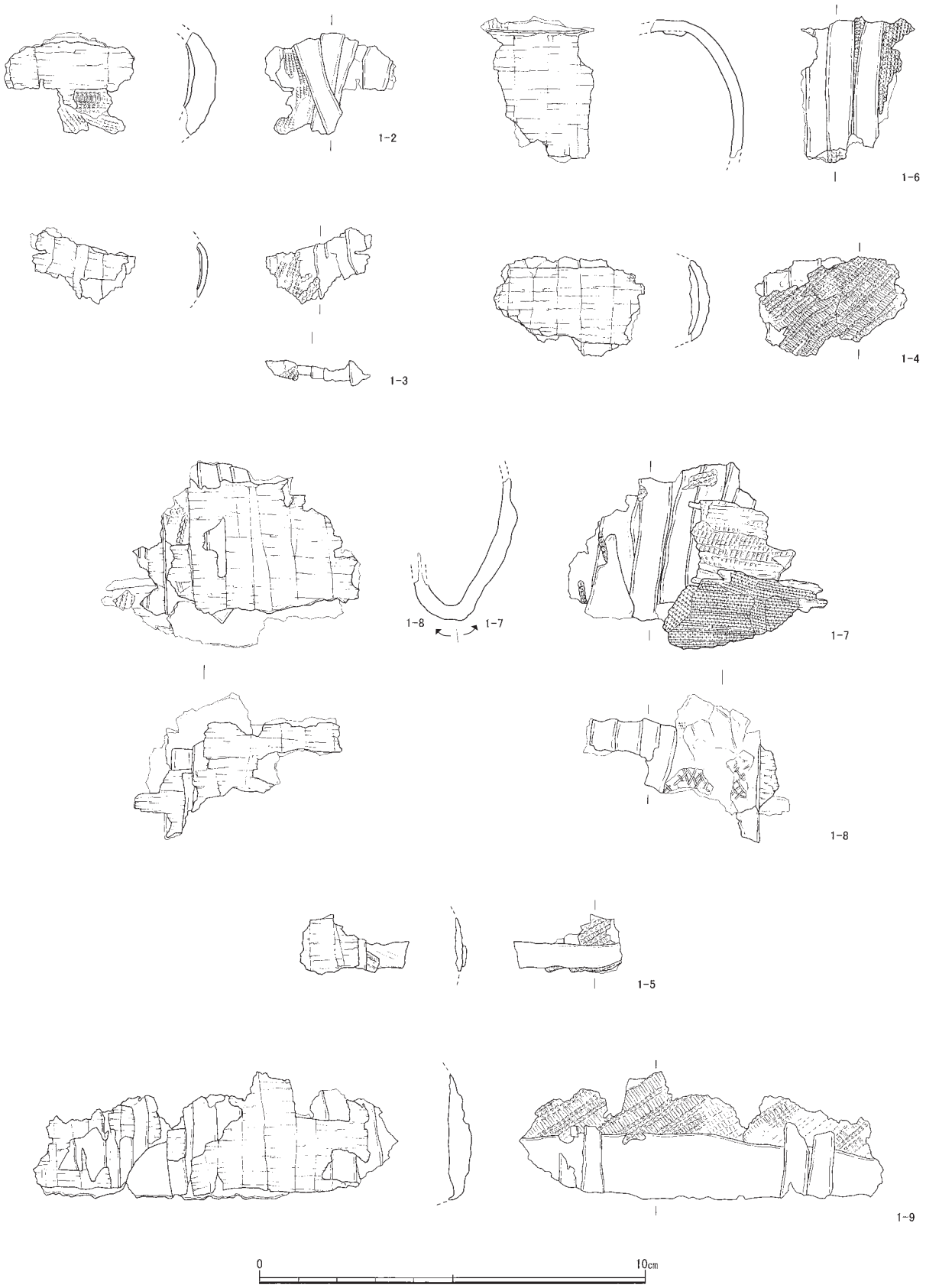
鞘間の構造　木製の鞘には幾種類かの有機物が付着している。これらも鞘装具の一部をなす。まず、木製の鞘に幅６mmの帯状のものを鞘の主軸に対して横方向に巻きつける。次にその上から編み物状のものを鞘の主軸に対して斜め方向に巻く。さらに革と考えられるものを鞘の主軸と平行するように、鞘の腹側のみにあてる。その後、幅６mmの革と考えられるものを横方向に２周程度巻きつける。以下ではこれらを有機物Ａ～Ｄと呼称してそれぞれについて報告しておく。有機物Ａ～Ｄは漆等によって接着されたようで、その痕跡は鞘木にシミ状に残る部分として観察できる。これらの工程を経て、最後に黒漆を一部の範囲に塗布する。

有機物Ａ　１－３・４等において観察できる。鞘木に幅６mm程の帯状のものを横方向に巻きつける。その際、帯状のものが１～２mm重なるように丁寧に施す。なお、X線写真撮影において刀身部に残存



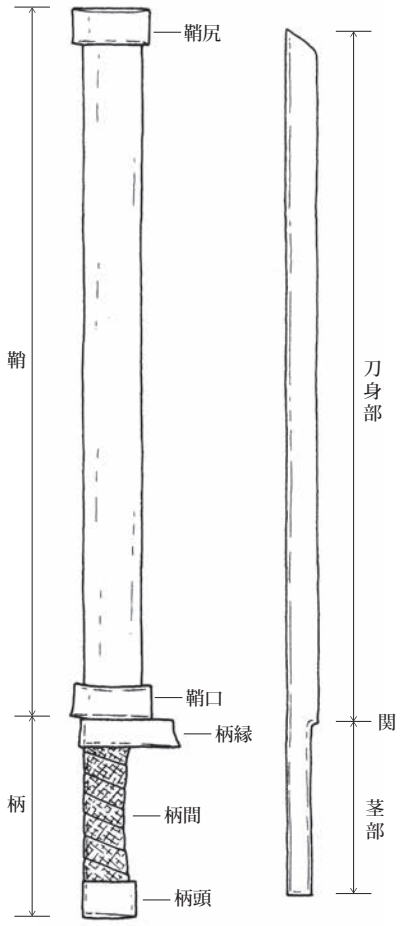
※赤のトーン部分は赤色顔料による彩色部分を示す。
※1－5・7～9は第15図の鞘片の本来の位置を示す。

第14図　東条1号墳出土遺物実測図（1）　埋葬施設1大刀（1：2、2：3、1：4）

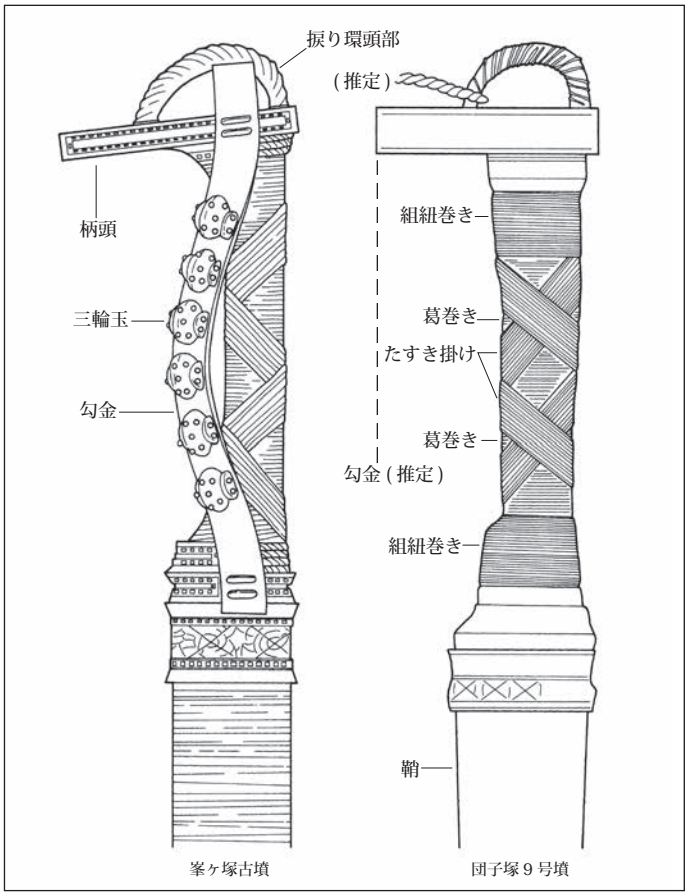


1-７、1-８の断面図は接合した状態で作成

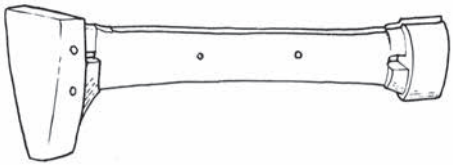
第15図　東条１号墳出土遺物実測図（２）　埋葬施設１大刀鞘片（２：３）



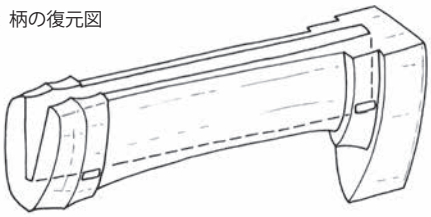
a 大刀の部分名称



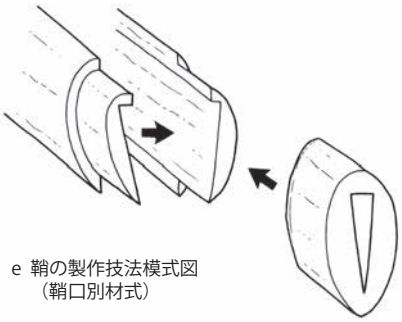
b 振り環頭大刀の部分名称



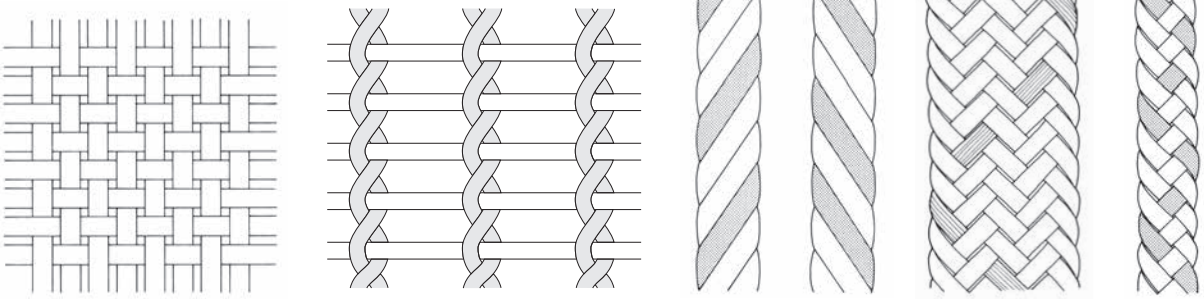
c 柄の復元図



d 柄の製作技法模式図（落し込み式）



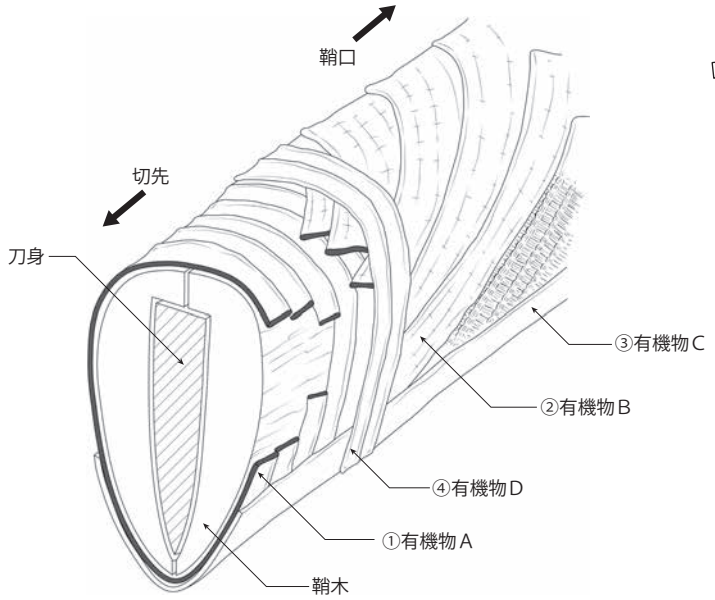
e 鞘の製作技法模式図
（鞘口別材式）



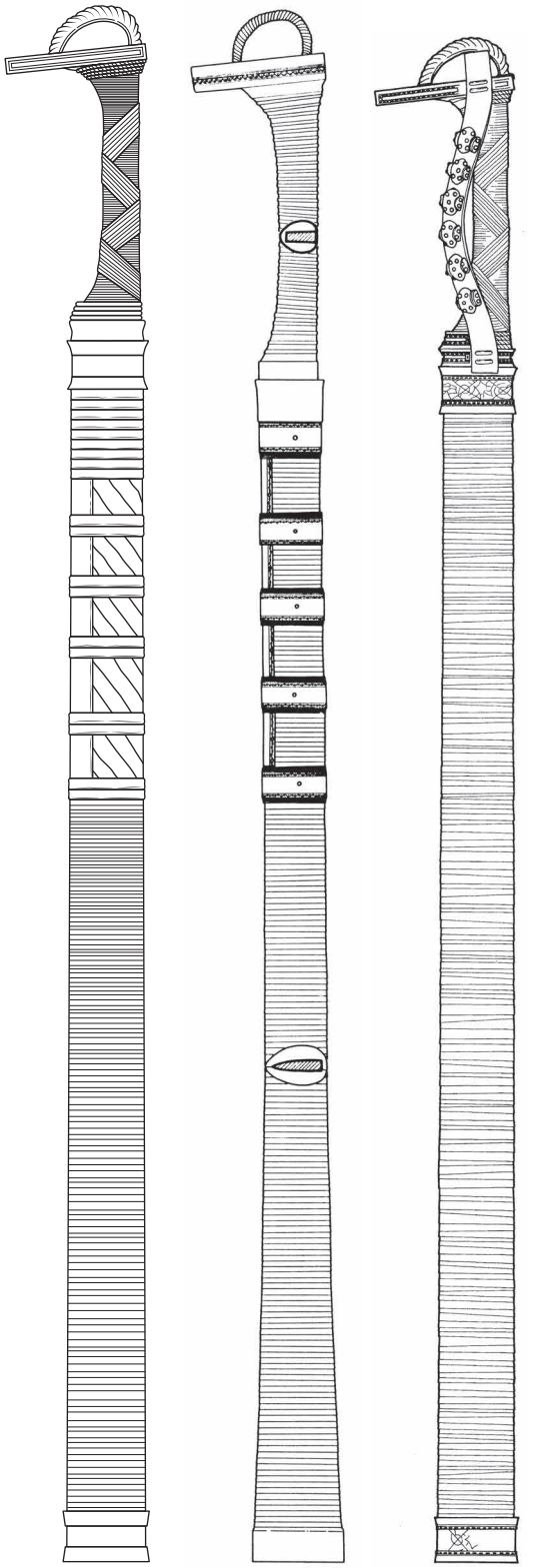
① 平織　② もじり編み　③左撚り　④右撚り　⑤二間組　⑥三つ組

f 繊維製品の組織図

第16図　大刀の細部名称



a 大刀の構造模式図



① 東条１号墳　② 上塩冶築山古墳　③ 峯ヶ塚古墳

b 捩り環頭大刀の復元図

【挿図出典】

第15図－ａ・ｄ・ｅ
豊島直博『古墳時代前期の鉄製刀剣』（2005年度～2007年度科学研究費補助金（若手Ｂ）研究成果報告書、2008年）を一部改変。

第15図－ｂ
髙松雅文「捩り環頭大刀と古墳時代後期の政治的動向」（『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究室、2007年）。

第15図－ｃ
埋蔵文化財天理教調査団『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』（1995年）。

第15図－ｆ－①・③～⑥
角山幸洋「繊維」（『斑鳩藤ノ木古墳』第２・３次調査報告書、奈良県立橿原考古学研究所、1993年）。

第15図－ｆ－②
東海大学校地内遺跡調査団『編みと織りの考古学』第15回足もとに眠る歴史展（2007年）を一部改変のうえ再トレース。

第16図－ａ
島根県古代文化センター『上塩冶築山古墳の研究』（1999年）を参考に筆者作成。

第16図－ｂ－①
筆者作成。

第16図－ｂ－②
島根県古代文化センター『上塩冶築山古墳の研究』（1999年）。

第16図－ｂ－③
羽曳野市教育委員会『史跡古市古墳群峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』（2002年）。

第17図　大刀の復元

する鞘木に横方向の条線が幾筋も確認できる。これは有機物Ａを固定する際に用いられた漆等の接着剤の痕跡である。この点から有機物Ａは鞘間全体に巻かれていたことがわかる。

有機物Ａの材質は、織物・革・樹皮のいずれかである。織物とすれば、平織物を紐状に裁断し、裁ち目の部分を内側に折り返してほつれないようにした例に該当する[7]。しかし、有機物Ａにおいて布目が確認できない。樹皮特有の光沢をもつ表面も観察できないことから、革紐の可能性をあげておきたい。

有機物Ｂ　１－４・９等において顕著に認められる。１－３・４の観察から、有機物Ａを巻いた後に有機物Ｂを巻きつけていることがわかる。経糸は太さ0.6～0.8mm、織り密度７本／cm程度、緯糸は太さ0.4mm、織り密度20本／cm程度で、透けたような編み物である。糸は引き揃えただけのようで、撚りが確認できないことから、絹を用いたと考えられる。不明な点が多いが、布目の観察から、もじり編みの可能性がある。

有機物Ｃ　１－1a・1c・５・９において確認できる。鞘の腹側のみにあてており、その幅は最大1.7cmである。１－５・９において有機物Ｂの上から有機物Ｃをあてていることがわかる。材質は革の可能性がある。材質転換して金属板となった類例として、奈良県藤ノ木古墳・島根県上塩冶築山古墳例が知られる[8]。

有機物Ｄ　１－９等において確認でき、有機物Ｃをあてた後に有機物Ｄが巻きつけられたことがわかる。幅は約６mmで、鞘の主軸に対して直交方向に２周程度巻きつける。１－９が１－1aに隣接することから、３～５cmの間隔をあけて、少なくとも４単位巻きつけられていたことがわかる。材質は革と考えられる。有機物Ｄはいわゆる責金具の役割を果たしており、金属板の事例として峯ヶ塚古墳・藤ノ木古墳・上塩冶古墳例等が知られる。

なお、１－７等において有機物Ｄが数周巻きつけられている。これは有機物Ａの可能性も残るが、いずれにしても鞘口装具と接する部分のみで認められる特徴と考えられる。

以上をまとめると、１－３・４から木製鞘間装具→有機物Ａ→有機物Ｂ、１－９から有機物Ｂ→有機物Ｃ→有機物Ｄの順に施されたことがわかる。

その他の有機物　１－７において、有機物Ｄの上に織物が観察できた。残存状況が良好ではないため、観察が十分ではないが、右撚りがかかっているようにみえることから、麻等の植物繊維を織りだした布あるいは撚り糸の束の可能性が考えられる。大刀の装具の一部とすべきか否かは判然としない。

さらにその上面にも平織物が確認できる。平織物は、糸に撚りが確認できないことから絹を織りだした平絹と考えられる。糸の太さは0.3mm、織り密度は19×22本／cmである。この平絹は大刀装具の一部とは考えにくく、大刀あるいは大刀と鉄鏃を包んでいた織物の可能性も考慮すべきだろう。

漆　黒漆が１－1c・７の有機質Ｄ上面で顕著に認められた。したがって、鞘間は黒漆を塗布して仕上げていたことがわかる。ただし、黒漆の範囲が鞘間全体に及んでいたのか、一部にとどまるのかは不明である。なお、１－４における漆状物質の付着は、接着剤として使用した漆の可能性も考慮すべきだろう。

捩り環頭大刀柄頭　２は大刀１の刀身部付近において鉄鏃と近接するように出土した。出土位置にやや難点を残すものの、後述する形状から２は大刀の柄に付属する装具と考えられる。

２は残存長4.2cm、幅４mm、厚さ５mmの鉄製品である。平面は半円形で、断面は方形を呈する。表面には数条の稜線が斜め方向に走るが、これは断面方形の棒状を捩ることで形作られたためと考えられる。２は形状から捩り環頭大刀の柄頭と判断できる。なお、捩り環頭大刀の柄頭は、鉄製の下地に銀板を被せる場合が多いが、本例では肉眼観察において銀板を確認できなかった。

大刀の復元　これまでの観察から大刀を復元すると第17図となる。柄は、柄頭・柄間・柄縁を一木から作り出し、柄の背側から溝を彫り込んで、茎部に装着する。柄頭については遺失しているが、楔形を呈すると推測される。

柄木を茎部へ装着した後、柄間に葛巻きを行い、次に組紐によるたすき掛けを行い、巻き残りの部分に赤色顔料を用いて彩色を施す。さらに柄頭および柄縁に接する部分には組紐巻きを行う。捩り環頭大刀の場合、勾金を取り付ける場合がある。しかし本

例では勾金に取り付けられる三輪玉等が出土していない。したがって、有機質の勾金のみが取り付けられていたか、元来から取り付けられていなかったかのいずれかであろう。以上の検討から、本例は静岡県団子塚９号墳の復元例[9]に類似するといえる。

次に鞘の復元として、２枚の鞘間を組み合わせて、鞘口と鞘尻をはめ込む構造だったと推測される。鞘口・鞘尻はいずれも木製品と考えられる。鞘間は、有機物Ａ→有機物Ｂ→有機物Ｃ→有機物Ｄ→黒漆の順に施されている。類例から有機物Ｄは５箇所程度と考えられ、有機物Ｃについても有機物Ｄの及ぶ範囲にとどまる可能性を考慮する必要がある。

次に大刀の時期的な評価として、手がかりが乏しいものの、捩り環頭大刀柄頭２における稜の形状からMT15型式期[10]以降とみられる。ただし時期の下限を絞ることは難しいため、他の遺物で時期決定するのがのぞましい。

ｂ　鉄鏃

鉄鏃は６本あり、６～８は大刀の下、他は上や側面からまとまりのない状態で出土した。

３は、残存長12.5cm、鏃身部残存長2.6cm、頸部長8.8cm、茎部残存長1.1cmの長頸鏃である。鏃身部は片刃形で、鏃身関部は不明瞭ながら直角と推測される[11]。関部はＸ線写真から角関あるいはわずかな台形関と判断できる。鏃身部の断面は三角形を呈する平片刃造で、頸部および茎部の断面は方形である。茎部には縦方向の木目と、その上に横方向に巻かれた樹皮が観察できる。茎部の遺存状況から、鉄鏃は矢柄に装着した状態で副葬されたこと、樺巻き（口巻き）を施して仕上げていたことが分かる。

付着物として、鏃身部から頸部にかけて織物が観察できた。この織物は平織物で、糸にはアルファベットの「Ｓ」のようにみえるＳ撚り（右撚り）が確認できることから、麻などの植物繊維を織りだした布と考えられる。糸の太さは幅0.5mm、密度は７×８本／cmと粗い。これに類似した布は、６～８の鏃身部から頸部においても確認できた。

また、関部付近にも織物が認められた。平織物で糸に撚りが確認できないことから、絹を織りだした平絹と考えられる。糸の太さは0.2mm、密度は40×56本／cmである。

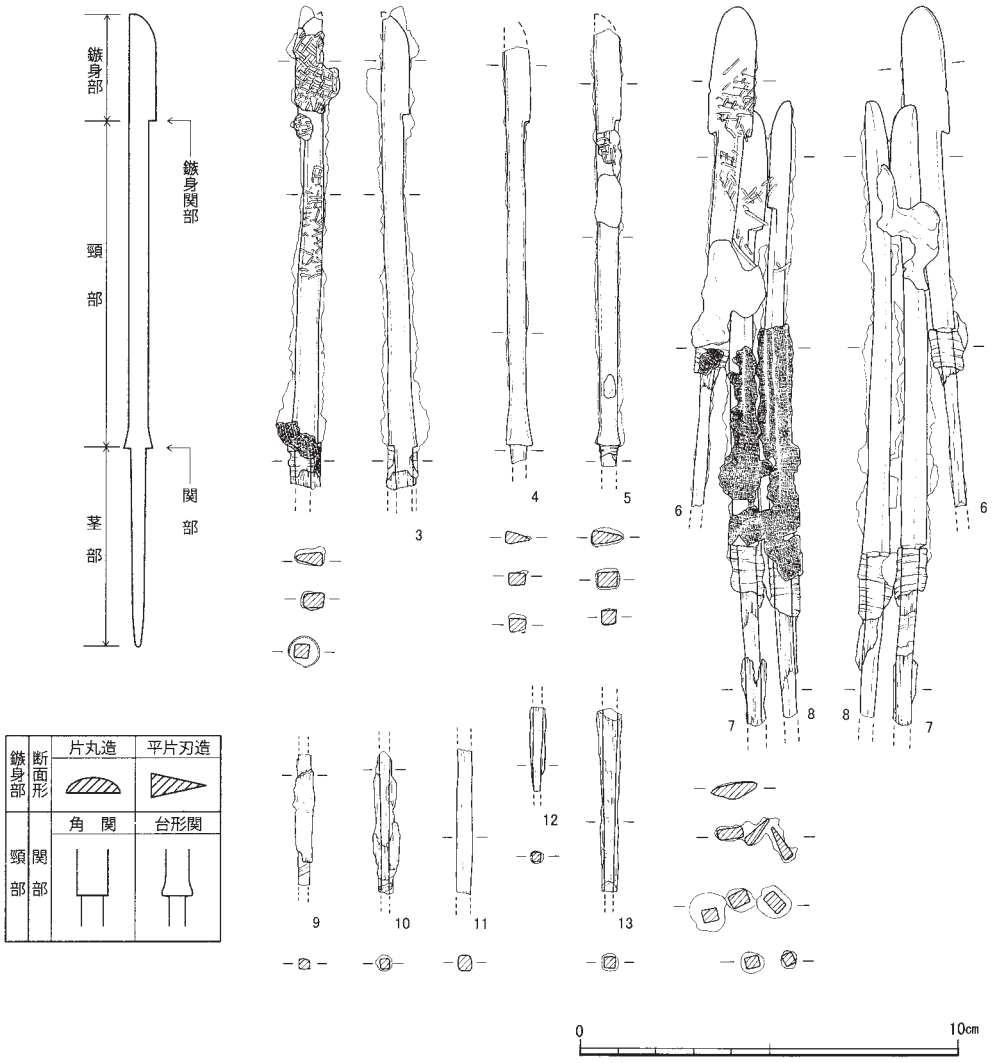
４は残存長11cmの長頸鏃で、鏃身部残存長２cm、頸部長8.5cm、茎部残存長0.5cm、５は残存長11.5cm、鏃身部残存長2.4cm、頸部長8.6cm、茎部残存長0.5cmである。いずれも鏃身部は片刃形で、鏃身関部は直角、関部は台形関の平面形態をとる。鏃身部の断面は平片刃造、頸部・茎部の断面は方形を呈する。５の茎部では木質のほかに、樹皮による樺巻きの可能性をもつ痕跡が観察できた。また５の付着物として平織物が確認でき、糸に右撚りがかけられていることから、麻などを織りだした布と考えられる。糸の太さは0.5mm、織り密度は９×11本／cmと粗い。この布は３の鏃身部に付着した織物と類似した特徴をもつ。

６～８は大刀に付着するような状態で出土した。３本の長頸鏃が銹着している。６は残存長13.3cm、鏃身部長3.4cm、頸部長5.2cm、茎部残存長4.7cmの長頸鏃である。鏃身部の平面形態は長三角形を呈し、鏃身関部はわずかな逆刺を有する。関部は明確ではないが角関あるいはそれに近い形状と推測される。鏃身部の断面は片丸造、頸部と茎部は方形を呈する。７は残存長16.4cm、鏃身部長3.3cm、頸部長8.4cm、茎残存長4.7cm、８は残存長16.3cm、鏃身部長2.9cm、頸部長9.1cm、茎部残存長4.3cmの長頸鏃である。７と８の鏃身部は片刃形、鏃身関部は不明瞭ではあるものの直角と推測される。関部も明瞭ではないが、角関あるいはそれに近い形状と推測される。鏃身部の断面は平片刃造、頸部・茎部の断面は方形を呈する。

６～８は、いずれも茎部に木質とその上に樹皮による樺巻きが観察できる。さらに７では木質の下において繊維状の有機質が観察できた。これは下巻きと考えられる。したがって、鉄鏃の矢柄への装着は、下巻きを施してから矢柄に差し込み、口巻きで仕上げたと考えられる。

６～８の付着物として、鏃身部から頸部にかけて織物が観察できた。この織物は平織物で、糸に右撚りが確認できることから、麻などの植物繊維を織りだした布と考えられる。糸の太さは幅0.6mm、織り密度は10×12本／cmと粗い。３の鏃身部に付着した布に類似する。

また、関部付近に付着した織物は平織物で、糸に



第18図　東条１号墳出土遺物実測図（３）　埋葬施設１鉄鏃（１：２）

撚りが確認できないことから絹を織りだした平絹と考えられる。糸の太さは0.2mm、織り密度は43×55本／cmである。この平絹も３の関部付近の布に類似する。

９～13は、茎部の一部である。このうち９～11は４・５に付着するような状態、12・13は大刀に付着するような状態で出土した。残存長は2.2～4.8cmで、断面は方形または隅丸方形を呈する。いずれも矢柄の木質が確認できた。

以上の個別観察をふまえ、これらの特徴をまとめておく。個体数については、鏃身部の数から６本と考えられる。そして、茎部の木質と樹皮による樺巻きから、いずれも矢柄に装着した状態で副葬されたと考えられる。これらの鉄鏃には２種類の平織物、すなわち植物繊維を織りだした布と絹を織りだした平絹が付着していた。鉄鏃は、このいずれかに包まれていた可能性がある。本数が限られていることからも、胡籙や靫に収められていたとは考えにくい。

鉄鏃の時期的な特徴として、鏃身関部と関部の形態が指標となる。関部の変遷として直角関－台形関－棘状関の順に出現する。棘状関の出現がTK43型式期とされることから、東条１号墳の一群はTK10型式期以前と評価できる。さらに鏃身関部は、６がわずかな逆刺を有するものの、他個体は直角かそれに類するものと考えられる。この点を考慮すると、概ねMT15型式期以降といえる。したがって、東条１号墳の鉄鏃一群をMT15～TK10型式期、６世紀前半と評価しておく。（髙松）

c　土器類

土器類は、出土状況から棺外墓壙内(14～25)・墓壙上面(26・27)の２群に分けられる（第19図)。

14～25は、棺外墓壙内の中段に「六文銭祭式」状に配置された一群。14～24は須恵器蓋坏類。24のみ坏身単独で出土した。14と15、16と17、18と19、20と21は、それぞれ焼成時からのセット関係が保たれているが、22と23は焼成時のセット関係ではない。

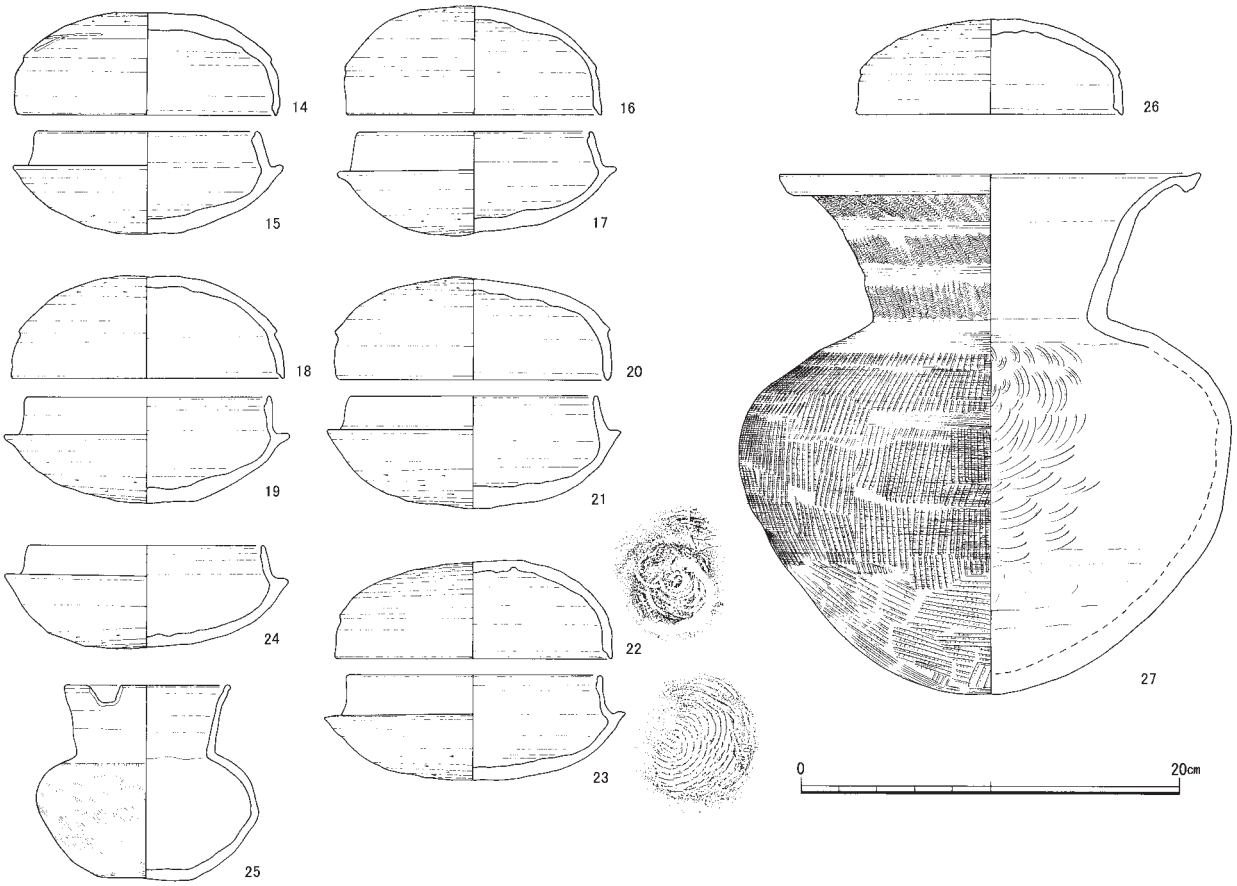
14・15はやや生焼けで、石英の多い素地である。16・17と18・19の一対は、整形手法・素地・焼成などが近似している。20・21は素地に灰色混入物があり、整形手法も他とは異なっている。14～19は坏身・坏蓋とも口縁端部内面に比較的明瞭な段を有するが、20～24は段を伴わないか、あるいは緩いものとなっている。坏蓋外面の稜は、20のみ比較的しっかりしているものの、それ以外は緩く、14や22は凹線状を呈している。

22・23の内面には、同心円当て具痕が見える。この２つは焼成時のセット関係ではないが、調整は一致している。同心円当て具痕が見られるのは、この一群のなかでは、このセットが唯一である。

棺外墓壙内の一群は、後述するように、大きく３つの系統に区分できる（第Ⅵ章３)。工人差と考えられる。所属時期は、田辺昭三氏による陶邑編年[1]（以下「陶邑編年」）のTK10型式の範疇で、そのなかでもやや古い様相を残していると見られる。

25は土師器小形壺。底部は平底状を呈するが、明確な屈曲が無く、基本的には丸底を意識していると見られる。口縁部に意図的な打ち欠きがある。

26・27は墓壙上面の一群。26は須恵器坏蓋で、27の蓋として用いられていた。口縁端部には弱い段があり、外面の稜は甘い。陶邑編年のTK10型式に相当する。27は須恵器壺。口縁部外面には３段の精緻な波状文が見られる。破断面や外面から窺える胎土は、現状で白灰色と灰色とが混合したようなマーブル状を呈している。棺外墓壙内に見られた須恵器の一群とは異なる胎土である。口縁部は意図的



第19図　東条１号墳出土遺物実測図（４）　埋葬施設１土器類（１：４）

に打ちかかれている。この壺の形態は、埋葬施設１から出土したその他の須恵器類よりもやや古い時期のものと考えられる。（伊藤）

２　東条１号墳埋葬施設２出土遺物

ａ　装身具

装身具は、銅釧と玉類が出土した。その出土位置は、埋葬施設２墓壙内で胸部・左手・右手・棺内北端（足下）の４群に大別される（第17表）。本項では出土位置ごとに点数と形状を記し、玉類の生産地や製作技法についての詳細は第Ⅵ章に記した[17]。

胸部周辺　28～155は、鏡周辺で出土した玉類128点である。石製品は、翡翠製勾玉１点、碧玉製管玉16点である。ガラス製品は、勾玉４点、管玉７点、丸玉１点（重層ガラス製）、小玉99点である。これらはすべて首飾りを構成していたものと考えられる。

翡翠製勾玉(28)は、背部側の反りは緩やかで、頭部断面の厚さが最大で1.10cmである。線刻からなる丁字頭の装飾が施されており、丁字頭線刻は互いに直角に近い位置で孔につながっている。表面は滑らかに研磨されているが透明感はない。穿孔は断面円錐形で、鉄針による片面穿孔である。穿孔終了面には直径２mm、深さ1.5mmのくぼみがあり、これは穿孔を試みた痕跡と思われる。大賀氏の分類によるＮｗ型[18]で、製作時期は４世紀前半と考えられる。

重層ガラス製の丸玉(29)は１点のみで、鏡や木棺片に近い位置で出土した。いわゆるサンドウィッチガラスである。出土した直後から劣化が進み、現状は破片資料のみ残存する。金箔や銀箔はなく、白く透明なガラスのみ観察される。

碧玉製管玉(30～45)は16点で、形状は太身で、ほぼ円柱状を呈する。全て濃緑色で、石材は出雲の花仙山で産出される碧玉である。直径と長さは大小２つに分類され、長さ2.10～2.60cmで直径0.82～0.87cmの長いタイプが12本、長さ1.65～1.88cmで直径0.62～0.68cmの小さいタイプが４本である。穿孔は鉄針によって行われるもので、穿孔方向は、両面穿孔が８点、片面穿孔が８点確認された。片面穿孔のうち、６点の穿孔終了面には、穿孔時にできた割れ円錐が見られる。

ガラス製勾玉は４点、管玉は７点である。材質は高アルミナソーダ石灰ガラスと考えられ、色調は青緑色で不透明である。非常にもろい素材であるため、現地で取り上げる際に細片となった管玉が３点あり、元々は10点であった可能性が高い。勾玉はいずれも尾部が欠損している。小口の端面は明確な平坦面をもたない。管玉(55)の側面形は、わずかにエンタシス状を呈する。

ガラス製小玉は99点で、破片も含めると胸部周辺では約102点が出土した。埋葬施設２から出土したガラス製小玉の色調は、淡青色（透明・半透明）、青色（透明・半透明）、濃青色（透明）・紺色（透明・半透明）、黄緑色（半透明・不透明）、淡青緑色（半透明）、濃紫褐色（透明）、青緑灰色（透明）、紫紺色（透明）がある。肉眼観察の結果、製作技法は引き伸ばし法と鋳型法が認められた。引き伸ばし法の材質はソーダ石灰ガラスとカリガラスである。小口の端面は、研磨しているものが主体であるが、未調整のものも一定量含まれる。

ガラス製小玉全体の法量散布図（第22図）を見ると、ガラス製小玉は、径が約0.20～0.50cmの小型品（小玉ａ）と、径が0.60～0.70cmの大型品（小玉ｂ）に大別される。比較的法量が大きい小玉ｂ５点は、全て胸部周辺から出土しており、腕輪周辺には認められない。（相場）

左手周辺　156～420は、左手に装飾されていた銅釧１点と、玉類264点である。銅釧(156)は暗緑色の色調を呈し、鍍金の痕跡が確認できなかったことから、青銅製と考えられる。その大きさは外径7.25～7.4cm、内径6.4～6.55cm、幅４～５mm、厚さ３mmである。断面は杏仁形を呈し、長軸は水平方向を指向するようだが、その角度は安定しない。したがって断面を図化した箇所では、長軸が右肩上がりに傾斜する。表面には円周方向の擦痕が観察できる。研磨痕の可能性を考慮する必要があろう。また付着物として織物がごくわずかに確認できた。（髙松）

瑪瑙製勾玉(157)は、本体の長さが3.50cm、断面の厚さが最大で0.90cmである。背部側の反りは緩やかで、断面形はほぼ正円形である。色調は濃い橙色で、透明感がなく、表面は滑らかに研磨されてい

る。穿孔は、鉄針による片面穿孔が観察できた。このような特徴から、瑪瑙製勾玉のなかでも比較的製作時期が古い５世紀前半頃と考えられ、瑪瑙の生産地は出雲地方の可能性が高い。

ガラス製丸玉は７点出土した。いずれもソーダ石灰ガラスでコバルトイオンによる着色（濃紺色）である。ガラス製小玉ａは256点で、このほか残存状態が悪く破片化しているものが５点分確認される。ガラス製小玉の色調および製作技法は、胸部周辺の状況とほぼ同じである。

右手周辺　421～531は右手の腕輪に伴う一群で、ガラス製丸玉が110点、ガラス製小玉ａが１点出土した。

ガラス製丸玉はコバルト原料による着色とみられ、材質は植物灰に由来するソーダ石灰ガラスとナトロンガラスの２種類が認められる。詳細は第Ⅵ章で詳述するが、製作技法に起因する透明度・形状の違いが見てとれる。引き伸ばし法によって製作された個体は、透明度が高く、孔と平行方向の気泡の流れが観察される。側面形は滑らかな曲線形を呈し、やや丸みを帯びる。小口面は、切り離した後に再加熱して調整される。連珠法によって製作された個体(421)は、加熱したガラス管に、玉と玉の境を区切るようにくびれを入れ、冷却後に折るよう切り離すもの。割れ口に連結の痕跡が残っており、小口面は未調整である。包み巻き法による個体(489･455)はナトロンガラスで、融解したガラスを芯棒に巻きつけて成形しており、半透明で小口面は未調整である。当古墳でみられた３種類の技法によるガラス製小玉の法量を比較すると、引き伸ばし法に比べて、連珠法と包み巻き法がやや大きいようである。

棺内北側　532～536は棺内の北側から出土したもので、ガラス製丸玉が３点、ガラス製小玉ｂが２点である。丸玉・小玉ともに、右手と左手周辺で多量に出土したものと同種である。（相場）

ｂ　四獣形鏡

遺存状況　537の鏡体は暗緑色の色調を呈し、鏡面および鏡背の縁部において一部錆膨れをおこしている。また、肉眼では確認できないが、Ｘ線写真から細かな亀裂が数箇所走っていることがわかる。鏡の付着物として、鏡面を中心に織物、鏡背を中心に赤色顔料が観察できた（第28・29図）。

鋳上がり　文様は概ね描き出されているが、鈕孔の方向に沿って鋳上がりの不鮮明な部分が観察できる。その幅は約１cmで、鈕孔付近において顕著に認められ、最も外側をめぐる鋸歯文帯にまで及ぶ。これは、鋳型の鈕孔部分に中子を置く方向と湯口の方向が一致しているためで、湯の流れる方向に沿って文様がうまく表出されなかったためと考えられる。したがって、湯口は鈕孔の延長線上に設置されたと推測される。

法量　直径11.6～11.8cm、縁頂部で直径11.2～11.4cm。厚さは１～２mm、縁頂部において４mm前後。重量は190ｇである。

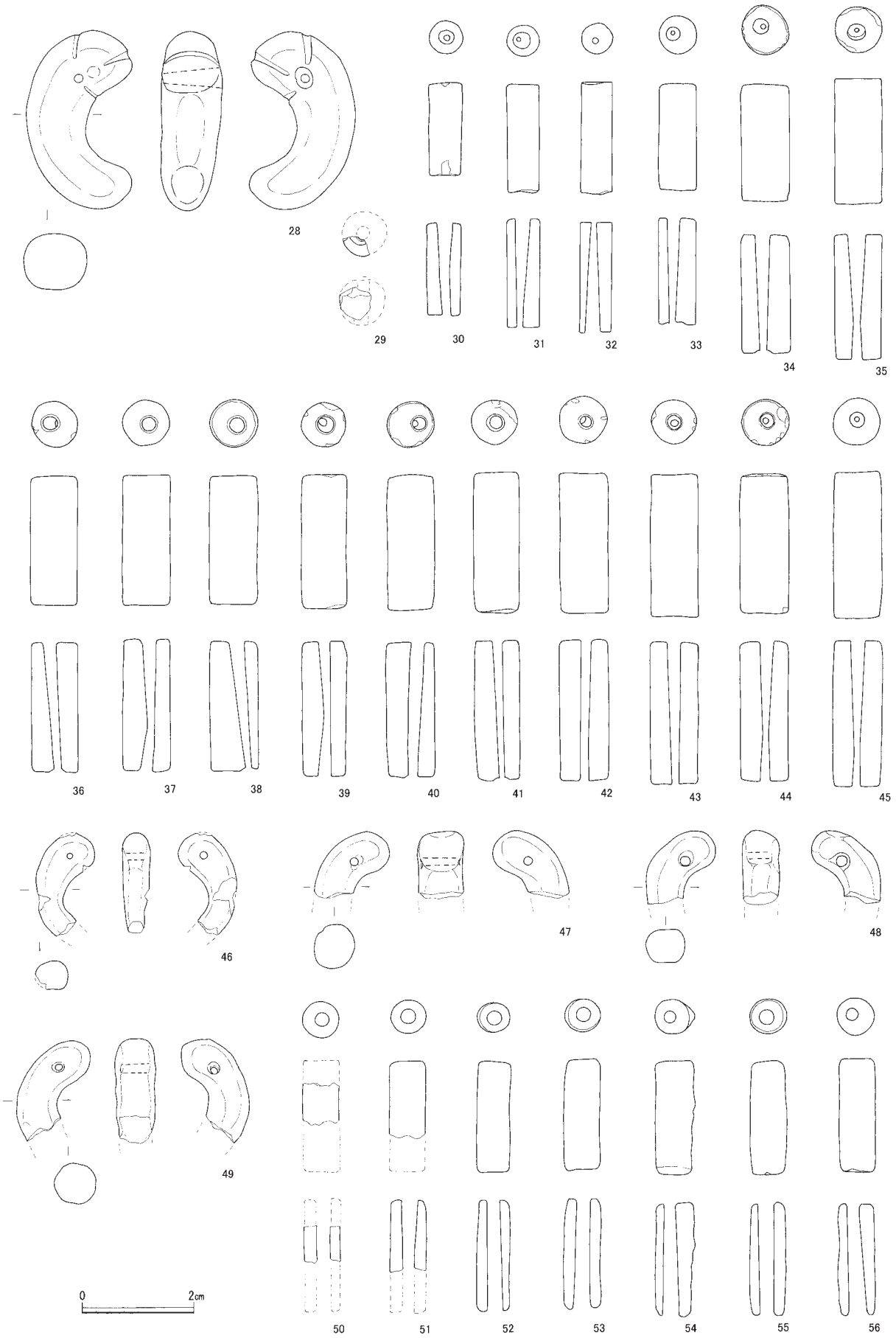
文様構成　鏡背の文様構成は、中心に半球の鈕があり、その周囲に円圏がめぐる。内区主文部には４体の獣像が描かれており、その配置は求心式をとる。内区主文部の外側には櫛歯文帯、続いて複線波文帯がめぐり、さらに外向きの鋸歯文帯が配置される。縁部は素文である。

断面　断面の形状は、縁部において鏡背側へわずかに反るものの、概ね平坦である。

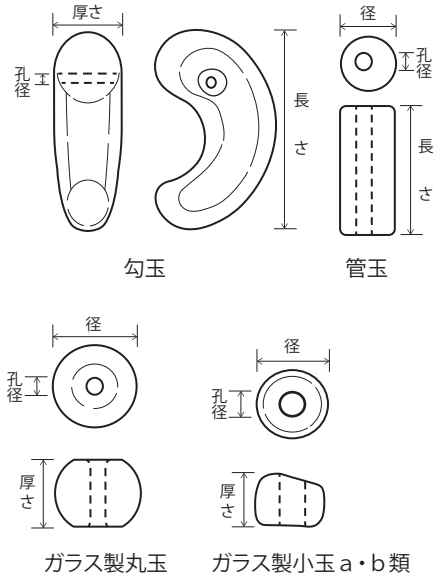
鈕　直径2.0～2.1cm、高さは鏡面から９mm。鈕孔は縦５mm、横６mmの大きさで、方形を呈する。鈕の周りには円圏がめぐるが、鈕孔付近で一部途切れる。これは先述した湯の流れる方向に沿って文様がうまく表出されなかった部分に相当する。

内区主文部　内区主文部は乳を配置することなく４体の獣像を半肉彫りで描き出す。乳を配しない点が本鏡の最も大きな特徴である。獣像は求心式の配置をとり、頭を右、体躯を左に向ける。すなわち４体とも右半身が描かれており、反時計回りの方向に駆ける。獣像の頭部は、２体が振り向いたように正面、１体が右側面を向けている。残る１体は判然としないが右側面を向けている可能性がある。形のくずれが著しいため、細部表現については判別できない箇所が多い。以下では４体を獣像Ａ～Ｄと呼称して、それぞれの特徴をまとめておく。

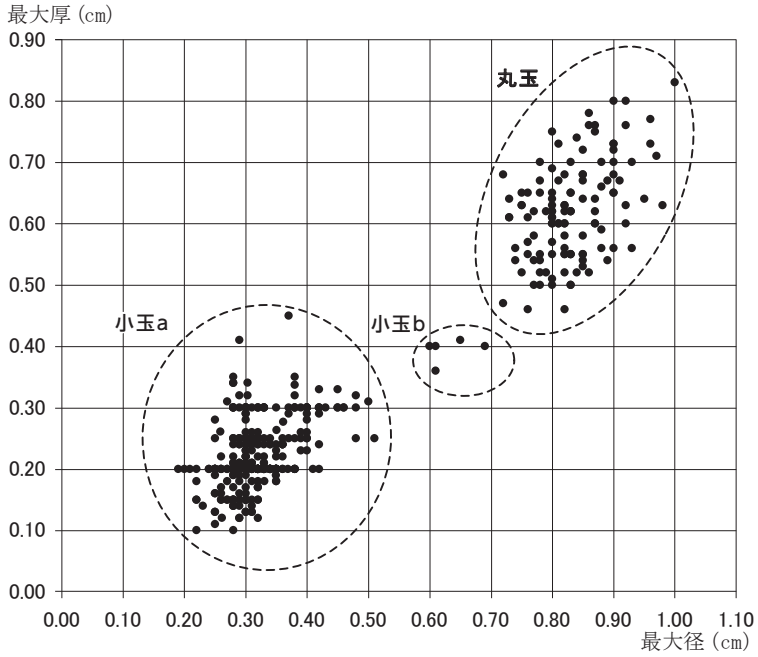
獣像Ａの頭部は、顔の丸いふくらみと耳または目と思わせる２つの丸いふくらみで描き出しており、口付近に顎髭または歯牙の表現がみられる。頭頂には角状のものを線彫りで表現する。首は獣像Ｃ・Ｄ



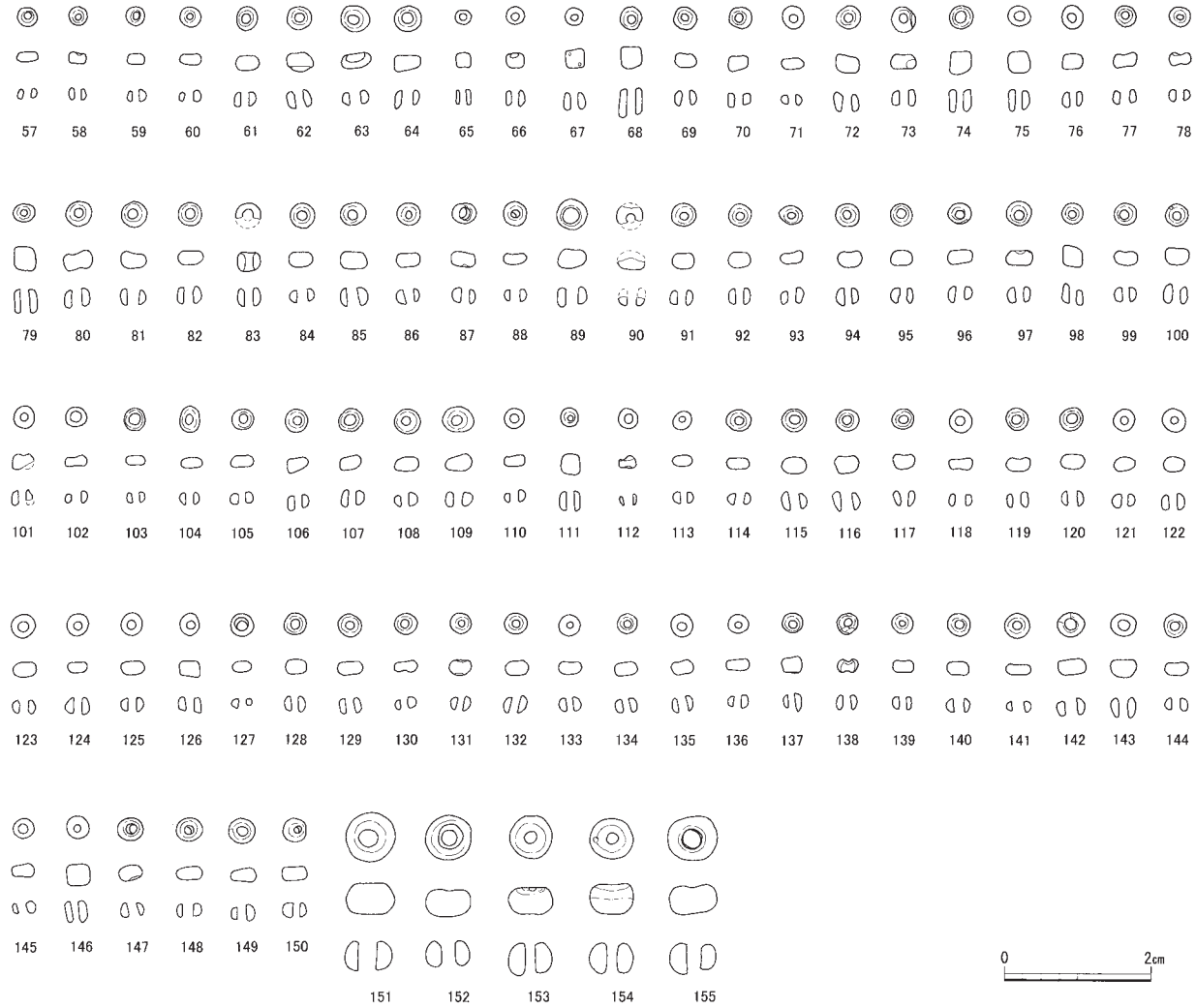
第20図　東条１号墳出土遺物実測図（５）　埋葬施設２玉類（１：１）



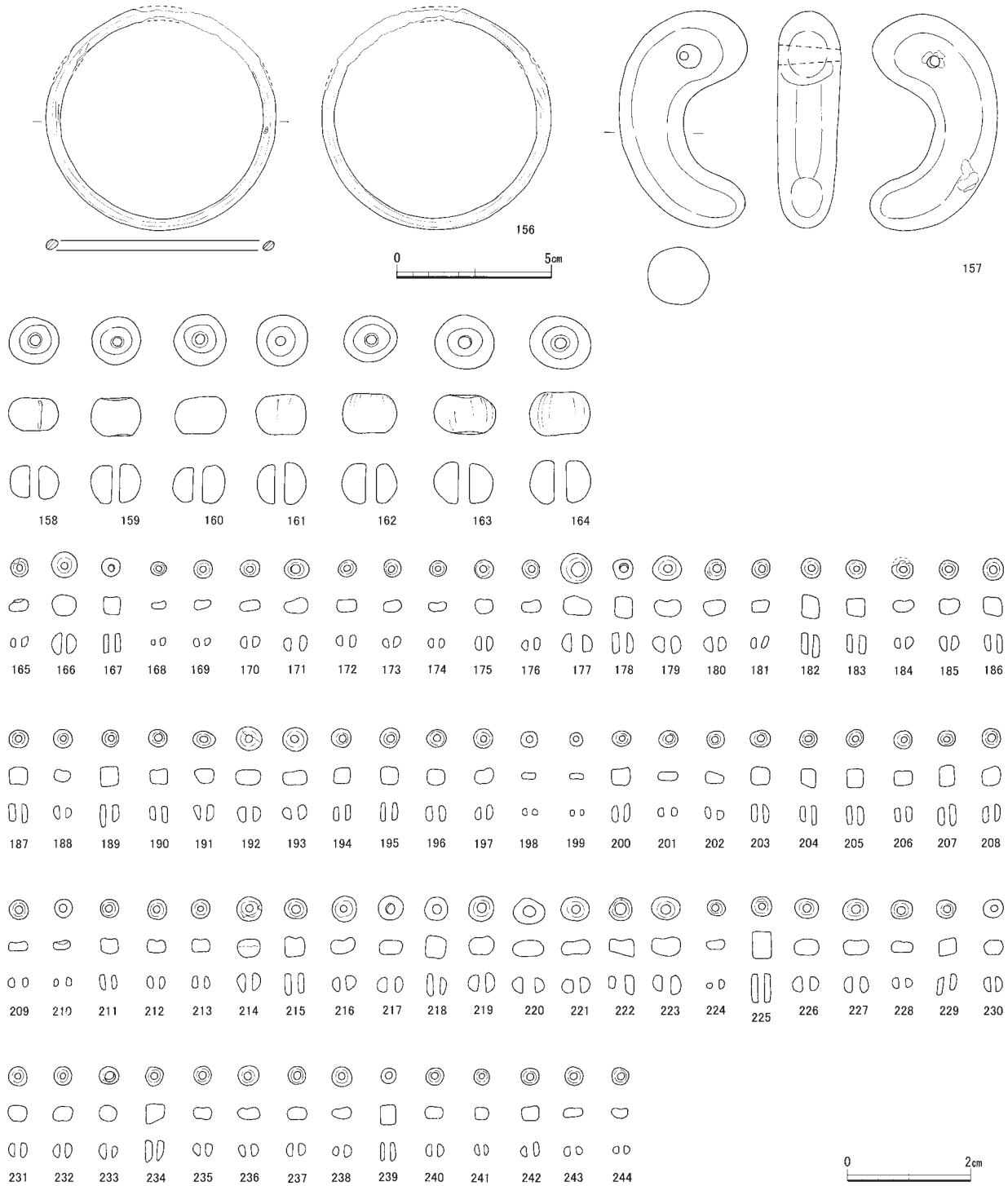
第21図　玉計測部位図



第22図　ガラス製小玉・丸玉法量散布図

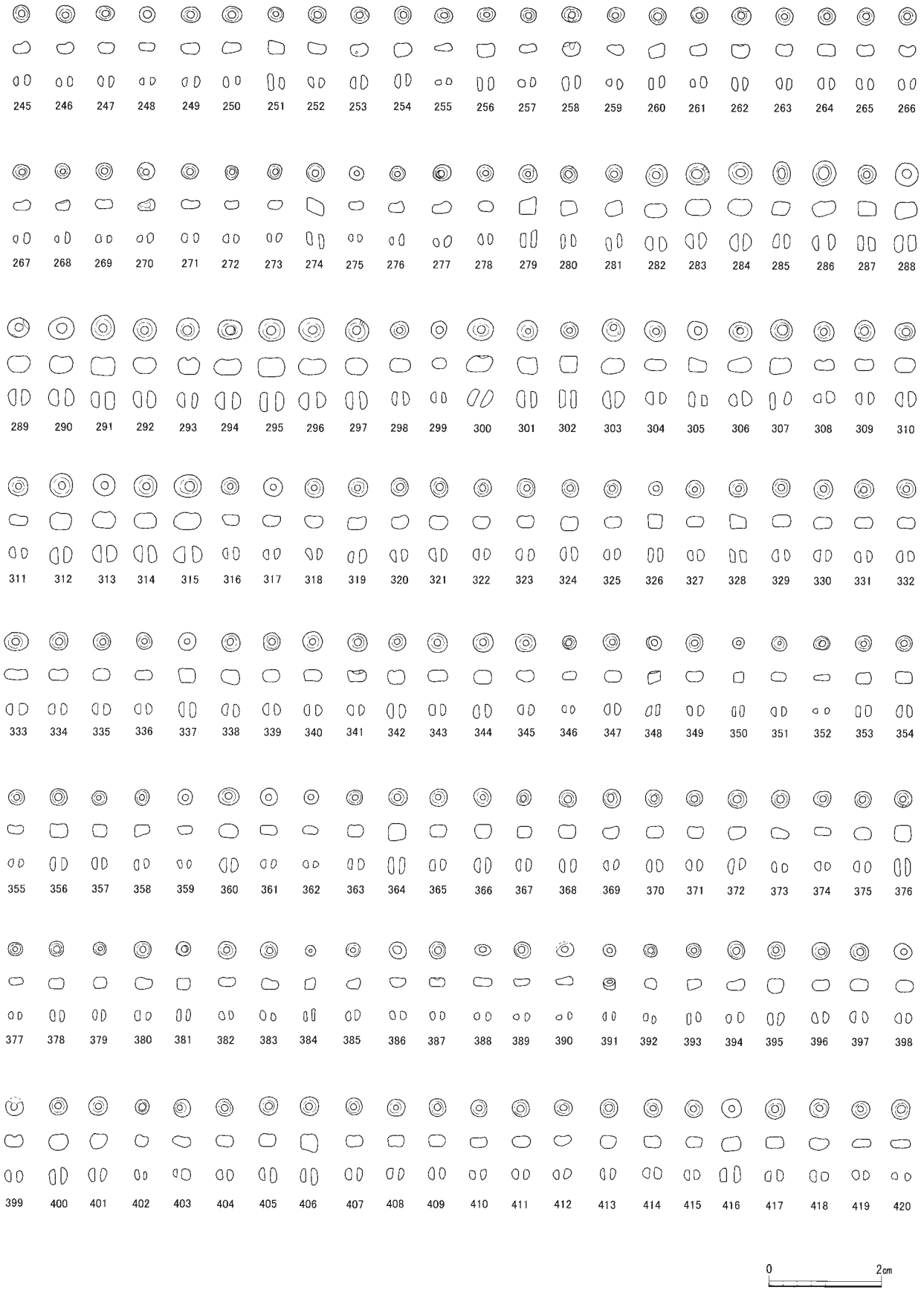


第23図　東条１号墳出土遺物実測図（６）　埋葬施設２玉類（１：１）

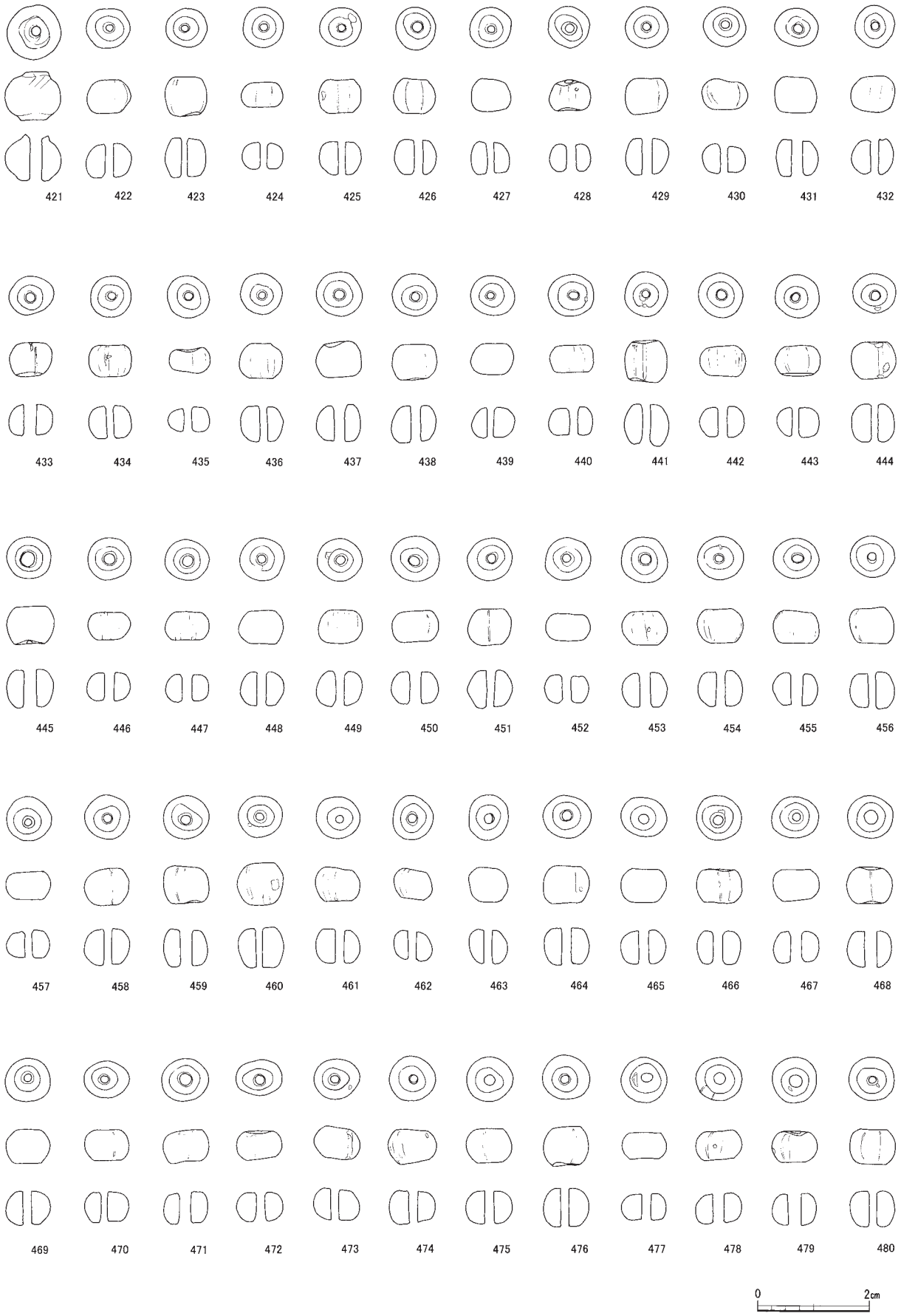


第24図　東条１号墳出土遺物実測図（７）　埋葬施設２銅釧・玉類（１：１、１：２）

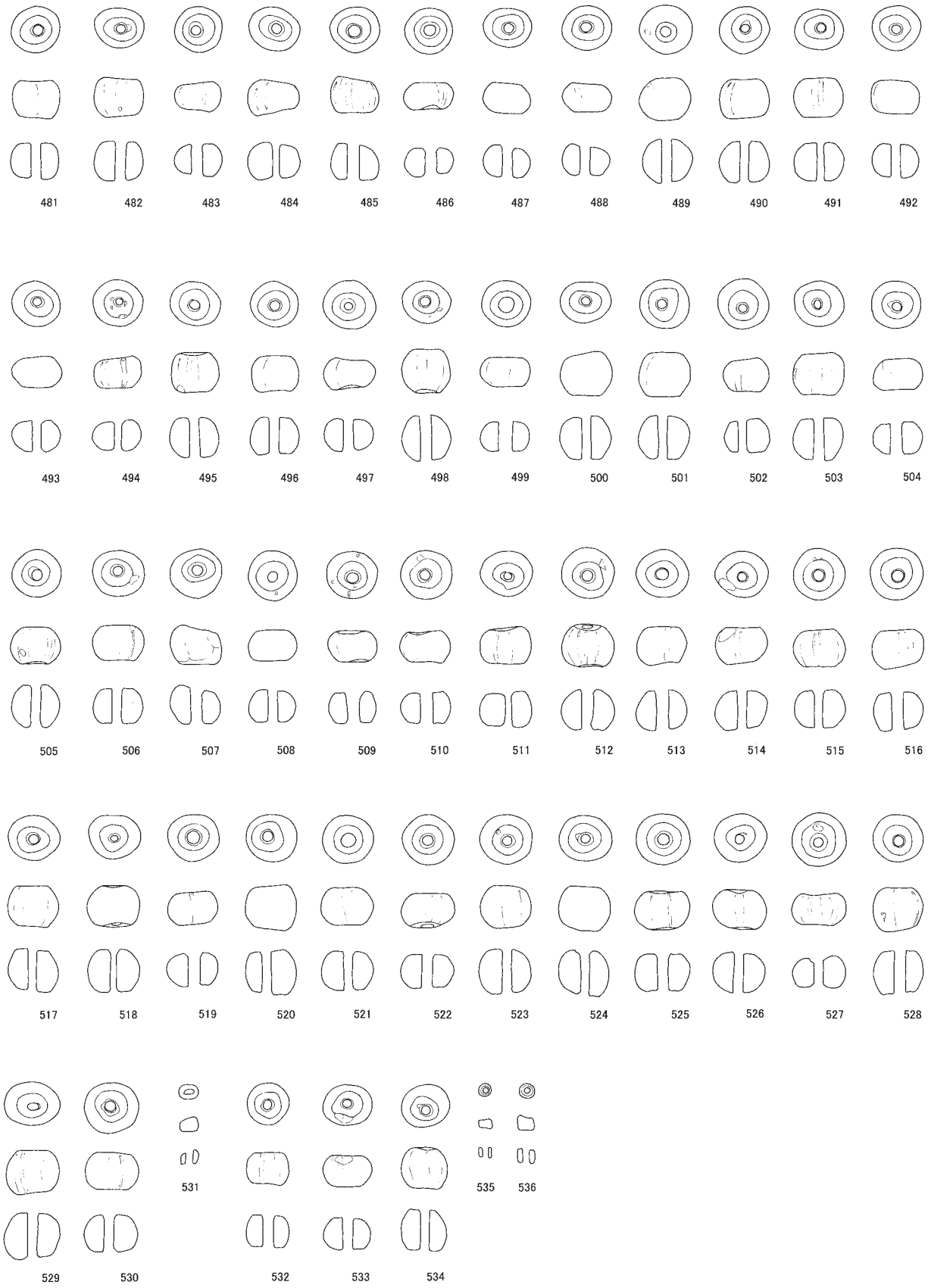
と比べると長い。体部のうち、肩には円形のくぼみとそこから複数の線彫りが放射状に伸びていることが確認できる。これは環状乳に由来する表現である。この点から本鏡の獣像は、画文帯環状乳神獣鏡の獣像に遠い祖形をたどり得ることが分かる。胸の下には線彫りによる弧文が認められ、隙間を満たしている。この弧文が何を表現しているのかは判然としない。胴部は線彫りによって獣毛を数本表現している。腹からは２本の線彫りが伸びており、先端が二又状になっている。これは脚と考えられるが、前・後脚のいずれを表現したのかは明確ではない。腰は逆Ｃ字形を呈し、先端は獣毛を表現する。尻から線彫りによる獣毛が後方へ流れるように複数本表現されている。獣像Ａは、頭部の突起を角とすれば龍の可能



第25図　東条１号墳出土遺物実測図（８）　埋葬施設２玉類（１：１）



第26図　東条１号墳出土遺物実測図（９）　埋葬施設２玉類（１：１）



第27図　東条１号墳出土遺物実測図（10）　埋葬施設２玉類（１：１）

537

※図の最も下に位置する獣像をAとして
そこから反時計回りにB・C・Dとする。

0　5cm

第28図　東条１号墳出土遺物実測図　四獣形鏡（１：１）

性が考えられるが、断定には至らない。

獣像Bは、獣像Aと共通した表現・特徴をもつ。頭部は顔を表現した丸いふくらみに、左右の小さなふくらみと頭頂の楕円形のふくらみが取りつく。左右の小さなふくらみは耳または目を思わせる。口付近には顎髭または歯牙のような表現が確認できる。頭頂には獣毛あるいは角状のものを線彫りで描き出す。体部については、肩部に環状乳に由来する円形のくぼみとそこから伸びる線彫りがみられる。なお、獣像Bは腰の位置にも環状乳の痕跡とみられるふくらみを有する。胸の下にはいくつかの線彫りがみられ、前脚や文字を表現している可能性も残る。胴部については線彫りで獣毛を表現し、腰は逆C字形におさめ、先端は獣毛を描き出す。背面は、複数の獣毛を線彫りで描き出す。このうち尻から後方へ流れる獣毛は特に長い。尾あるいは後方に大きく踏ん張っているはずの左後脚だった可能性があろう。

獣像Cは、頭部に嘴状の表現がみられ、首は短い。肩には環状乳に由来するくぼみとそこから放射状に伸びる線彫りがみられる。なお、獣像Cは腰の位置にも環状乳の痕跡とみられるふくらみを有する。胸の下には線彫りによる前脚のような表現が観察できる。胴部については獣毛を線彫りで描き出し、腰から先端は逆C字形に体躯を表現する。腹あるいは腰付近からは、線彫り表現による脚が伸びる。背面から後方は獣毛を線彫りで描き出すことで、隙間を満たす。獣像Cは頭部について鳥首様となるものの、翼を持たない。体部は獣像A・Bと同様の表現であ

第29図　埋葬施設２出土　鏡の付着物（１：２）

る。したがって、獣像Ｃは鳥首獣とみなせる。

獣像Ｄは首をすぼめ、胴が短くなっていることが特徴である。他の獣像と比べると、狭いスペースに押し込まれた印象を受ける。頭部は丸いふくらみとその背面の小さなふくらみで表現している。背面には２本の線彫りによる表現が確認できる。口付近には２本程度の線彫りによる表現がみられ、顎鬚・歯牙・嘴のいずれかを表現していると思われる。嘴であれば､鳥首様の表現といえる。首については短い。体部については、肩に環状乳に由来する表現、胴部には線彫りによる獣毛の表現、腰は逆Ｃ字形におさめる。胸付近には前脚らしき表現、腹から腰付近には後脚と思われる線彫りの表現が伸びる。尻の後方には線彫りによって獣毛が表現されている。頭部の評価次第で獣像Ｄは鳥首獣となるが、細部表現が判然としない。ここではその可能性をあげるにとどめておく。

内区主文部における獣像Ａ～Ｄには、いずれも環状乳に由来する表現が認められた。この特徴は、本鏡の獣像が画文帯環状乳神獣鏡に遠い祖形をたどり得ることを示している。

櫛歯文帯　内区主文部の外側にめぐる。文様帯の幅は３～４mm で、この間に太さ約１mm の線彫りを１～1.5mm の間隔で施す。本鏡は内・外区の区分が明瞭ではないが、この櫛歯文帯を内区の副文帯としてとらえておく。

複線波文帯　複線波文帯は幅４～５mm であり、太さ約１mm の線彫りで２本の波文を施す。複線波文の間隔は３～５mm であるが、一定していない。複線波文帯と次に述べる鋸葉文帯の２帯が外区に相当する。

鋸歯文帯　鋸歯文帯の幅は５～６mm で、外向きの二等辺三角形を連続的に配する。その間隔は４mm 前後である。鋸歯文帯における文様の不鮮明な部分については、鋳造時にうまく表出されなかったものと判断される。なお、鋸歯文帯に一部乱れが生じている。この部分を仔細に観察すると４個程度をひとつの単位としている可能性があろう。

縁部　縁部は素文で､縁頂部にむかって厚みを増し、頂部では厚さ４mm に達する。

付着物　付着物として織物と赤色顔料あげられる。鏡面では平織物が観察できた。撚りがかかっていないことから絹を織りだした平絹といえる。絹糸の太さは 0.1～0.2mm、織り密度は 25 × 60 本／ cm ある。鏡背の織物はごく狭い範囲に限られるが、絹を用いた組紐の可能性がある。鈕孔付近にもこれと一連と思われる付着物が認められた。鈕に通した紐の可能性を考慮しておきたい。赤色顔料は鏡背を中心に、一部鏡面において観察できる。

特徴と時期　本鏡の最も大きな特徴として、内区に乳が配置されない点があげられる。乳は、そもそも内区を均等に分割する役割をもつ。乳によって分割された後、それぞれの区画に主文様が描かれるのである。しかし、本鏡はこの割付け行為を放棄している。その結果、獣像Ａ～Ｄへと反時計回りに獣像を描き、最後の段階になってスペース不足に陥り、獣像Ｄを押し込めるように描いたと考えられる。こう

した端的な例が和歌山県の隅田八幡神社の人物画像鏡である[14]。

乳を設けない鏡は、森下章司氏によると５世紀後葉から６世紀に日本列島で製作されたのだという[15]。さらに本鏡は森下氏のいう旋回式獣像鏡系３式と考えられることから、その時期は５世紀後葉から６世紀前葉に納まる可能性が高い。以上から、東条１号墳の鏡は長期の伝世を経ることなく副葬されたと考えられる。なお、こうした乳配置を行わない鏡の類例として、名張市尻矢２号墳があげられる[16]。

ｃ　鹿角装刀子

538 は先端を欠損している。刃身部残存長 5.2cm、最大幅 1.6cm、厚さ 0.25cm、茎部長４cm、最大幅 1.1cm、厚さ 0.3cm である。刀身部は切先から関部に向かって緩やかなＳ字状を呈する。なお、関部付近において刃がわずかに内湾する部分は、砥ぎ減りの可能性がある。関部は両関で、刃側・棟側ともに直角に浅く切れこむ。茎部は茎尻に向かって少しずつ幅を減じていき、茎尻はほぼ直角をなす。刀身部の断面は長三角形を呈しており、いわゆる平造りである。茎部の断面は長方形を呈する。Ｘ線写真によって茎部には柄を装着する際の目釘孔が１ヶ所確認できた。柄部は、茎部を木質で覆った後に鹿角製装具をはめ込んでいる。なお、鹿角製装具に文様は確認できなかった。（髙松）

ｄ　土器類

土器類は、出土状況から棺内・棺外墓壙内・墓壙上面の３つに分けられる（第 30 図）。

棺内出土は 539 の１点で、棺内の北端に置かれていた。須恵器提瓶である。平底の扁平な壺形を回転成形し、側面に孔を開けて別途回転成形した口縁部を付加し、成形時の口縁部に蓋をして整形している。外面には粗雑なカキメが巡らされる。吊手は円環状を呈している。陶邑編年の TK10 型式に併行するものであろう。

540～546 は、棺外墓壙内からまとまって出土した。いずれも須恵器である。540 は坏蓋。外面には二本線のヘラ記号がある。口縁部径は 16cm あり、大きい。541・542 は、出土はセット状態だが、焼成時は明らかに別物であったと考えられる。541 は 540 と類似しており、外面には三本線のヘラ記号がある。542 は小振りの坏身で、口縁部内面には明瞭な段を持つ。形態的には陶邑編年の TK23 型式に似るが、伊賀地域色の影響と考えられ、時期的には TK10 型式の古い段階に併行するものであろう。

543・544 は焼成段階からのセット関係を保っている。坏身・坏蓋の底面は平らで、調整は粗雑である。形態的には古い様相を呈するが、やはり田辺編年の TK10 型式に併行するものであろう。

545・546 は瑗。２つは多くの点で異なりがある。口縁部調整は、545 は端部内面に鈍い段を形成するが、546 はシャープな段である。波状文は、545 は口縁部と頸部にそれぞれ１単位、546 は頸部のみに２単位を施している。素地は、546 には黒色粒が見えるが 545 は石英が多く確認できる。以上のように、この２点は時期的に概ね併行しながらも、別の工人によって製作されたと考えられる。

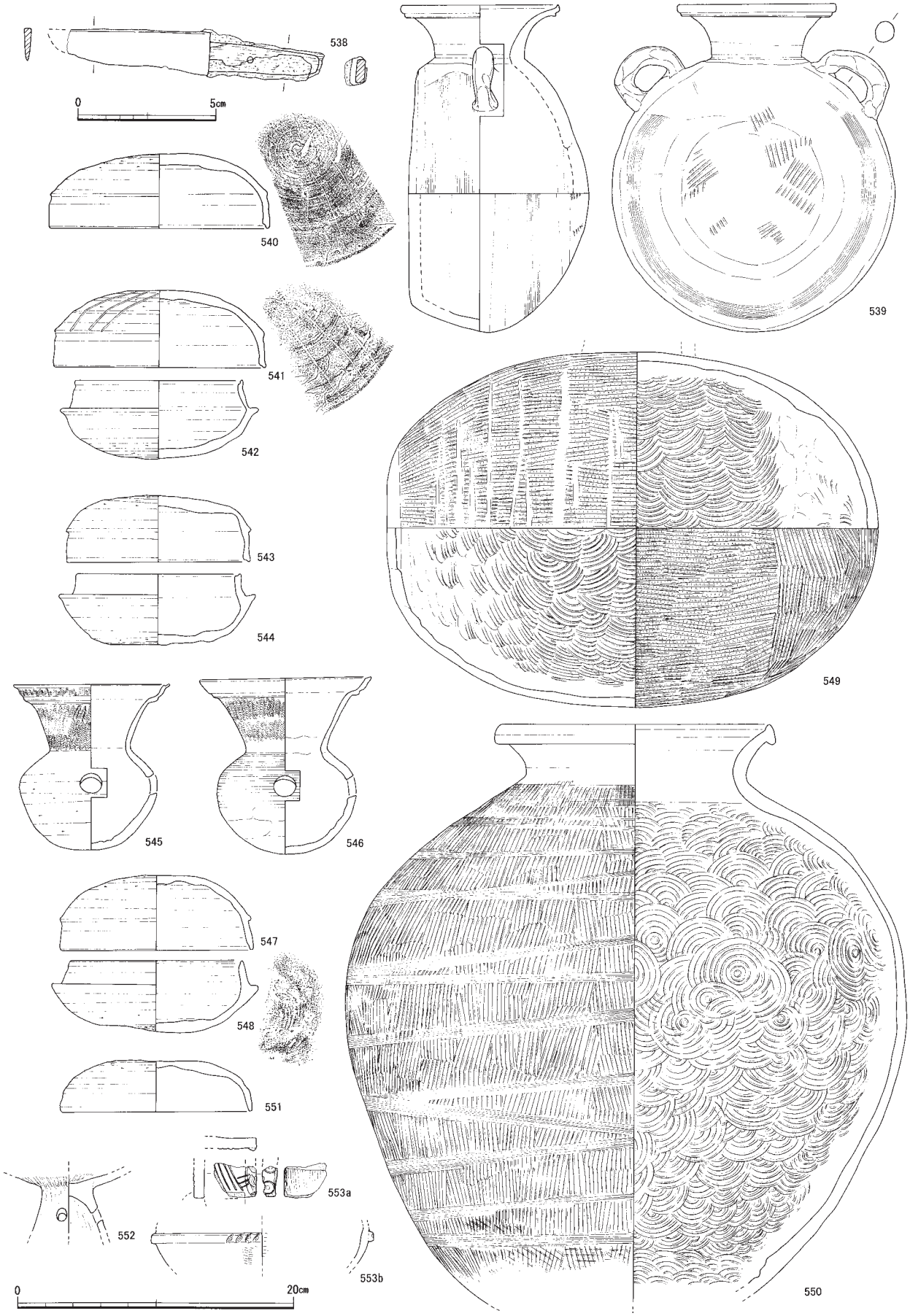
なお、545 の口縁部には、使用時の破損と見られる細かな欠けがある。使用時の影響と考えられることから、埋葬用に特別調達したものではないと考えられる。546 は口縁部を意図的に打ち欠き、仮器化していた。

545 は田辺編年の TK10 型式併行の古い段階、546 は MT15 型式に併行すると考えられる。

547～550 は墓壙上面から出土した一群。547 は 548 の上にあり、セットとして置かれたと考えられるが、焼成時のセット関係には無い。547 には明瞭な稜が伴う。田辺編年の MT15 型式から TK10 型式にかけてのものと考えられる。

549 は横瓶。いわゆる俵瓶である。砲弾型の体部を叩き整形し、成形時の口縁部側は蓋をして平らになっている。体部は、外面には平行叩き目痕が、内面には同心円当て具痕が見え、成形時の体部上半には横方向のナデも見られる。成形時の体部側面に円孔を開けて別途整形の口縁部を付加したと見られるが、口縁部は欠損のため遺存していない。素地は精良で、断面はセピア色を呈する。伊賀地域では横瓶の出土は珍しく、猿投産の可能性がある。

550 は壺。短く外反する口縁部で、端部は面を形成して上下に拡張している。体部は、外面には平行叩き目痕が、内面には同心円当て具痕が見える。同心円当て具痕の重複状況から、体部全体を成形した



第30図　東条１号墳出土遺物実測図（12）　埋葬施設２刀子・土器類（538は１：２、その他１：４）

後に、底部を丸底にするための成形をしていると考えられる。素地には石英を多く含んでおり、埋葬施設１で見られた中心的な須恵器群と共通する。底部は意図的に打ち抜かれている。

ｄ　その他の遺物

その他の遺物には、古墳築造以前のものと、埋葬施設１・２以後のものがある（第30図）。

551は墳丘上から出土した須恵器坏蓋。工事立会初日に出土したため、出土位置は明確ではないが、調査区北端部の表土直下の位置であった。外面に稜を伴わず、埋葬施設１・２よりも新しい時期のものである。陶邑編年のTK43型式併行であろう。以上のことから、この須恵器は埋葬施設３に伴う可能性が考えられるが、断定はできない。

552･553は埋葬施設１・２の墓壙内から出土した。いずれも土師器で、552は高坏、553は手焙り形土器の破片である。553aは笠部の破片で、正面には竹管状工具の刺突による施文があり、側面にはヘラ状工具による記号ないしは施文が見られる。

この２点は、概ね古墳時代前期初頭頃のものである。東条１号墳築造以前のもので、先行する墳墓があった可能性を示唆している。　（伊藤）

3　屋敷の下遺跡出土遺物

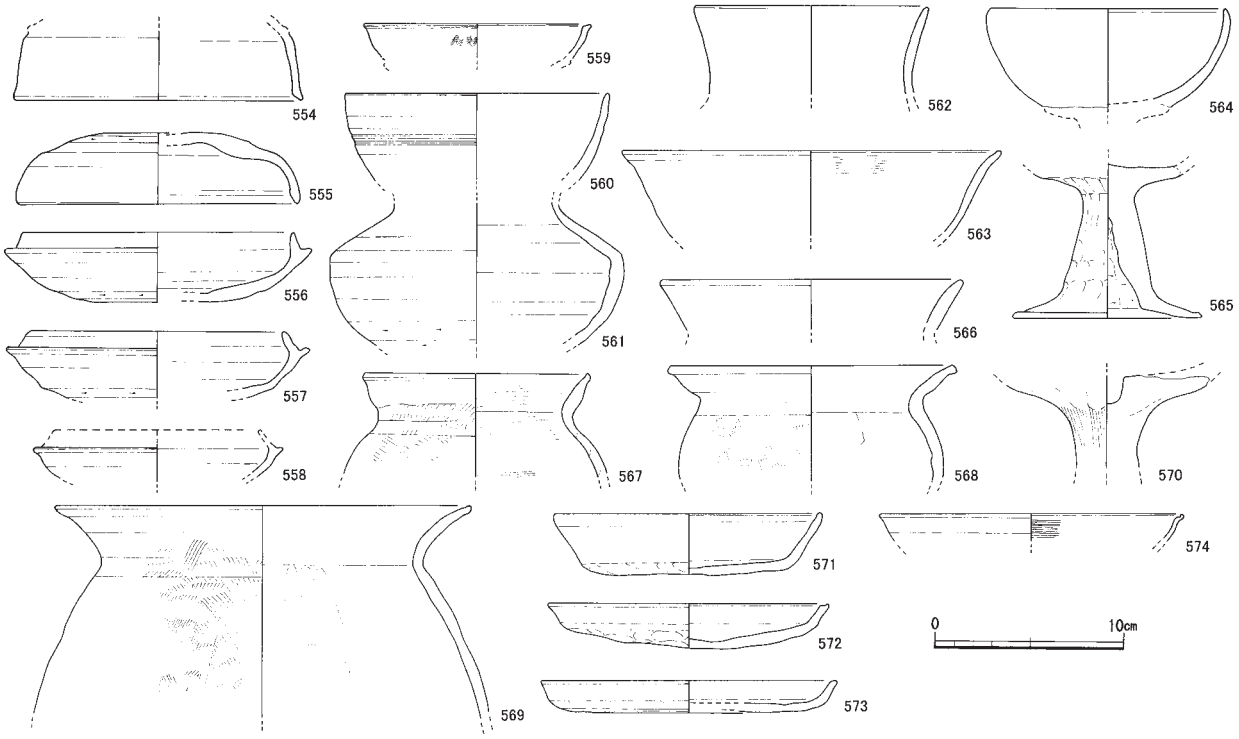
屋敷の下遺跡（西地区）出土遺物は、谷状落ち込みからの出土である（第31図）。

554～561は須恵器。このうち、554～558は須恵器蓋坏。554は坏蓋。小片だが、田辺編年のTK10型式併行のものであろう。555～557は口縁部が内傾しており、田辺編年TK43～209型式併行の特徴を示す。

558は内傾する口縁部で、端部は欠損するものの、口縁部径は10cm程度と考えられる。精良な素地とその形態から、尾張猿投産と考えられる。猿投窯編年のⅢ新（H27）～Ⅳ古（Ⅰ101）の段階[19]に相当し、７世紀中葉頃のものと考えられる。

559は𤮊。内彎する口縁部の上面に凹面を形成する。素地の状態から尾張猿投産の可能性が考えられる。560は椀であろうか。外面に３条の沈線を伴っている。561は短頸壺と考えられる。概ね６世紀後葉から７世紀前半頃のものと考えられる。

562～569は古墳時代後期と考えられる土師器類。562は直口壺。頸部の屈曲は丸い。おそらく丸底を呈すると考えられる。563は有稜高坏。口縁端部は



第31図　屋敷の下遺跡（西地区）出土遺物実測図　（１：４）

内面が強いヨコナデによりやや窪む。564は椀形高坏。口縁端部の内彎が強い。565は高坏脚部。残存状況からは、坏部が有稜なのか椀形なのかは分からない。脚部内面にはヘラケズリが見られる。

566～569は甕。口縁部は「く」の字形に屈曲するもので、古墳時代中期までにある布留形のものは見られない。口縁部は外反しながら開き、端部は面を形成している。外面はハケメ調整のものが多い。568は、古墳時代後期のなかでもやや新しく、7世紀代頃のものかも知れない。

570～573は奈良・平安時代の土師器類。570は高坏の脚部から坏下部にかけての破片。脚柱と坏下部は貼付法で成形している。

571～573は同一地点からまとまって出土した。571は坏。屈曲して開く口縁部で、端部内面は強いヨコナデによりやや窪む。572・573は皿。口縁端部外面に弱い面を形成している。これらは伊賀国府跡のSK1035出土土器[20]に類似するもので、9世紀後半頃のものと考えられる。

574は瓦器椀。口縁端部内面に沈線がめぐる。12世紀後葉から13世紀前半頃のものと考えられる[21]。

（伊藤）

【註】

(1) 大刀の報告に際しては臼杵勲氏の研究を参考にした。臼杵勲「古墳時代の鉄刀について」（『日本古代文化研究』創刊号、PHALANX －古墳文化研究会－、1984年）。
(2) 羽曳野市教育委員会『史跡古市古墳群峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』（2002年）。
(3) 埋蔵文化財天理教調査団『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』（1995年）。置田雅昭「古墳時代の木製刀柄装具」（『天理大学学報』第145輯、天理大学学術研究会、1985年）。置田雅昭「古墳時代の刀剣鞘装具」（『考古学雑誌』第71巻第1号、日本考古学会、1985年）。豊島直博『古墳時代前期の鉄製刀剣』（2005年度～2007年度科学研究費補助金（若手B）研究成果報告書、2008年）。
(4) 布目順郎「勝浦41号墳出土の繊維製品について」（『若宮工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第2集、福岡県教育委員会、1980年）。藤田淳「第6節金属製品に遺存する有機質遺物について」（『朝来郡和田山町所在向山古墳群市乗寺古墳群市乗寺経塚矢別遺跡』兵庫県教育委員会、1999年）。沢田むつ代「古墳出土の鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き」（『MUSEUM』第617号　東京国立博物館、2008年）。
(5) 以下、織物の用語・観察法については、沢田むつ代氏に準拠した。沢田むつ代「出土繊維の観察法」（『季刊考古学』第91号、雄山閣、2005年）。
(6) 種類・時期が異なるが、大阪府珠金塚古墳南槨出土鉄剣2における鞘装具の組み立て工程・復元図が参考例となる。細川晋太郎「古墳時代中期の鉄剣と鉄刀の構造」（『古文化談叢』第58集、九州古文化研究会、2007年）。
(7) 前掲註（4）沢田氏論文。
(8) 奈良県立橿原考古学研究所『斑鳩藤ノ木古墳』（第二・三次調査報告書、1993年）。島根県古代文化センター『上塩冶築山古墳の研究』（1999年）。
(9) 袋井市教育委員会『団子塚九号墳出土遺物保存処理報告書』（1994年）。
(10) 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1981年）。
(11) 鉄鏃の用語・分類については、杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」（『橿原考古学研究所論集』第八、吉川弘文館、1988年）に準拠した。
(12) 鉄鏃の編年については、杉山秀宏氏前掲註（10）論文のほか、尾上元規「古墳時代鉄鏃の地域性－長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として－」（『考古学研究』第40巻第1号、1993年）、関美則「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』PHALANX －古墳文化研究会－、1986年）などを参考にした。
(13) 前掲註（10）田辺氏文献。
(14) 車崎正彦「隅田八幡人物画像鏡の年代」（『継体王朝の謎【うばわれた王権】』宇治市教育委員会編、河出書房新社、1995年）。
(15) 森下章司「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」（『史林』第74巻第6号、1991年）。
(16) 名張市遺跡調査会『尻矢古墳群』（1996年）。
(17) 玉類の所見は大賀克彦氏のご教示による。
(18) 大賀克彦「山陰系玉類の基礎的研究」（『出雲玉作の特質に関する研究－古代出雲における玉作の研究Ⅲ－』、島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、2009年）。大賀克彦「玉類」（『古墳時代の考古学4副葬品の型式と編年』同成社、2013年）。
(19) 東海土器研究会編『須恵器生産の出現から消滅』（2000年）。
(20) 三重県埋蔵文化財センター『伊賀国府跡（第4次）発掘調査報告』（1992年）。
(21) 福田典明「伊賀地域における瓦器に関する覚書」（『中近世土器の基礎研究』10、2006年）。

【参考文献】

・大賀克彦「日本列島におけるガラス製小玉の変遷」（『小羽山古墳群』清水町教育委員会、2002年）。
・岸本直文「三角縁神獣鏡の工人群」（『史林』第72巻第5号、史学研究会、1989年）。
・権現山51号墳発掘調査団『権現山51号墳』（1991年）。
・樋口隆康『古鏡』（新潮社、1979年）。
・肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦「材質とその歴史的返遷」（『月刊文化財』565、文化庁文化財部、2010年）。
・福永伸哉ほか『シンポジウム三角縁神獣鏡』（学生社、2003年）。
・福永伸哉「いわゆる継体期における威信財変化とその意義」（『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団、2005年）。

第１表　東条１号墳出土金属製品観察表（１）　大刀ほか

報告番号	実測番号	名称	出土遺構	法量（cm）	形態的特徴
１－１	001-01	大刀	埋葬施設１	全長 112.7cm、刀身部長 91.4cm、最大幅 4.3cm、厚さ 0.9cm、茎部長 21.3cm、最大幅 3.5cm、厚さ 0.85cm	捩り環頭大刀。
2	002-05	大刀装具	埋葬施設１	残存長 4.2 cm、幅４㎜、厚さ５㎜	捩り環頭部（１－１の柄頭に装着されていたと考えられる）。
156	003-04	銅釧	埋葬施設２	外径 7.25～7.4cm、内径 6.4～6.55cm、幅４～５㎜、厚さ３㎜	青銅製と考えられる。
537	039-01	鏡	埋葬施設２	直径 11.6～11.8 cm、厚さ１～２㎜	四獣形鏡。
538	002-04	刀子	埋葬施設２	刃身部残存長 5.2cm、最大幅 1.6cm、厚さ 0.25cm、茎部長４cm、最大幅 1.1cm、厚さ 0.3cm	鹿角装刀子。

第２表　東条１号墳出土金属製品観察表（２）　鉄鏃

報告番号	実測番号	名称	出土遺構	全長	鏃身部			頸部			茎部			形態的特徴		
					長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚	鏃身部	鏃身関部	関部
3	002-01	鉄鏃	埋葬施設１	(12.5)	(2.6)	0.7	0.35	8.8	0.55	0.45	(1.1)	0.45	0.4	片刃形	直角	角関か台形関
4	002-02	鉄鏃	埋葬施設１	(11.0)	(2.0)	0.65	0.3	8.5	0.5	0.35	(0.5)	0.45	0.35	片刃形	直角	台形関
5	002-03	鉄鏃	埋葬施設１	(11.5)	(2.4)	0.75	0.35	8.5	0.55	0.4	(0.5)	0.4	0.35	片刃形	直角	台形関
6	003-01a	鉄鏃	埋葬施設１	(13.3)	3.4	1.2	0.4	5.2	0.6	0.3	(4.7)	0.45	0.35	長三角形	わずかに逆刺	角関？
7	003-01b	鉄鏃	埋葬施設１	(16.4)	3.3	0.85	0.3	8.4	0.5	0.4	(4.7)	0.4	0.35	片刃形	直角	角関？
8	003-01c	鉄鏃	埋葬施設１	(16.3)	2.9	0.9	0.35	9.1	0.55	0.35	(4.3)	0.35	0.3	片刃形	直角	角関？
9	002-07	鉄鏃	埋葬施設１								(3.4)	0.3	0.25			
10	002-06	鉄鏃	埋葬施設１								(3.7)	0.25	0.25			
11	002-08	鉄鏃	埋葬施設１								(3.8)	0.35	0.4			
12	003-03	鉄鏃	埋葬施設１								(2.2)	0.25	0.25			
13	003-02	鉄鏃	埋葬施設１								(4.8)	0.35	0.35			

※（　）カッコ付き数字は残存長を示す
※３～５は大刀の上や側面で出土。６～８は大刀より下面で出土。

第３表　東条１号墳出土金属製品観察表（３）　鞘片

報告番号	実測番号	第14図での本来の位置	法量（cm）		形態的特徴（外面）	形態的特徴（内面）
			残存長	残存幅		
１－1a	001-01	１－1a	3.8	2.2	鞘木→有機物Ｂ→有機物Ｃ→有機物Ｄの順。 Ｘ線写真から、鞘木へ有機物Ａを巻付けていたことがわかる。	－
１－1b	001-01	１－1b	3.4	1.6	鞘木→有機物Ｂ→有機物Ｄの順。 Ｘ線写真から、鞘木へ有機物Ａを巻付けていたことがわかる。	－
１－1c	001-01	１－1c	8.7	1.9	鞘木→有機物Ａ→有機物Ｂ→有機物Ｃ→有機物Ｄの順。 Ｘ線写真から、鞘木へ有機物Ａを巻付けていたことがわかる。 有機物Ｂ・Ｄに黒漆を塗布。	－
１－２	040-06	不明	3.4	2.6	鞘木→（有機物Ａ）→有機物Ｂ→有機物Ｄの順。 有機物Ｄに黒漆を塗布。	鞘木へ有機物Ａを巻付け・接着時の痕跡。
１－３	040-05	不明	2.7	2.0	鞘木→有機物Ａ→有機物Ｂの順。	鞘木へ有機物Ａを巻付け・接着時の痕跡。
１－４	040-03	１－1a・ １－９付近	3.9	2.6	鞘木→有機物Ａ→有機物Ｂの順。 有機物Ｂの経糸は太さ 0.6～0.8㎜、織り密度７本／ cm 程度、緯糸は太さ 0.4㎜、織り密度 20 本／ cm 程度。	鞘木へ有機物Ａを巻付け・接着時の痕跡。
１－５	040-04	１－５	2.8	1.5	鞘木→有機物Ｂ→有機物Ｃの順。 有機物Ｃに黒漆を塗布。 なお、有機物Ｃは有機物Ｄの可能性も残る。	鞘木へ有機物Ａを巻付け・接着時の痕跡。
１－６	040-07	不明	3.6	2.9	鞘木→有機物Ｂ→有機物Ｄの順。 有機物Ｄに黒色の腐食物が付着。黒漆の可能性がある。	鞘木へ有機物Ａを巻付け・接着時の痕跡。
１－７	040-02	１－７	6.7	4.8	鞘木→有機物Ａ→（有機物Ｂ）→有機物Ｄ→撚り糸→平絹の順。 木製鞘口装具をはめ込んでいた痕跡がある。 平絹は、糸の太さ 0.3㎜、織り密度 19 × 22 本／ cm。 有機物Ｄに黒色の腐食物が付着。黒漆の可能性がある。	鞘木へ有機物Ａを巻付け・接着時の痕跡。
１－８	040-02	１－８	5.4	3.8	鞘木→有機物Ａ→有機物Ｄ→布の順。 木製鞘口装具をはめ込んでいた痕跡がある。 布は、Ｓ撚り（右撚り）が確認できることから、麻などの植物繊維を織りだしたものと考えられる。目は粗い。 有機物Ｄに黒色の腐食物が付着。黒漆の可能性がある。	鞘木へ有機物Ａを巻付け・接着時の痕跡。
１－９	040-01	１－９	9.4	3.3	鞘木→有機物Ｂ→有機物Ｃ→有機物Ｄの順。有機物Ａは鞘口側から切先側へ、有機物Ｂは切先側から鞘口側へと巻く。 有機物Ｂ・Ｄに黒漆を塗布。有機物Ｃにも黒漆を塗布していた可能性がある。	鞘木へ有機物Ａを巻付け・接着時の痕跡。

※漆は、黒色を呈するものについて観察表に記した。それ以外の漆を塗布したと考えられる部分や、漆を接着剤として使用したと考えられる部分は、各所で観察できる。

第４表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（１）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
28	34-06	胸部周辺	勾玉	翡翠	淡緑色	3.24	1.11	0.20	10.46	完形	片面穿孔	丁字頭 Nw 型
29	34-16	胸部周辺	丸玉	重層ガラス	白色透明	不明	不明	不明	(0.90)	小欠	重層	粉砕
30	33-11	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.63	1.69	0.18~0.22	1.19	完形	両面穿孔	
31	33-13	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.59	1.96	0.13~0.28	1.19	完形	片面穿孔	割れ円錐有
32	34-15	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.59	2.00	0.1~0.25	1.20	完形	片面穿孔	
33	33-03	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.69	1.91	0.12~0.25	1.65	完形	片面穿孔	割れ円錐有
34	33-10	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.89	2.14	0.1~0.28	3.21	完形	片面穿孔	割れ円錐有
35	33-15	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.84	2.29	0.18~0.28	3.09	完形	両面穿孔	
36	33-01	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.86	2.32	0.1~0.3	3.11	完形	片面穿孔	割れ円錐有
37	33-06	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.86	2.39	0.16~0.23	3.35	完形	両面穿孔	
38	33-05	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.86	2.33	0.1~0.3	3.19	完形	片面穿孔	割れ円錐有
39	33-08	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.81	2.42	0.1~0.3	2.98	完形	両面穿孔	
40	33-07	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.84	2.45	0.12~0.3	3.24	完形	片面穿孔	
41	33-09	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.83	2.51	0.1~0.3	3.26	完形	片面穿孔	割れ円錐有
42	33-02	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.95	2.55	0.15~0.22	3.82	完形	両面穿孔	
43	33-04	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.86	2.54	0.16~0.22	3.53	完形	両面穿孔	
44	33-12	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.84	2.54	0.18~0.22	3.41	完形	両面穿孔	
45	33-14	胸部周辺	管玉	碧玉	深緑色	0.87	2.63	0.12~0.25	3.74	完形	両面穿孔	
46	34-04	胸部周辺	勾玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.48	1.82	0.10	(0.93)	先端欠損	引き伸ばし	二次加工か
47	34-02	胸部周辺	勾玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.80	1.20	0.15	(1.64)	先端欠損	引き伸ばし	二次加工か
48	34-03	胸部周辺	勾玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.67	0.81	0.15	(1.51)	先端欠損	引き伸ばし	二次加工か
49	34-01	胸部周辺	勾玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.71	1.85	0.15	(1.95)	先端欠損	引き伸ばし	二次加工か
50	34-13	胸部周辺	管玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.65	0.74	0.23	(0.45)	両端欠損	引き伸ばし	二次加工か
51	34-14	胸部周辺	管玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.64	1.41	0.25	(0.78)	一部欠損	引き伸ばし	二次加工か
52	34-11	胸部周辺	管玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.61	2.00	0.25	1.02	完形	引き伸ばし	二次加工か
53	34-12	胸部周辺	管玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.65	2.00	0.25	1.24	完形	引き伸ばし	二次加工か
54	34-09	胸部周辺	管玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.61	2.04	0.20	1.38	完形	引き伸ばし	二次加工か
55	34-10	胸部周辺	管玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.62	2.03	0.22	1.39	完形	引き伸ばし	二次加工か
56	34-08	胸部周辺	管玉	ソーダガラス	青緑色半透明	0.65	2.11	0.20	1.45	完形	引き伸ばし	二次加工か
57	14-04	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.26	0.12	0.09	0.01	完形	引き伸ばし	
58	14-05	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.25	0.15	0.09	0.01	完形	引き伸ばし	
59	13-10	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	淡青緑色半透明	0.25	0.19	0.08	0.01	完形	鋳型	
60	14-03	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	黄緑色半透明	0.28	0.14	0.09	0.01	完形	引き伸ばし	銅＋錫酸鉛
61	13-03	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.36	0.19	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
62	13-07	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.34	0.25	0.13	0.02	完形	引き伸ばし	
63	13-01	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.39	0.22	0.17	0.03	完形	引き伸ばし	
64	13-02	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.38	0.23	0.15	0.01	完形	引き伸ばし	
65	15-17	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.21	0.20	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
66	16-01	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.25	0.19	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
67	16-21	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.26	0.26	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
68	16-07	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.29	0.29	0.11	0.03	完形	引き伸ばし	
69	16-09	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	濃青色透明	0.30	0.19	0.10	0.02	完形	鋳型	
70	16-10	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.19	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
71	16-22	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.15	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
72	13-11	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.24	0.12	0.05	完形	引き伸ばし	
73	13-15	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.31	0.21	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
74	15-02	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.32	0.15	0.03	完形	引き伸ばし	
75	15-03	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.29	0.30	0.14	0.02	完形	引き伸ばし	

第５表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（２）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
76	15-05	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.21	0.08	0.02	完形	引き伸ばし	
77	13-27	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.29	0.18	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
78	13-31	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	青色透明	0.29	0.18	0.09	0.02	完形	引き伸ばし	
79	13-32	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.34	0.12	0.04	完形	引き伸ばし	
80	13-12	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.36	0.24	0.14	0.03	完形	引き伸ばし	
81	13-13	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.35	0.23	0.15	0.06	完形	引き伸ばし	
82	13-14	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.33	0.18	0.13	0.02	完形	引き伸ばし	
83	13-19	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.36	0.28	0.12	(0.04)	小欠	引き伸ばし	割れあり
84	13-28	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.33	0.18	0.14	0.04	完形	引き伸ばし	
85	13-29	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.35	0.26	0.13	0.04	完形	引き伸ばし	
86	13-30	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.34	0.21	0.10	0.04	完形	引き伸ばし	
87	14-01	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.33	0.20	0.10	0.04	完形	引き伸ばし	
88	14-02	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.32	0.15	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
89	15-06	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.40	0.26	0.20	0.04	完形	引き伸ばし	割れあり
90	14-20	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.37	不明	0.13	(0.03)	小欠	引き伸ばし	一部欠損
91	16-02	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.35	0.22	0.12	0.02	完形	鋳型	
92	16-19	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.31	0.21	0.13	0.02	完形	鋳型	
93	16-11	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.28	0.19	0.11	0.01	完形	鋳型	
94	16-04	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.32	0.20	0.10	0.02	完形	鋳型	
95	16-05	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.29	0.20	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
96	16-06	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.33	0.20	0.11	0.03	完形	引き伸ばし	
97	16-08	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.33	0.20	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
98	16-12	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.28	0.30	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	高アルミナ？
99	16-13	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.31	0.20	0.12	0.02	完形	鋳型	
100	16-14	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.31	0.24	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
101	16-15	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.29	0.20	0.10	(0.01)	小欠	鋳型	
102	16-16	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.15	0.15	0.01	完形	引き伸ばし	赤彩付着
103	16-17	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.29	0.12	0.15	0.01	完形	引き伸ばし	
104	16-20	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.25	0.13	0.09	0.01	完形	引き伸ばし	
105	16-23	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.29	0.15	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
106	16-24	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.22	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
107	16-25	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.32	0.20	0.15	0.02	完形	引き伸ばし	
108	34-07	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.34	0.20	0.12	0.04	完形	引き伸ばし	
109	16-03	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.42	0.20	0.14	0.03	完形	引き伸ばし	
110	13-16	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.27	0.15	0.13	0.01	完形	引き伸ばし	
111	14-09	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.25	0.28	0.08	0.01	完形	引き伸ばし	
112	14-17	胸部周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.26	0.16	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
113	14-18	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.26	0.17	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	割れあり
114	13-05	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.19	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
115	13-08	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.32	0.25	0.15	0.01	完形	引き伸ばし	
116	13-09	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.29	0.25	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
117	15-04	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.28	0.20	0.14	0.02	完形	引き伸ばし	
118	15-07	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.31	0.15	0.14	0.01	完形	引き伸ばし	
119	15-08	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.28	0.21	0.13	0.02	完形	鋳型	
120	15-09	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.20	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
121	15-10	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.29	0.20	0.12	0.02	完形	鋳型	
122	15-11	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.32	0.20	0.10	0.02	完形	鋳型	
123	15-12	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色半透明	0.32	0.20	0.13	0.02	完形	引き伸ばし	

第６表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（３）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
124	15-13	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.28	0.15	0.09	0.01	完形	鋳型	
125	15-14	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.28	0.20	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
126	15-15	胸部周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.28	0.20	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
127	15-18	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.29	0.14	0.14	0.01	完形	引き伸ばし	
128	15-19	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.29	0.20	0.11	0.02	完形	鋳型	
129	13-26	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.31	0.20	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
130	14-06	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.29	0.15	0.10	0.01	完形	鋳型	
131	14-07	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.28	0.20	0.08	0.01	完形	鋳型	
132	14-08	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.21	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
133	14-10	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.29	0.19	0.09	0.01	完形	鋳型	
134	14-11	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.26	0.20	0.09	0.02	完形	引き伸ばし	
135	14-12	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.29	0.21	0.12	0.02	完形	鋳型	
136	14-13	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.29	0.18	0.07	0.02	完形	引き伸ばし	
137	14-14	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.28	0.22	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
138	14-15	胸部周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.29	0.20	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	一部欠損
139	14-16	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.27	0.18	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	高アルミナ？
140	14-19	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.19	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
141	13-06	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.35	0.18	0.13	0.01	完形	引き伸ばし	
142	13-17	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.36	0.22	0.15	0.03	完形	引き伸ばし	
143	15-16	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.37	0.25	0.15	0.02	完形	鋳型	
144	16-18	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.31	0.18	0.12	0.01	完形	鋳型	
145	13-18	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.32	0.18	0.11	0.01	完形	鋳型	
146	13-24	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.32	0.30	0.09	0.02	完形	鋳型	
147	13-04	胸部周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.33	0.20	0.13	0.02	完形	鋳型	
148	13-22	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.35	0.18	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
149	13-23	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.34	0.20	0.14	0.02	完形	引き伸ばし	
150	13-25	胸部周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.34	0.20	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
151	13-21	胸部周辺	小玉ｂ	ソーダガラス	濃青色透明	0.69	0.40	0.23	0.25	完形	引き伸ばし	
152	15-21	胸部周辺	小玉ｂ	ソーダガラス	濃青色透明	0.61	0.36	0.21	0.19	完形	引き伸ばし	
153	15-22	胸部周辺	小玉ｂ	ソーダガラス	濃青色透明	0.60	0.40	0.15	0.20	完形	引き伸ばし	
154	15-23	胸部周辺	小玉ｂ	ソーダガラス	濃青色透明	0.60	0.40	0.15	0.20	完形	引き伸ばし	
155	15-20	胸部周辺	小玉ｂ	ソーダガラス	紺色透明	0.65	0.41	0.22	0.23	完形	引き伸ばし	
157	34-05	左手周辺	勾玉	瑪瑙	明褐色	3.50	0.90	0.35	8.76	完形	片面穿孔	
158	27-02	左手周辺	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.78	0.52	0.14	0.47	完形	引き伸ばし	左手北側
159	27-06	左手周辺	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.63	0.12	0.59	完形	引き伸ばし	左手東側
160	27-04	左手周辺	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.62	0.16	0.60	完形	引き伸ばし	左手東側
161	27-05	左手周辺	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.85	0.67	0.15	0.65	完形	引き伸ばし	左手東側
162	27-03	左手周辺	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.88	0.66	0.18	0.66	完形	引き伸ばし	左手北側
163	27-07	左手周辺	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.95	0.64	0.18	0.7	完形	引き伸ばし	左手東側
164	27-01	左手周辺	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.97	0.71	0.19	0.87	完形	引き伸ばし	左手北側
165	26-23	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	青緑灰色透明	0.30	0.20	0.10	(0.01)	小欠	引き伸ばし	
166	17-24	左手周辺	小玉ａ	ガラス	黄緑色不透明	0.39	0.34	0.11	0.07	完形	鋳型	
167	17-30	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	黄緑色不透明	0.27	0.31	0.09	0.04	完形	引き伸ばし	銅＋錫酸鉛
168	26-22	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	黄緑色半透明	0.23	0.14	0.09	0.01	完形	引き伸ばし	銅＋錫酸鉛
169	26-20	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	黄緑色半透明	0.29	0.16	0.09	0.01	完形	引き伸ばし	銅＋錫酸鉛
170	26-21	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	黄緑色半透明	0.30	0.20	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	銅＋錫酸鉛
171	26-15	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.39	0.26	0.15	0.04	完形	引き伸ばし	
172	26-16	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.31	0.21	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	

第７表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（４）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
173	26-18	左手周辺	小玉ａ	ガラス	淡青色半透明	0.28	0.20	0.08	0.02	完形	鋳型	
174	26-19	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.28	0.14	0.08	0.01	完形	引き伸ばし	
175	26-14	左手周辺	小玉ａ	ガラス	淡青色半透明	0.30	0.25	0.08	0.03	完形	鋳型	
176	26-17	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.30	0.20	0.08	0.02	完形	引き伸ばし	
177	17-12	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.48	0.32	0.22	0.08	完形	引き伸ばし	
178	17-14	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.34	0.13	0.05	完形	引き伸ばし	
179	18-10	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.45	0.30	0.10	0.07	完形	引き伸ばし	
180	18-18	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.36	0.25	0.12	0.04	完形	引き伸ばし	
181	18-20	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.29	0.21	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
182	19-17	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.29	0.41	0.11	0.05	完形	引き伸ばし	
183	19-22	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.30	0.09	0.03	完形	引き伸ばし	
184	20-05	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.36	0.20	0.14	(0.03)	小欠	引き伸ばし	
185	20-08	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.32	0.26	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
186	20-10	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.31	0.30	0.13	0.04	完形	引き伸ばし	
187	20-11	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.29	0.12	0.04	完形	引き伸ばし	
188	20-12	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.28	0.20	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
189	20-14	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.34	0.10	0.05	完形	引き伸ばし	
190	20-16	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.29	0.24	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
191	20-17	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.36	0.24	0.15	0.05	完形	引き伸ばし	
192	20-18	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.39	0.25	0.14	0.06	完形	引き伸ばし	割れあり
193	20-19	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.30	0.24	0.13	0.05	完形	引き伸ばし	
194	20-25	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.31	0.25	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
195	20-26	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.35	0.30	0.12	0.05	完形	引き伸ばし	
196	21-21	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.29	0.25	0.10	0.03	完形	鋳型	
197	23-12	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.31	0.25	0.11	0.03	完形	引き伸ばし	
198	23-18	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.25	0.11	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	割れあり
199	24-03	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.22	0.10	0.08	0.01	完形	引き伸ばし	割れあり
200	24-10	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.32	0.30	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
201	24-11	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.32	0.15	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
202	24-12	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.31	0.20	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
203	24-14	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.33	0.30	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
204	24-15	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.28	0.30	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
205	24-18	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.30	0.10	0.04	完形	引き伸ばし	
206	24-19	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.30	0.24	0.09	0.03	完形	引き伸ばし	
207	24-20	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.35	0.09	0.03	完形	引き伸ばし	
208	25-10	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.30	0.12	0.04	完形	引き伸ばし	
209	25-11	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.32	0.15	0.13	0.01	完形	引き伸ばし	
210	25-12	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.28	0.14	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
211	25-17	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.30	0.25	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
212	25-19	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.29	0.21	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
213	25-20	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.20	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
214	17-05	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.38	0.30	0.14	0.06	完形	引き伸ばし	
215	17-06	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.38	0.32	0.15	0.06	完形	引き伸ばし	
216	17-17	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.39	0.23	0.12	0.05	完形	引き伸ばし	
217	17-18	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.40	0.23	0.15	0.05	完形	引き伸ばし	
218	17-20	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.38	0.35	0.15	0.06	完形	引き伸ばし	
219	17-25	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.40	0.30	0.13	0.07	完形	引き伸ばし	
220	18-28	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	青色透明	0.51	0.25	0.18	0.07	完形	引き伸ばし	

第８表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（５）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
221	18-04	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.48	0.25	0.15	0.07	完形	引き伸ばし	
222	18-09	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.37	0.30	0.18	0.06	完形	引き伸ばし	
223	18-27	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.46	0.30	0.15	0.06	完形	引き伸ばし	
224	26-12	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.30	0.15	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
225	18-29	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.37	0.45	0.12	0.07	完形	引き伸ばし	
226	19-03	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.40	0.25	0.11	0.05	完形	引き伸ばし	
227	19-04	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.42	0.24	0.15	0.06	完形	引き伸ばし	
228	19-06	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.38	0.20	0.14	0.03	完形	引き伸ばし	
229	19-11	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.29	0.32	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
230	19-12	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.31	0.24	0.10	0.03	完形	鋳型	
231	19-27	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.29	0.24	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
232	19-30	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.30	0.23	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
233	20-01	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.33	0.25	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
234	20-03	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.30	0.13	0.04	完形	引き伸ばし	
235	20-04	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.20	0.14	0.03	完形	引き伸ばし	
236	20-23	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.34	0.20	0.11	0.03	完形	引き伸ばし	
237	20-28	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.33	0.20	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
238	20-29	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.36	0.20	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
239	18-08	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.30	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
240	20-27	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.32	0.20	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
241	21-09	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.20	0.09	0.01	完形	引き伸ばし	
242	21-14	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.25	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
243	21-25	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.31	0.13	0.10	0.01	完形	鋳型	
244	23-09	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.28	0.15	0.13	0.01	完形	鋳型	
245	23-10	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.33	0.20	0.12	0.01	完形	鋳型	
246	24-04	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.35	0.20	0.13	0.01	完形	引き伸ばし	
247	24-05	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.32	0.20	0.14	0.01	完形	引き伸ばし	
248	24-08	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.28	0.15	0.12	0.01	完形	鋳型	
249	24-13	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.35	0.20	0.15	0.02	完形	引き伸ばし	
250	24-17	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.35	0.20	0.15	0.02	完形	引き伸ばし	
251	25-01	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.28	0.24	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
252	25-02	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.33	0.20	0.14	0.03	完形	引き伸ばし	
253	25-03	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.36	0.24	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
254	25-04	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.32	0.25	0.11	0.03	完形	引き伸ばし	
255	25-05	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.32	0.12	0.14	0.01	完形	引き伸ばし	
256	25-06	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.31	0.25	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
257	25-07	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.17	0.13	0.01	完形	引き伸ばし	
258	25-09	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.36	0.24	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
259	25-13	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.31	0.21	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
260	25-14	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.28	0.25	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
261	25-15	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.21	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
262	25-16	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.34	0.24	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
263	26-01	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.20	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
264	26-02	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.28	0.20	0.13	0.02	完形	引き伸ばし	
265	26-03	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.32	0.20	0.13	0.02	完形	引き伸ばし	
266	26-04	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.30	0.20	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
267	26-06	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.30	0.20	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
268	26-07	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.25	0.20	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	

第９表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（６）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
269	26-08	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.15	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
270	26-09	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.20	0.11	0.01	完形	引き伸ばし	一部欠損
271	26-10	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色透明	0.30	0.15	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
272	26-11	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.28	0.15	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
273	26-05	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.25	0.16	0.09	0.01	完形	引き伸ばし	
274	21-20	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.29	0.30	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
275	24-02	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.26	0.15	0.09	0.01	完形	鋳型	
276	25-18	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	青色半透明	0.28	0.20	0.11	0.01	完形	引き伸ばし	
277	25-08	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.33	0.21	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
278	23-11	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.28	0.20	0.09	0.01	完形	鋳型	
279	19-19	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.33	0.30	0.09	0.04	完形	引き伸ばし	
280	24-16	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.30	0.26	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
281	26-13	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.30	0.29	0.11	0.03	完形	引き伸ばし	
282	18-03	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.40	0.26	0.12	0.05	完形	引き伸ばし	
283	17-01	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.42	0.30	0.18	0.07	完形	引き伸ばし	
284	17-02	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.38	0.30	0.14	0.07	完形	鋳型	
285	17-03	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.40	0.25	0.10	0.05	完形	引き伸ばし	
286	17-04	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.42	0.30	0.18	0.06	完形	引き伸ばし	
287	17-07	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.34	0.25	0.10	0.04	完形	引き伸ばし	
288	17-08	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.43	0.30	0.14	0.05	完形	引き伸ばし	
289	17-11	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.39	0.30	0.12	0.07	完形	引き伸ばし	
290	17-13	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.48	0.30	0.17	0.07	完形	引き伸ばし	
291	17-15	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.42	0.33	0.12	0.08	完形	引き伸ばし	
292	17-16	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.40	0.30	0.13	0.07	完形	引き伸ばし	
293	17-21	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.38	0.30	0.13	0.07	完形	引き伸ばし	
294	17-22	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.42	0.29	0.17	0.05	完形	引き伸ばし	
295	17-23	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.45	0.33	0.15	0.09	完形	引き伸ばし	
296	17-26	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.45	0.30	0.13	0.09	完形	引き伸ばし	
297	17-27	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.40	0.30	0.15	0.07	完形	鋳型	
298	17-29	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.32	0.24	0.10	0.04	完形	鋳型	
299	16-26	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.28	0.20	0.13	0.02	完形	鋳型	
300	18-01	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.46	0.30	0.15	0.07	完形	引き伸ばし	
301	18-02	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.33	0.30	0.10	0.04	完形	引き伸ばし	
302	18-06	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.30	0.10	0.05	完形	引き伸ばし	
303	18-07	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.40	0.29	0.12	0.06	完形	引き伸ばし	
304	18-11	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.38	0.20	0.10	0.05	完形	引き伸ばし	
305	18-12	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.35	0.24	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
306	18-13	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.40	0.28	0.10	0.04	完形	引き伸ばし	
307	18-14	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.38	0.30	0.18	0.05	完形	引き伸ばし	
308	18-15	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.35	0.20	0.10	0.04	完形	引き伸ばし	
309	18-17	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.38	0.20	0.15	0.04	完形	引き伸ばし	
310	18-19	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.38	0.25	0.15	0.04	完形	引き伸ばし	
311	18-16	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.35	0.20	0.10	0.04	完形	鋳型	
312	17-09	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.40	0.30	0.12	0.05	完形	鋳型	
313	17-10	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.40	0.30	0.13	0.06	完形	引き伸ばし	
314	18-05	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.40	0.30	0.14	0.08	完形	鋳型	
315	17-19	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.50	0.31	0.17	0.09	完形	引き伸ばし	
316	18-22	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.31	0.20	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	

第 10 表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（７）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
317	18-23	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.35	0.20	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
318	18-24	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.32	0.20	0.11	0.03	完形	引き伸ばし	
319	18-25	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.32	0.25	0.11	0.03	完形	引き伸ばし	
320	18-26	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.25	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	赤色顔料付着
321	18-30	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.31	0.23	0.11	0.03	完形	鋳型	
322	19-01	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.20	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
323	19-02	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.34	0.20	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
324	19-05	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.23	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
325	19-07	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.20	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
326	19-09	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.25	0.25	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
327	19-10	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.31	0.20	0.08	0.03	完形	引き伸ばし	
328	19-13	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.31	0.25	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
329	19-14	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.34	0.20	0.11	0.03	完形	引き伸ばし	
330	19-16	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.33	0.21	0.10	0.03	完形	鋳型	
331	19-18	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.35	0.20	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
332	19-20	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.38	0.20	0.10	0.04	完形	鋳型	
333	19-15	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.41	0.20	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
334	19-21	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.35	0.20	0.13	0.03	完形	引き伸ばし	
335	19-23	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.29	0.20	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
336	19-24	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.27	0.20	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
337	19-25	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.24	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
338	19-29	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.34	0.24	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
339	20-02	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.20	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
340	20-06	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.33	0.20	0.12	0.03	完形	鋳型	
341	20-07	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.35	0.20	0.15	0.03	完形	鋳型	
342	20-09	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.25	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
343	20-20	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.34	0.20	0.12	0.03	完形	鋳型	
344	20-21	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.35	0.23	0.13	0.04	完形	鋳型	
345	20-22	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.33	0.20	0.10	0.03	完形	鋳型	
346	21-03	左手周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.22	0.15	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
347	21-04	左手周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.29	0.20	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
348	21-05	左手周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.26	0.22	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
349	21-06	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.31	0.20	0.13	0.02	完形	引き伸ばし	
350	21-08	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.20	0.20	0.07	0.01	完形	引き伸ばし	
351	21-12	左手周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.26	0.15	0.08	0.01	完形	引き伸ばし	
352	21-13	左手周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.28	0.10	0.13	0.01	完形	引き伸ばし	
353	21-15	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.28	0.20	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
354	21-16	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.28	0.20	0.11	0.01	完形	鋳型	カリガラスがベース？
355	21-17	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.28	0.14	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
356	21-18	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.24	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
357	21-19	左手周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.26	0.20	0.08	0.01	完形	引き伸ばし	
358	21-22	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.26	0.20	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
359	16-27	左手周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.27	0.15	0.11	0.01	完形	引き伸ばし	
360	22-02	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.32	0.24	0.10	0.03	完形	引き伸ばし	
361	22-04	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.17	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
362	22-05	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.25	0.16	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
363	22-06	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.25	0.20	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
364	22-07	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.33	0.30	0.11	0.04	完形	引き伸ばし	

第 11 表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（８）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
365	22-09	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.10	0.02	完形	鋳型	
366	22-10	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.24	0.10	0.02	完形	鋳型	
367	22-11	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.25	0.20	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
368	22-13	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.22	0.12	0.03	完形	鋳型	
369	22-14	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.12	0.02	完形	鋳型	
370	22-16	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.28	0.20	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
371	22-17	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.32	0.20	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
372	22-19	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.33	0.22	0.14	0.03	完形	引き伸ばし	
373	22-20	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.34	0.20	0.12	0.02	完形	鋳型	
374	22-21	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.32	0.17	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
375	22-22	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.11	0.02	完形	鋳型	
376	22-24	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.30	0.12	0.03	完形	引き伸ばし	
377	23-01	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.25	0.13	0.10	0.01	完形	鋳型	
378	23-03	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.25	0.19	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	
379	23-05	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.24	0.20	0.08	0.02	完形	引き伸ばし	
380	23-06	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.20	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
381	23-07	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.25	0.20	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	
382	23-08	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.15	0.11	0.01	完形	引き伸ばし	
383	23-14	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.21	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	
384	23-15	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.19	0.20	0.07	0.01	完形	引き伸ばし	
385	23-17	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.25	0.20	0.11	0.01	完形	鋳型	
386	23-19	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.16	0.15	0.01	完形	引き伸ばし	高アルミナ？
387	23-20	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.29	0.12	0.12	0.01	完形	鋳型	
388	24-01	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.13	0.13	0.01	完形	引き伸ばし	
389	24-06	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.30	0.13	0.12	0.01	完形	引き伸ばし	高アルミナ？
390	24-09	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.31	0.14	0.12	(0.01)	小欠	引き伸ばし	
391	26-24	左手周辺	小玉ａ	カリガラス	紫紺色透明	0.22	0.20	0.11	0.01	完形	引き伸ばし	
392	26-25	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.22	0.15	0.09	0.01	完形	引き伸ばし	
393	21-11	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紫紺色透明	0.25	0.20	0.10	0.01	完形	鋳型	カリガラスがベース
394	21-23	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.29	0.20	0.11	0.02	完形	引き伸ばし	
395	22-12	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.31	0.26	0.12	0.03	完形	鋳型	
396	22-15	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.12	0.02	完形	鋳型	
397	22-01	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.32	0.20	0.12	0.02	完形	鋳型	
398	23-13	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.32	0.20	0.10	0.02	完形	鋳型	
399	21-24	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.12	(0.02)	小欠	鋳型	一部欠損
400	22-18	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.32	0.30	0.12	0.04	完形	鋳型	
401	19-28	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.33	0.24	0.12	0.03	完形	鋳型	
402	23-04	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.24	0.20	0.10	0.01	完形	鋳型	
403	20-13	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.29	0.20	0.08	0.02	完形	鋳型	
404	20-15	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.10	0.03	完形	鋳型	
405	20-24	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.22	0.10	0.03	完形	鋳型	
406	22-03	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.30	0.14	0.03	完形	鋳型	
407	24-07	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.12	0.02	完形	鋳型	
408	21-07	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.27	0.20	0.08	0.03	完形	鋳型	
409	21-10	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.10	0.03	完形	鋳型	
410	22-08	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.10	0.03	完形	鋳型	
411	22-23	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.13	0.02	完形	鋳型	
412	22-25	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.11	0.02	完形	鋳型	

第 12 表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（９）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
413	23-16	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.30	0.20	0.12	0.02	完形	鋳型	
414	19-26	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.32	0.20	0.13	0.03	完形	鋳型	
415	23-02	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.32	0.20	0.10	0.02	完形	鋳型	
416	17-28	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.37	0.29	0.10	0.04	完形	鋳型	
417	18-21	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.34	0.20	0.11	0.04	完形	鋳型	
418	19-08	左手周辺	小玉ａ	ガラス	紺色半透明	0.36	0.24	0.10	0.04	完形	鋳型	
419	21-01	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃紫褐色透明	0.32	0.17	0.12	0.02	完形	引き伸ばし	
420	21-02	左手周辺	小玉ａ	ソーダガラス	濃紫褐色透明	0.31	0.13	0.15	0.01	完形	引き伸ばし	
421	31-02	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	1.00	0.83	0.18	0.98	完形	連珠	
422	27-08	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.76	0.61	0.12	0.50	完形	引き伸ばし	
423	29-05	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.72	0.68	0.12	0.52	完形	引き伸ばし	
424	31-24	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.72	0.47	0.12	0.36	完形	引き伸ばし	
425	27-11	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.73	0.61	0.10	0.44	完形	引き伸ばし	
426	32-06	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.73	0.64	0.15	0.51	完形	引き伸ばし	
427	31-20	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.73	0.61	0.12	0.49	完形	引き伸ばし	
428	28-05	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.74	0.54	0.15	0.39	完形	引き伸ばし	
429	27-15	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.75	0.65	0.18	0.50	完形	引き伸ばし	
430	28-02	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.75	0.52	0.15	0.40	完形	引き伸ばし	
431	30-16	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.75	0.63	0.20	0.50	完形	引き伸ばし	
432	31-21	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.75	0.63	0.12	0.49	完形	引き伸ばし	
433	27-20	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.76	0.55	0.20	0.43	完形	引き伸ばし	
434	32-04	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.76	0.57	0.12	0.50	完形	引き伸ばし	
435	30-02	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.76	0.46	0.13	0.38	完形	引き伸ばし	
436	30-19	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.76	0.65	0.12	0.54	完形	引き伸ばし	
437	28-09	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.77	0.58	0.18	0.55	完形	引き伸ばし	
438	32-07	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.77	0.62	0.15	0.55	完形	引き伸ばし	
439	30-07	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.77	0.54	0.12	0.44	完形	引き伸ばし	
440	30-08	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.77	0.50	0.15	0.45	完形	引き伸ばし	
441	28-12	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.78	0.70	0.12	0.63	完形	引き伸ばし	
442	28-13	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.78	0.54	0.15	0.51	完形	引き伸ばし	
443	30-10	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.78	0.55	0.15	0.44	完形	引き伸ばし	
444	30-11	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.78	0.67	0.12	0.56	完形	引き伸ばし	
445	31-04	右手下層	丸玉	ナトロンガラス	紺色透明	0.78	0.65	0.25	0.52	完形	包み巻き	
446	31-23	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.78	0.50	0.20	0.43	完形	引き伸ばし	
447	30-03	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.79	0.52	0.16	0.44	完形	引き伸ばし	
448	31-19	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.79	0.62	0.15	0.57	完形	引き伸ばし	
449	27-10	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.62	0.15	0.51	完形	引き伸ばし	
450	27-17	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.57	0.20	0.55	完形	引き伸ばし	
451	28-01	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.62	0.18	0.56	完形	引き伸ばし	
452	28-03	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.51	0.15	0.47	完形	引き伸ばし	
453	28-04	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.61	0.15	0.59	完形	引き伸ばし	
454	28-10	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.63	0.15	0.55	完形	引き伸ばし	
455	29-11	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.61	0.18	0.52	完形	引き伸ばし	
456	32-02	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.65	0.12	0.59	完形	引き伸ばし	
457	32-03	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.50	0.12	0.49	完形	引き伸ばし	
458	30-12	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.64	0.15	0.59	完形	引き伸ばし	
459	30-14	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.69	0.18	0.61	完形	引き伸ばし	
460	31-01	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.75	0.11	(0.68)	小欠	引き伸ばし	

第 13 表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（10）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
461	31-05	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.60	0.12	0.51	完形	引き伸ばし	
462	31-14	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.55	0.15	0.45	完形	引き伸ばし	
463	31-16	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.80	0.60	0.15	0.49	完形	引き伸ばし	
464	29-03	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.81	0.67	0.15	0.61	完形	引き伸ばし	
465	30-17	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.81	0.60	0.15	0.53	完形	引き伸ばし	
466	31-10	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.81	0.60	0.18	0.56	完形	引き伸ばし	
467	27-13	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.58	0.13	0.52	完形	引き伸ばし	
468	28-14	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.63	0.25	0.56	完形	引き伸ばし	
469	29-01	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.60	0.15	0.55	完形	引き伸ばし	
470	29-16	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.55	0.13	0.47	完形	引き伸ばし	
471	32-08	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.56	0.20	0.52	完形	引き伸ばし	
472	30-04	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.52	0.13	0.39	完形	引き伸ばし	
473	31-06	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.55	0.13	0.45	完形	引き伸ばし	
474	31-07	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.62	0.13	0.55	完形	引き伸ばし	
475	31-17	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.60	0.13	0.52	完形	引き伸ばし	
476	31-18	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.68	0.12	0.68	完形	引き伸ばし	
477	31-22	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.82	0.46	0.15	0.48	完形	引き伸ばし	
478	27-12	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.50	0.18	0.52	完形	引き伸ばし	
479	27-16	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.55	0.21	0.51	完形	引き伸ばし	
480	27-19	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.62	0.13	0.61	完形	引き伸ばし	
481	28-08	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.65	0.15	0.65	完形	引き伸ばし	
482	28-19	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.70	0.18	0.62	完形	引き伸ばし	
483	29-10	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.55	0.20	0.51	完形	引き伸ばし	
484	32-09	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.62	0.12	0.54	完形	引き伸ばし	
485	30-13	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.65	0.22	0.66	完形	引き伸ばし	
486	30-21	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.50	0.23	0.43	完形	引き伸ばし	
487	31-08	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.83	0.55	0.15	0.50	完形	引き伸ばし	
488	28-06	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.84	0.52	0.15	0.50	完形	引き伸ばし	
489	29-13	右手上層	丸玉	ナトロンガラス	紺色透明	0.84	0.74	0.18	0.71	完形	包み巻き	
490	28-16	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.85	0.72	0.15	0.77	完形	引き伸ばし	
491	29-02	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.85	0.68	0.13	0.64	完形	引き伸ばし	
492	29-06	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.85	0.58	0.18	0.58	完形	引き伸ばし	
493	32-01	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.85	0.53	0.13	0.51	完形	引き伸ばし	
494	30-18	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.85	0.54	0.12	0.54	完形	引き伸ばし	
495	30-20	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.85	0.68	0.18	(0.67)	小欠	引き伸ばし	
496	30-24	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.85	0.64	0.15	0.69	完形	引き伸ばし	
497	31-13	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.85	0.55	0.15	0.55	完形	引き伸ばし	
498	28-21	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.86	0.78	0.15	0.74	完形	引き伸ばし	
499	29-15	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.86	0.52	0.25	0.49	完形	引き伸ばし	
500	31-11	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.86	0.76	0.13	0.67	完形	引き伸ばし	
501	29-04	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.87	0.75	0.15	0.84	完形	引き伸ばし	
502	29-07	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.87	0.62	0.15	0.69	完形	引き伸ばし	
503	29-09	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.87	0.76	0.18	0.75	完形	引き伸ばし	
504	29-14	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.87	0.6	0.13	0.62	完形	引き伸ばし	
505	30-01	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.87	0.64	0.15	0.65	完形	引き伸ばし	
506	30-15	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.87	0.60	0.15	(0.61)	小欠	引き伸ばし	
507	27-18	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.88	0.70	0.20	0.71	完形	引き伸ばし	
508	28-07	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.88	0.56	0.15	0.58	完形	引き伸ばし	

第 14 表　東条１号墳主体部２出土玉類観察表（11）

報告番号	実測番号	出土地点	種別	材質	色調	最大径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存度	製作技法等	備考
509	30-22	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.88	0.59	0.20	0.59	完形	引き伸ばし	
510	32-05	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.89	0.54	0.20	0.6	完形	引き伸ばし	
511	30-25	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.89	0.67	0.12	0.68	完形	引き伸ばし	
512	27-09	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.90	0.72	0.18	0.78	完形	引き伸ばし	
513	28-22	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.90	0.68	0.20	0.74	完形	引き伸ばし	
514	29-08	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.90	0.65	0.12	0.66	完形	引き伸ばし	
515	29-12	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.90	0.65	0.15	0.77	完形	引き伸ばし	
516	30-05	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.90	0.70	0.15	0.85	完形	引き伸ばし	
517	30-06	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.90	0.73	0.15	0.85	完形	引き伸ばし	
518	30-23	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.90	0.73	0.12	0.76	完形	引き伸ばし	
519	31-15	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.90	0.56	0.20	0.6	完形	引き伸ばし	
520	31-25	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.90	0.80	0.18	0.84	完形	引き伸ばし	
521	31-03	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.91	0.67	0.18	0.73	完形	引き伸ばし	
522	27-14	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.92	0.60	0.18	0.65	完形	引き伸ばし	
523	28-18	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.92	0.76	0.15	0.89	完形	引き伸ばし	
524	28-23	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.92	0.80	0.15	0.88	完形	引き伸ばし	
525	31-09	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.92	0.63	0.20	0.78	完形	引き伸ばし	
526	28-11	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.93	0.70	0.15	0.78	完形	引き伸ばし	
527	31-12	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.93	0.56	0.15	0.72	完形	引き伸ばし	
528	28-17	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.96	0.77	0.20	0.79	完形	引き伸ばし	
529	28-20	右手上層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.96	0.73	0.18	0.82	完形	引き伸ばし	
530	30-09	右手下層	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.98	0.63	0.15	0.81	完形	引き伸ばし	
531	29-17	右手上層	小玉ａ	ソーダガラス	淡青色半透明	0.32	0.22	0.15	0.01	完形	引き伸ばし	
532	29-20	棺内北端	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.74	0.56	0.15	0.45	完形	引き伸ばし	
533	29-18	棺内北端	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.85	0.55	0.15	0.49	完形	引き伸ばし	
534	29-19	棺内北端	丸玉	ソーダガラス	紺色透明	0.81	0.73	0.12	0.68	完形	引き伸ばし	
535	13-20	棺内北端	小玉ａ	ソーダガラス	紺色透明	0.22	0.18	0.10	0.01	完形	引き伸ばし	高アルミナ？
536	15-01	棺内北端	小玉ａ	ソーダガラス	濃青色透明	0.30	0.28	0.10	0.02	完形	引き伸ばし	

第 15 表　東条１号墳・屋敷の下遺跡（西地区）出土土器類観察表

番号	実測番号	様・質	器種等	地区	遺構・層名等	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
14	5-1	須恵器	坏蓋	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ３	（口）１４．０ （高）５．４	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	５Y7/2　灰白	口縁 11/12	やや生焼け 15 と焼成段階からのセット
15	5-2	須恵器	坏身	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ３	（口）１１．８ （高）５．４	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	５Y7/2　灰白	完存	やや生焼け 14 と焼成段階からのセット
16	4-3	須恵器	坏蓋	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ７	（口）１２．９ （高）５．７	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	５Y7/2　灰白	ほぼ完存	歪み大 17 と焼成段階からのセット
17	4-4	須恵器	坏身	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ７	（口）１１．５ （高）５．５	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	2.5Y6/1　黄灰	口縁 2/12	歪み大 16 と焼成段階からのセット
18	6-5	須恵器	坏蓋	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ４	（口）１３．７ （高）５．６	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N6/0　灰	口縁 11/12	歪み大 19 と焼成段階からのセット
19	6-6	須恵器	坏身	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ４	（口）１１．８ （高）５．６	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N5/0　灰	口縁 11/12	歪み大 18 と焼成段階からのセット
20	4-1	須恵器	坏蓋	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ２	（口）１４．２ （高）５．４	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	５Y8/2　灰白	完存	21 と焼成段階からのセット
21	4-2	須恵器	坏身	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ２	（口）１２．９ （高）５．９	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	５Y7/2　灰白	完存	20 と焼成段階からのセット
22	5-3	須恵器	坏蓋	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ６	（口）１４．８ （高）５．２	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ・同心円当て具痕	密	10Y5/1　灰	口縁 11/12	23 とセットで出土するも合わない
23	5-4	須恵器	坏身	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ６	（口）１２．５ （高）５．５	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ・同心円当て具痕	密	N5/0　灰	ほぼ完存	22 とセットで出土するも合わない
24	6-4	須恵器	坏身	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ５	（口）１２．７ （高）５．４	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N5/0　灰	口縁 12/12	歪み大
25	10-1	土師器	小形壺	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙内ｐ１	（口）２２．２ （高）２７．４	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	2.5YR6/6　橙	ほぼ完存	口縁部は意図的な打ち欠きか？
26	6-3	須恵器	坏蓋	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙上ｐ８	（口）１４．１ （高）５．０	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N5/0　灰	口縁 9/12	壺（27）の蓋
27	8-1	須恵器	壺	東条１号墳	埋葬施設１ 墓壙上ｐ９	（口）２２．２ （高）２７．４	外；タタキ目→回転ナデ（カキメ）・波状文（３段） 内；同心円当て具痕→回転ナデ	密	N5/0　灰	口縁 8/12 体部完存	胎土はマーブル状 口縁部は意図的な打ち欠き
539	7-1	須恵器	提瓶	東条１号墳	埋葬施設２ 棺内ｐ４	（口）１１．４ （高）２３．６	外；ナデ・タタキ目→回転ナデ（カキメ）→切り取り→口縁付加→回転ナデ→柄手付加 内；回転ナデ	密	N6/1　灰	完存	
540	10-3	須恵器	坏蓋	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙内ｐ７	（口）１６．０ （高）５．３	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N6/0　灰	完存	頂部にヘラ記号
541	5-5	須恵器	坏蓋	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙内ｐ５	（口）１５．４ （高）５．６	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	2.5GY5/1 オリーブ灰	完存	外面頂部にヘラ記号 542 とセットで出土するも合わない
542	5-6	須恵器	坏身	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙内ｐ５	（口）１２．０ （高）５．７	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N5/0　灰	ほぼ完存	541 とセットで出土するも合わない
543	6-1	須恵器	坏蓋	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙内ｐ８	（口）１３．４ （高）４．８	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ→ナデ	密	2.5GY5/1 オリーブ灰	完存	544 と焼成段階からのセット
544	6-2	須恵器	坏身	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙内ｐ８	（口）１１．９ （高）５．１	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ→ナデ	密	7.5GY5/1　緑灰	完存	543 と焼成段階からのセット
545	11-1	須恵器	瓶	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙内ｐ６	（口）１１．３ （高）１１．９	外；回転ナデ→回転ケズリ・波状文（口縁・頸各１段） 内；ナデ→回転ナデ	密	N5/0　灰	完存	口縁部に使用時の破損あり
546	11-2	須恵器	瓶	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙内ｐ９	（口）１２．４ （高）１２．７	外；ナデ→回転ナデ→カキメ・波状文（頸部２段） 内；ナデ→回転ナデ	密	7.5YR6/1　灰	口縁 5/12	口縁部に意図的な打ち欠きあり
547	4-5	須恵器	坏蓋	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙上ｐ２	（口）１４．０ （高）５．４	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N5/0　灰	口縁 11/12	548 と焼成段階からのセット
548	4-6	須恵器	坏身	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙上ｐ２	（口）１２．６ （高）５．２	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ・同心円当て具痕	密	7.5Y6/1　灰	完存	547 と焼成段階からのセット
549	9-1	須恵器	横瓶	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙上ｐ３	（体径）２５．８ （横幅）３５．５	外；タタキ目→回転ナデ（カキメ）→ナデ 内；ナデ・同心円当て具痕	密	N4/0　灰	体部 8/12	猿投産か？
550	12-1	須恵器	壺	東条１号墳	埋葬施設２ 墓壙上ｐ１	（口）２０．２	外；タタキ目→カキメ・回転ナデ 内；同心円当て具痕→回転ナデ	密	N5/0　灰	口縁 12/12	底部は意図的な打ち欠き
551	35-1	須恵器	坏蓋	東条１号墳	墳丘上	（口）１３．９ （高）３．７	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	7.5Y6/1　灰	完存	
552	10-2	土師器	高坏	東条１号墳	埋葬施設２墓壙埋土	（脚柱）３．７	外；ハケメ→ヘラミガキ 内；ヘラミガキ（坏部）・絞り目（脚部）	粗	7.5YR6/4　にぶい橙	脚柱 11/12	
553	10-4	土師器	手焙形	東条１号墳	埋葬施設１・２ 墓壙埋土	（体）１８．０	外；（笠）ナデ→ヘラ描沈線、（体）ハケメ→突帯貼付→刻目文 内；（笠・体）ハケメ	やや粗	５YR6/6　橙	体部 1/12	
554	35-5	須恵器	坏蓋	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（口）１５．２	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	10Y6/1　灰	口縁 1/12	猿投産
555	37-3	須恵器	坏蓋	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（口）１４．６ （高）３．７	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N5/0　灰	口縁 2/12	
556	37-2	須恵器	坏身	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み	（口）１４．４	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N5/0　灰	口縁 2/12	
557	37-1	須恵器	坏身	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み２	（口）１３．４	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N6/1　灰	口縁 3/12	
558	35-6	須恵器	坏身	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（受）１３．２	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	N4/0　灰	受部 1/12	猿投産か？
559	35-7	須恵器	瓶	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（口）１２．０	外；回転ナデ→波状文 内；回転ナデ	密	N4/0　灰	口縁 1/12	
560	36-1	須恵器	椀？	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（口）１４．０	外；回転ナデ→沈線 内；回転ナデ	密	N4/0　灰	口縁 1/12	
561	37-4	須恵器	短頸壺	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み２	（体）１５．４	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	2.5Y7/2　灰黄	体部 5/12	
562	36-3	土師器	小形壺	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（口）１２．４	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ	やや粗	7.5YR6/4　にぶい橙	口縁 2/12	
563	37-5	土師器	高坏	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み２	（口）２０．０	外；ハケメ？→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR5/4　にぶい褐	口縁 1/12	
564	36-2	土師器	高坏	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（口）１２．６	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ？	やや粗	５YR7/6　橙	口縁 2/12	
565	36-4	土師器	高坏	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（脚裾）９．９	外；オサエ・ナデ→板ナデ→ヨコナデ 内；ナデ・ケズリ（脚）→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/6　橙	脚柱完存 脚裾 1/12	
566	38-1	須恵器	甕	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み２	（口）１６．０	外；調整不明 内；調整不明	密	7.5YR6/6　褐	口縁 1/12	
567	38-3	土師器	甕	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み２	（口）１２．０	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	５YR6/6　橙	口縁 2/12	
568	38-2	土師器	甕	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み２	（口）１５．２	外；ハケメ→ヨコナデ 内；板ナデ→ヨコナデ	密	５YR5/4 にぶい赤褐	口縁 1/12	
569	38-5	土師器	甕	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み２	（口）２２．０	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	５YR7/6　橙	口縁 1/12	
570	38-4	土師器	高坏	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み２	（脚柱）３．３	外；ハケメ・ナデ 内；ナデ	密	10YR7/4 にぶい黄橙	脚柱 6/12	
571	35-2	土師器	坏	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（口）１４．３ （高）３．３	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁 9/12	572・573 とセット
572	35-3	土師器	皿	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（口）１４．７ （高）２．４	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや粗	５YR7/6　橙	口縁 2/12	571・573 とセット
573	35-4	土師器	皿	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み１	（口）１５．６ （高）１．７	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4　にぶい橙	口縁 3/12	571・572 とセット
574	36-5	瓦器	椀	屋敷の下遺跡	谷状落ち込み２	（口）１６．０ 推定	外；ヨコナデ 内；ナデ→ミガキ	密	N5/0　灰	口縁 1/12	

V　調査資料の科学分析

1　分析の目的

東条１号墳の発掘調査で、埋葬施設２から出土した鏡に沿う状態で木片が出土した。銅成分の影響により、棺材が部分的に遺存したものと考えられる。

そこで、出土金属製品の保存処理にあわせ、棺材と考えられるこの木片の樹種同定を実施した。実施機関は、保存処理業務を受託した株式会社吉田生物研究所である。

分析の結果､棺材はヒノキであることが判明した。以下で、分析結果を報告する。　（伊藤）

2　東条１号墳埋葬施設２出土木製品の樹種同定結果

a　観察方法

数 mm 立方の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨して、木口（横断面）、板目（接線断面）面の薄片プレパラートを作製した。柾目（放射断面）は剃刀で切片を採取し、永久プレパラートを作製した。これらをそれぞれ顕微鏡で観察して同定を行った。

b　結果

樹種同定結果（針葉樹１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）ヒノキ科ヒノキ属（*Chamaecyparis* sp.）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～2 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。　（株式会社吉田生物研究所）

【参考文献】

林 昭三『日本産木材顕微鏡写真集』（京都大学木質科学研究所、1991 年）。

伊東隆夫『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ』（京都大学木質科学研究所、1999 年）。

島地 謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』（雄山閣出版、1988 年）。

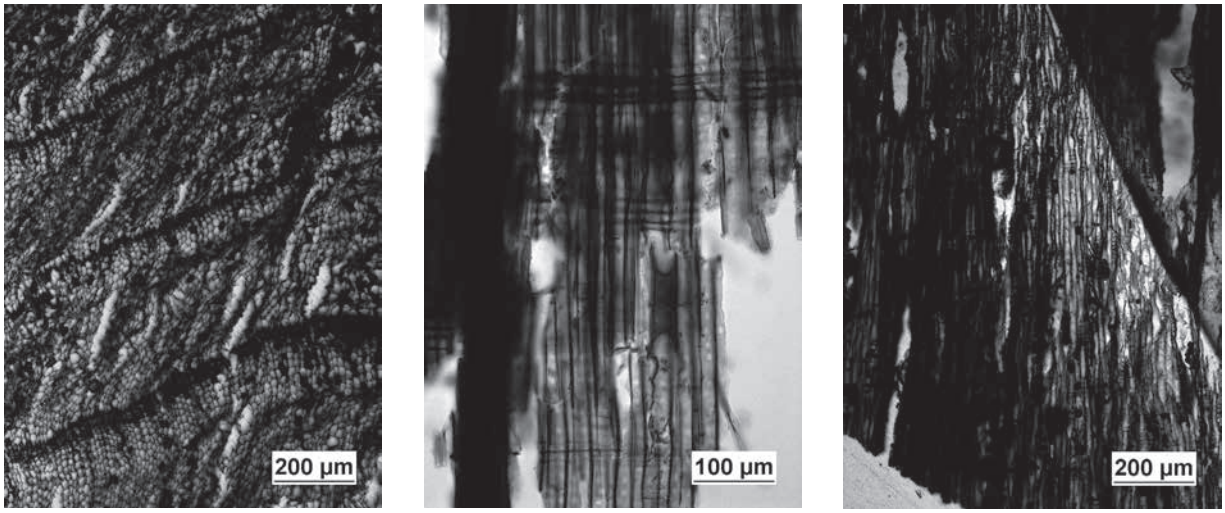
北村四郎・村田 源『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ』（保育社、1979 年）。

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇』（1985 年）。

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇』（1993 年）。

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1



木口　　柾目　　板目

写真17　出土木製品樹種同定顕微鏡写真

Ⅵ　調査のまとめと検討

1　東条１号墳の構造

a　時期と形態

造成時期　東条１号墳では割竹形木棺の埋葬施設が２基確認された。古墳時代後期前半と考えられる。また、調査区外に及ぶものの、埋葬施設３は横穴式石室である。工事立会初期に出土した須恵器坏蓋（第30図551）がこの石室の時期を示すと見れば後期後半に相当する。つまり東条１号墳は大きく２時期にわたって造成されたのである。

埋葬施設１・２に伴う須恵器は、陶邑編年[1]のMT15型式からTK10型式にかけての特徴を有している。それぞれのまとまりとして見た場合、埋葬施設１の方がやや先行する時期と考えられるが、２基の埋葬施設は相互に関連しており、大きな時期差は無いとするべきであろう。

墳丘と構造　調査区北側の調査区外には、わずかながら地形の窪みが確認できる。おそらくこれが周溝に相当すると見られる。ただし、墳丘のある尾根幅は10ｍ程度のため、周溝は墳丘を全周せず、高所部のみを切断する部分的なものなのであろう。

墳丘の全貌は、残念ながら調査で確認することはできなかったが、直径10～11ｍ程度の、楕円形を呈した円墳と考えられる。埋葬施設１・２の間が、ちょうど墳丘の中心にあたる。したがって、埋葬施設３は、中心から大きく北にずれた位置に造作されたことになる。

b　埋葬施設

墓壙　埋葬施設１・２の墓壙は、上面から全体を掘り下げ、途中から棺の据形のみを掘る、という方法である。この手法は、伊賀では古墳時代中期初頭頃から確認できる[2]ため、伝統的な工法と見られる。

２基の埋葬施設は、墓壙南木口の位置が概ね揃っている。したがって、両施設はほぼ同時に構築されたか、２基並列を当初から意図して造作されたと考えられる。

割竹形木棺　埋葬施設１・２で用いられた棺形態は、いずれも割竹形木棺である。２基ともに北端部が未確認だが、いずれも幅（直径）は70～80cmほど、埋葬施設１は全長4.6ｍ以上、埋葬施設２は全長2.9ｍ以上である。底面は、いずれも北側に向かって低く傾斜するが、副葬品の位置から、遺体の頭部は南向きだったと考えられる。

棺下の小土坑　埋葬施設１の棺据方下には、ピット状の小土坑がある。これは排水機能を果たす施設として認識されている[3]ものに該当すると見られる。

滝沢誠氏の集成・研究[4]によると、当該施設は古墳時代前期末から中期前半にかけて盛行し、大和地域から伊勢を経て、東国へと波及していったとの想定がなされている。東条１号墳はそれよりも新しい時期だが、小土坑が割竹形木棺を主体とする埋葬施設に多く見られるという指摘には一致する。

この小土坑について、滝沢氏は「当時（前期末から中期前葉‥‥筆者註）の王権中枢に連なる集団に端を発するもの」[5]という意義づけをしている。王権との関連云々は何とも言えないが、埋葬施設１に副葬された捩り環頭大刀ともあわせ、大和地域、すなわち当時の中枢地域との関連を窺わせる素材であるという見方は可能であろう。

なお、埋葬施設２の棺横東側にも、やや形態の異なる小土坑がある。これも同種のものと見なすことができるかも知れない。

c　埋葬祭式の復元

副葬品の出土位置関係から窺われる、埋葬施設の祭式手順を見ておく。

埋葬施設１　埋葬施設１の手順は、以下のように復元できる。

①　棺の搬入。棺内には遺体と副葬品が添えられている。副葬品は大刀と鉄鏃。鉄鏃は、３本を大刀の切先とは反対方向に向け、遺体の左脇に置く。その上に、刃先を足下に向け、鞘に収まった状態の捩り環頭大刀を据える。棺の蓋をした後に、３本の鉄鏃を棺上に並べたと推定される。

②　棺の上端が隠れる程度まで覆土する。その後、

棺の脇に「六文銭祭式」[6]を行う。

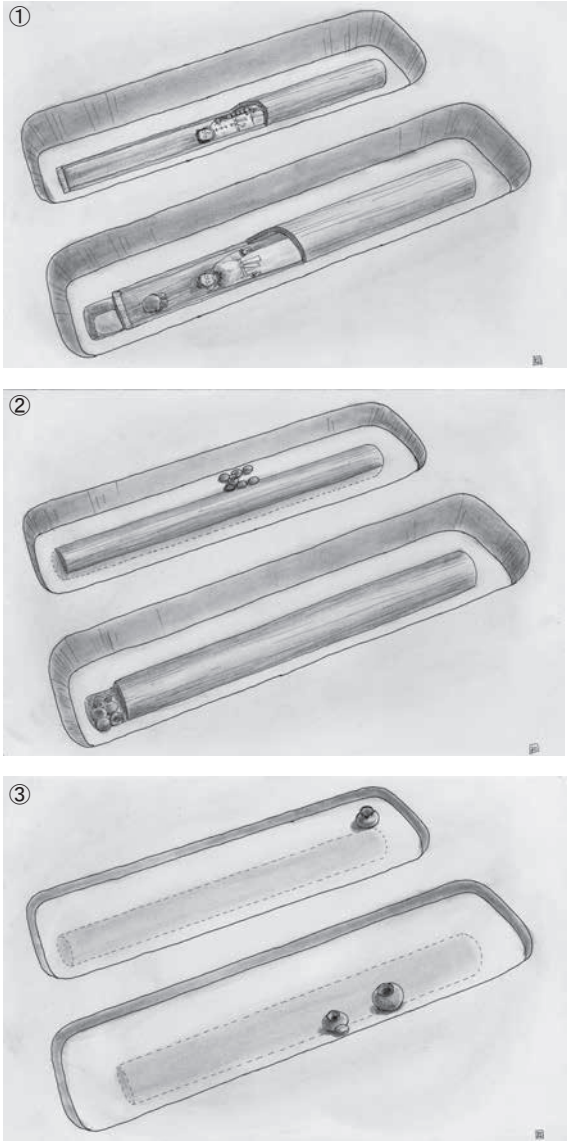
③　墓壙を完全に埋める。その後、墓壙上に口縁部を打ち欠き、須恵器坏蓋で蓋をした壺を置く。

埋葬施設２　埋葬施設２の手順は、以下のように復元できる。

①　棺の搬入。棺内の遺体は首飾りを付け、両腕に腕輪を装っている。顔の右横に、布で包んだ鏡を供える。頭部付近にはベンガラを用いる。足下に刀子を置く。頭の上には、石で固定された須恵器提瓶が置かれる。その後、棺に蓋をする。

②　棺の南にある、棺据形の空間を利用して「六文銭祭式」を行う。

③　墓壙を完全に埋める。その後、墓壙上に須恵器壺・横瓶・蓋坏を置く。壺の底は打ち抜かれている。



第32図　埋葬祭式段階図（原画：早川和子氏）

埋葬祭式の手順　いずれの埋葬施設も、その中間に「六文銭祭式」を挟んでおり、同種のものと認識できる。「六文銭祭式」は棺外で行われる祭式であるという点でも一致している。

以上の段階を模式的に表したのが第32図である。

ｄ　埋葬に伴う祭式の特徴

東条１号墳の須恵器祭式　東条１号墳に見られる祭式は、棺を据えてから完全に埋め立てるまでの間に、都合３回の祭式を行っている。なかでも、墓壙を埋める途中に行う「六文銭祭式」が特徴である。

「六文銭祭式」を含む「須恵器祭式」に関しては、楠元哲夫氏の分析が明快である。楠元氏は須恵器祭式をつぎの４種に区分する。

（Ⅰ）墳丘上・墳丘裾部の祭式

（Ⅱ）墳丘中・墓壙中の土器破砕を伴う祭式。

（Ⅲ）墓壙周辺を含めた棺側・棺上の祭式[7]。

（Ⅳ）棺内の祭式。

東条１号墳で見られた須恵器祭式を楠元氏分類に当てはめてみる。まず、東条１号墳埋葬施設１は「六文銭祭式」と墓壙上の須恵器が該当するのでⅢ種に相当する。埋葬施設２は、棺内に提瓶があることから、Ⅲ・Ⅳ種が混合しているといえる。

Ⅲ種の祭式は、埋葬施設１が棺の覆土後、埋葬施設２は棺の覆土前という違いがある。しかし、いずれも棺が蓋された後のものという点で共通する。

須恵器祭式事例　伊賀地域で、棺内遺物以外に２段階に及ぶ祭式が確認できる事例は多くない。比較的近い事例が南山ノ奥６号墳（伊賀市古郡）に見られる[8]程度である。古墳の遺存状態に左右されるが、「六文銭祭式」を含めた須恵器祭祀Ⅲ種は、伊賀でそれほど一般的なものとは見なせない[9]。

つまり、「六文銭祭式」は伊賀では限定的な古墳でのみ採用されている可能性が高い。その意味で、楠元氏が指摘する「造墓権の付与にあわせて政治中枢で考案された須恵器祭式の強要があった」という指摘[10]は、「造墓権」や「強要」などの理解に問題を内包しつつも、考古学的データ認識としては概ね正鵠を射ていると考えられる。　（伊藤）

【註】

(1)　田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1981年）。

(2) 沖打越１号墳に同様な状況が確認できる。三重県埋蔵文化財センター『沖打越１号墳・沖打越中世墓発掘調査報告』(2013 年)。
(3) 朴美子「埋葬施設底部における土坑・溝に関する若干の考察」(『宇陀北原古墳』大宇陀町役場、1986 年)、滝沢誠「古墳時代前半期における小型古墳の性格～小土坑をともなう埋葬施設の検討～」(『筑波大学先史学・考古学研究』第 25 号、2014 年)。
(4) 前掲註(3)滝沢氏文献。
(5) 前掲註(3)滝沢氏文献 p14。
(6) 楠元哲夫「六文銭～古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景～」(『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ、1992 年)。
(7) Ⅲは、前掲楠元氏論文では「棺側・棺内」と書かれるが、続く本文を読むと「棺側・棺上」であることは明らかである。そのため、楠元氏の誤植と考え、「棺側・棺上」として見ていく。
(8) 三重県埋蔵文化財センター『南山ノ奥６号墳発掘調査報告』(1999 年)。
(9) 伊賀地域では、いくつかの木棺直葬墳が調査されているが、「六文銭祭式」に相当しそうな調査事例は、東条１号墳、南山ノ奥６号墳以外では久米山 33 号墳(伊賀市編『上野市史』考古編、2005 年) 程度である。なお、奥小波田２号墳（上野市遺跡調査会『上野新都市開発整備区域埋蔵文化財発掘調査報告書』第４分冊、1994 年）もそれらしいが、報告書の記載が不明確で判断できない。
(10) 前掲註(6)楠元氏論文 p501。

2　古墳の立地と占地

a　東条古墳群の構成

群構成　東条１号墳は５基からなる東条古墳群の１基である（第 33 図)。東条古墳群は、幅 10 ｍにも満たない２本の痩せ尾根上に構築されている。今回調査対象となった１号墳が最も南端にある。横穴式石室を埋葬施設とする４号墳とは、平面距離で約 60 ｍ、比高差は約 20 ｍある。

東条１号墳は、木棺直葬と横穴式石室とが時期差を持ちつつも併存している。それに対し、４号墳は横穴式石室のみで構築されている。木棺直葬墳から横穴式石室へと移行する段階の、双方を見ることができる古墳群ということができる。

屋敷の下遺跡（西地区）の位置づけ　古墳の群構成を考えるうえで、屋敷の下遺跡（西地区）で確認された遺構と遺物にも注意を払っておきたい。

屋敷の下遺跡の調査で確認されたのは谷状の落ち込みのみだが、そこからは古墳時代後期の須恵器・土師器が多く出土した。東条１号墳よりも新しい、６世紀後半から７世紀前半までの時期にあたる。

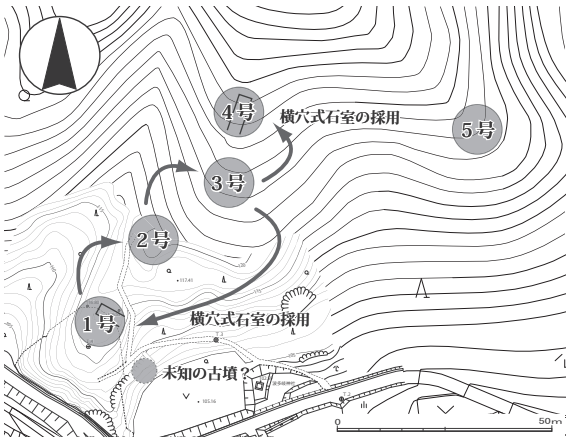
地形から見て、これらの遺物が集落跡に伴うものとは考えにくい。またこの付近には、直径 50cm 以上の花崗岩の川原石が点在している。角の取れた川原石であり、山中では産出しない。

以上を踏まえれば、屋敷の下遺跡（西地区）には削平ないしは埋もれていて認識できない後期古墳が存在している可能性が高いと思われる。今回確認した古墳時代遺物は、それに伴うものではないだろうか。そのように考えると、東条古墳群は尾根の上に展開するとともに、谷部にも古墳が展開する、極めて興味深い古墳群であると考えられる。

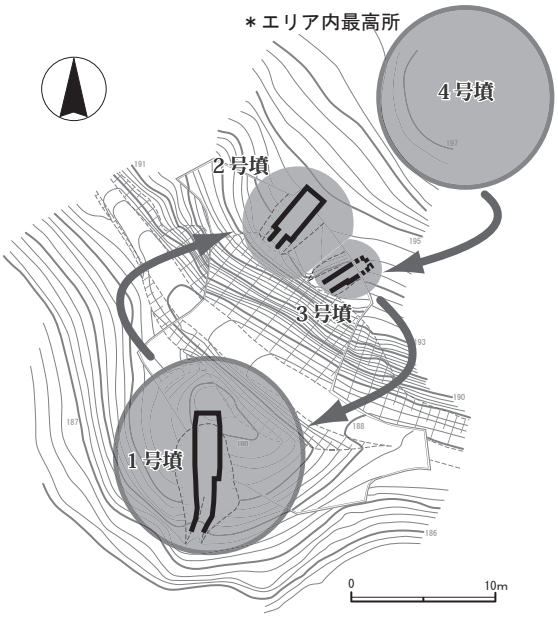
墳丘と埋葬施設の特徴　東条１号墳の築造に関しては、注意すべきポイントがある。それは、墳丘と埋葬施設の造作に関連する特徴である。

１号墳で後出する横穴式石室（埋葬施設３）は、木棺直葬の埋葬施設１・２とは軸線が異なる東西方向で、おそらく東側が羨道部とみられる。そしてその構築位置は、埋葬施設１・２の北側を破壊しつつも、１号墳の墳丘内に収まる。つまり埋葬施設３は、既存の埋葬施設１・２に伴う墳丘（墓域）を意識して構築されたと考えられる。ここから、埋葬施設３の構築主体は、埋葬施設１・２と有機的に関係する人物ないしは集団と見なすことができる。

木棺直葬と比べれば明らかに労力を伴う埋葬施設でありながら、前代の墓域を意識し、「ひっそりと」



第33図　東条古墳群の築造変遷



第34図　才良吉田谷古墳群の変遷

構築される横穴式石室。これとよく似た事例は、同じ伊賀地域の才良吉田谷古墳群[1]でも見られる（第34図）。最高所に築造された、木棺直葬墳と見られる才良吉田谷４号墳に次いで、その麓に３号墳が築造されている。３号墳は横穴式石室墳だが、明確な墳丘が無く、「ひっそり」構築されている。才良吉田谷古墳群の事例は、東条１号墳のように前代の墓域と重複してはいない。しかし、横穴式石室の採用が「墓地」の構成を大きく変える契機とはなっていないという点で、両者の動向は一致している。

東条古墳群と才良吉田谷古墳群に共通するのは、狭隘な土地に営まれる古墳、という点である。この背景に、限定された範囲でしか墳墓を構築できない何らかの規制が想定される。

なお、先述のように、屋敷の下遺跡（西地区）には、未知の古墳があると考えられる。「ひっそりと」埋もれた横穴式石室墳が、当地には数多く存在している可能性が高いと思われる。

ｂ　古墳の占地

東条１号墳の墓壙埋土内からは、古墳時代前期初頭頃の土師器片が出土している（第30図552・553）。丘陵高所に丘陵下部から遺物を含んだ土砂が搬入される状況は想定しにくく、この時期の遺構がここにあったことを示唆する。素直に考えれば、当該期の墳墓であろう。つまり東条１号墳は、既存の墳墓と重複して築造されたことになる。

後期古墳による重複築造事例は、少ないながらも見られる。西野古墳群（松阪市嬉野天花寺町）では、弥生時代後期末の西野４号墓と古墳時代後期後葉の西野５号墳が重複している[2]。西野５号墳は歩揺付金銅製品や馬具などの優秀な副葬品を伴う古墳であり、古墳築造者（集団）のなかでも一ランク上の被葬者と考えられる。西野５号墳が構築された地点は、北側に広く眺望の効く、良好な場所である。

曽祢崎古墳群（多気郡明和町）は標高５ｍ程度の低地に立地している。ここでは、弥生時代後期初頭の方形周溝墓墳丘を利用して、古墳時代後期末頃の古墳が築造されている[3]。方形周溝墓２基に対し、それぞれ１基の古墳が重なっている。３号墳は大刀２振や鉄鏃・馬具などを伴っており、近隣の明星古墳群[4]で見られる副葬品よりも優秀である。

東条１号墳も含め、これらの重複古墳に共通するのは、立地が良好であることと、副葬品の内容が優秀という点である。事例を積み重ねる必要があるが、小規模ながら古墳時代後期の優秀な副葬品を伴う古墳の構築地点に対する意識は、古墳時代前期以前の墳墓に共通すると考えられる。ここには、群集墳として山中にひしめく古墳とは異なる、他より抜きん出た存在としての被葬者像が考えられる。

ｃ　伊賀の後期古墳立地

伊賀の後期古墳分布　東条古墳群の周辺には、中後期古墳が密集している。とくに、後に伊賀国府が造立される外山地区には、前方後円墳を含む外山・鷺棚古墳群や後期後半の巨大横穴式石室である勘定塚古墳などがあり、古墳分布は際立っているといえる[5]。

一方、東条古墳群の周辺は、丘陵深部に石打古墳群があるものの、平野を望む丘陵上には目立った古墳が存在しないとされていた。しかし、東条古墳群の確認により、この認識は改める必要が出てきた。

古墳と眺望　東条古墳群の確認で、伊賀北部の後期古墳立地について、つぎの２類型に区分できる。

①　平野に面する尾根を利用するもの。東条古墳群のほか、外山･鷺谷古墳群などがこれにあたる。「眺望形」とする。

②　平野への眺望が効かない山中にあるもの。石打古墳群･浅子谷古墳群などがこれにあたる。「逼塞形」

とする。

眺望形は、古墳時代前期（あるいは弥生時代の墳丘墓）以来のものである。これに対し、逼塞形は古墳時代後期に至って採用される。同じ埋葬施設や副葬品を有している場合でも、両者間の意識差を踏まえての考察が必要である。（伊藤）

【註】

(1) 三重県埋蔵文化財センター『才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群ほか発掘調査報告』(2013 年)。

(2) 一志町・嬉野町遺跡調査会『天花寺山』(1991 年)。なお、当報告書では西野５号墳出土の須恵器を TK10 型式併行としているが、もう少し新しい段階のものと見るべきであろう。

(3) 三重県埋蔵文化財センター『曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群』(1997 年)。なお、報告書では３号墳を前方後円墳を意識したものとしているが、遺構にそれを示す要素は無い。方形周溝墓の墳丘を利用した不整形な円墳と見ておくのが妥当であろう。

(4) 明和町教育委員会『明星古墳群発掘調査報告』(1975 年)

(5) 近隣の古墳状況に関しては、伊賀市編『上野市史』考古編（2005 年）、同『伊賀市史』第１巻通史編古代中世（2011 年）を参照した。

3　須恵器の生産と供給

a　須恵器の区分

東条１号墳･屋敷の下遺跡から出土した須恵器は、６世紀前半から７世紀にかけてのものが見られる。これらは、整形や素地（肉眼観察）の観点からいくつかの類型が見出せる。ここでは、概ねＡ～Ｆの６類に区分した（第 16 表）。

最も多いのがＢ類、次いでＡ類・Ｃ類である。Ａ類は最も精緻かつシャープで、数が少ないながらもセット関係にあるものが２組含まれている。同様にＣ類も数は少ないがセット関係にあるものの占める割合が高い。これに対し、Ｂ類は最も個体数が多いにもかかわらず、セット関係にあるものが少ない。

Ｂ類に見られる素地の特徴として、大粒の長石が混和していることが挙げられる。確認個体数の多いＢ類は、当地である伊賀産の一群である蓋然性は高いであろう。

搬入品の可能性が高いのがＦ類である。素地の特徴から、尾張猿投産の可能性が高いと考えられる。猿投産須恵器が伊賀に一定量入っている状況は、才良吉田谷２号墳や浅子谷古墳群の事例から判明している[(1)]が、東条１号墳の調査により、それが６世紀前半代にまで遡る可能性が出てきた。今後注意したい観点である。

b　伊賀の須恵器生産体制

東条１号墳の須恵器蓋坏は、焼成時の組合せではないものが多く見られた。「六文銭祭式」という整った祭式を示す埋葬施設１ですら、焼成時の組合せのものは６組（うち１組は坏身のみ）のうち３組である。これは、古墳埋葬という極めて重要な祭式に用いられるものですら、その収集は「寄せ集め」であったことを示している。

東条１号墳は、比較的優秀な副葬品を持っている。したがって、当地で一定程度の権力を有していたと評価してよい。その古墳で用いられた須恵器が寄せ集めであったことを重視したい。これは、この時期の伊賀地域自体が、安定した須恵器供給体制を整えていなかったことを示唆するものである。（伊藤）

【註】

(1) 三重県埋蔵文化財センター『才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群ほか発掘調査報告』(2013 年)。

第16表　東条１号古墳・屋敷の下遺跡跡（西地区）出土須恵器の区分

	A	B	C	D	E	F
整　形	シャープ	鈍い	鈍い	シャープ	シャープ	シャープ
胎　土	精良 黒色粒・長石（少）	粗 長石（多）＋黒色粒	粗 長石（少）＋灰色粒	精良 長石（少）	良（マーブル状） 長石（少）	精良 混和（少）
色　調	灰色	灰～青灰色	白灰色	白灰色	灰～暗灰色	褐色
該当資料	16，17，18，19，23，546	22，24，26，539，540，541，542，543，544，545，548，550，551，554，555，556，557，560	14，15，20，21，547	561	27	549,558,559
生産地（推定）	伊賀？	伊賀	伊賀	伊賀	伊賀	猿投
備　考	セット2組	セット1組	セット2組			

4　東条１号墳出土の大刀

a　大刀の特徴・時期

埋葬施設１から出土した大刀は捩り環頭大刀と考えられ、大きさは全長 112.7cm、刀身部長 91.4cm、刀身部幅 4.3cm である。捩り環頭大刀は全長 100cm を越えるとともに、刀身部幅４cm 以上の例がほとんどで、奈良県藤ノ木古墳の例では装具を含めると全長約 140cm に達する[1]。すなわち、長刀が多いという特徴を備えており、東条１号墳の捩り環頭大刀もこの特徴に合致する。

次に大刀の装具に関して、柄は比較的良好な状態で遺存しており、一木の柄を落し込み式で装着した後、葛巻き・たすき掛け・組紐巻きが施される。勾金の有無は不明だが、柄の装具も捩り環頭大刀の特徴をよく遺す。鞘の装具については、鞘間を２枚合わせにして、別材でつくった鞘口・鞘尻をはめ込む構造だったと推測される。鞘間には有機物Ａ～Ｄをこの順に施している。鞘間の有機質装具は良好な事例に乏しいため、本例の位置づけが難しい。大阪府峯ヶ塚古墳・奈良県藤ノ木古墳・島根県上塩冶築山古墳などとともに[2]、有機質装具が良好に残る基礎資料として本例を評価できよう。

捩り環頭大刀の出土例は、これまでに 80 例程度知られている[3]。三重県では亀山市井田川茶臼山古墳・鈴鹿市保子里車塚古墳・津市鎌切３号墳、松阪市山添２号墳の例が知られる[4]。東条１号墳例は伊賀地域では初の事例となり、この点で大きな意義を持つ。

b　評価

さいごに、捩り環頭大刀の歴史的評価についてふれておく。捩り環頭大刀は、多くの場合有機質の装具が残らないことから研究が遅れていた。しかし、藤ノ木古墳や峯ヶ塚古墳からの出土によって、捩り環頭大刀への注目が一気に高まった。すなわち両墳の被葬者は大王家のメンバーである可能性が極めて大きいことから、他の飾り大刀と同等あるいはそれ以上の評価・位置づけが求められることになったのである。さらに白石太一郎氏は、後藤守一氏の研究および『延喜式』と『内宮長歴送官符』の記述をふまえて、捩り環頭大刀が伊勢神宮の神宝玉纏太刀の祖形になっていることを明らかにした[5]。この研究により捩り環頭大刀のもつ意義はさらに高められたのである。

これらの研究状況をうけて、集成・分類などの基礎的研究が近年になって進められることになった。その結果、80 例程度確認できること、５世紀末から７世紀初頭にかけてみられること、福島県から熊本県にかけて分布することが知られるようになった。時期別の分布傾向として、６世紀前半には畿内地域・滋賀県・福井県・岐阜県・三重県に多いこと、６世紀後半になると前段階から大きく状況が変化し、奈良県での分布が著しいことが指摘された。さらに、６世紀前半に畿内地域北半から北陸地域・東海地域で多く分布する傾向をふまえて、捩り環頭大刀と継体天皇関連地域とのつながりが指摘されるに至った[6]。滋賀県鴨稲荷山古墳や福井県神奈備山古墳などが、文献史料における継体天皇関連地域とほぼ一致する例といえる[7]。

なお、仔細にみると捩り環頭大刀の分布が文献史料にある継体天皇関連地域より一回り大きいことにも気づく。文献史料にあらわれないが、これらの地域も継体天皇の動向とむすびつく可能性があろう。こうした地域として若狭地域や伊勢地域をあげることができ、井田川茶臼山古墳・保子里車塚古墳の重要性が増すのである。

東条１号墳例は、捩り環頭部における稜の形状から MT15 型式期以降とみられる。他の副葬品も考慮すれば、MT15 型式期から TK10 型式期となろう。東条１号墳から出土した捩り環頭大刀を評価する場合、伊賀国阿拝郡にある古墳であることをふまえる必要がある。すなわち、継体天皇の皇后・妃のうち『古事記』に阿倍之波延比売（『日本書紀』に荑媛）がみえる[8]。その出身氏族を記では阿倍氏、紀では和珥氏としており、所伝が異なる。阿倍氏とすれば、それは大和国十市郡に本拠をもつ阿倍氏本宗家ではなく、伊賀国阿拝郡に本拠をもつ阿倍氏（阿閉氏）とする可能性が指摘されているからである[9]。

ここで、阿倍氏・阿閉氏について少し整理しておこう。阿倍氏は大和国十市郡阿倍（奈良県桜井市阿

部）を本拠とする古代の有力氏族である。『古事記』によると孝元天皇の皇子大毘古命の子建沼河別命が阿倍臣らの祖であるとし、『日本書紀』は大毘古命を大彦命に作り、阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狭狭城山君・筑紫国造・越国造・伊賀臣の７族の始祖が大彦命であるとする。阿閉（阿閇・敢）氏については、大彦命の後裔氏族のひとつで、伊賀国阿拝郡の地名に基づくとされる。宮廷の祭祀卜事を職掌とし、伊勢神宮の祭祀にも従事していたようである[10]。『日本書紀』によると、雄略３年条に阿閉臣国見、顕宗３年条に阿閉臣事代、推古18年条に阿閉臣大籠の名がみえ[11]、８世紀中頃の伊賀郡阿拝郡大領、同郡柘殖郷戸主として敢朝臣安麻呂の名が確認できる[12]。このうち事代や大籠は本拠地の伊賀から大和に出て宮廷に出仕していたと想定されている[13]。

阿倍之波延比売を伊賀国阿拝郡に本拠をもつ阿倍氏（阿閉氏）の出身とする指摘は、あくまで可能性にとどまる。史料的な裏付けに弱く、『日本書紀』での所伝と異なる理由も十分とはいえない。また、考古資料では広帯二山式冠や三葉文楕円形杏葉において、捩り環頭大刀と同様の分布傾向を示す場合に、継体天皇の政治的動向と関連付けていた[14]。すなわち阿拝郡で捩り環頭大刀が出土しただけの現状では、継体天皇の政治的動向に結び付けるのは時期尚早といえる。さらに、阿拝郡に隣接する伊賀郡には伊賀氏が盤踞する。『日本書紀』宣化元年条に、阿倍氏の命により伊賀臣が伊賀国の穀を筑紫に運んだという記述がみえる[15]。東条１号墳の被葬者を絞り込むための手がかりが限られている現状では、伊賀国の雄族、伊賀氏もその候補のひとつとして含めておいた方が良いだろう。

いずれにしても、今後、外山・鷺棚古墳群などの周辺の古墳群・遺跡における調査が進み、検討材料が蓄積することを期待したい。以上のように、東条１号墳の捩り環頭大刀は伊賀地域の歴史を明らかにするだけでなく、大王家と有力氏族の政治的な繋がりを明らかにできる可能性を秘めているのである。

（髙松）

【註】

(1) 奈良県立橿原考古学研究所『斑鳩藤ノ木古墳』第二･三次調査報告書（1993年）。

(2) 羽曳野市教育委員会『史跡古市古墳群峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』（2002年）。前掲註(1)報告書。島根県古代文化センター『上塩冶築山古墳の研究』（1999年）。

(3) 永井義博「捩じり環頭大刀」（『団子塚九号墳出土遺物保存処理報告書－平成３・４・５年度国庫補助事業－』静岡県袋井市教育委員会、1994年）。髙松雅文「捩り環頭大刀と古墳時代後期の政治的動向」（『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究室、2007年）。深谷淳「金銀装倭系大刀の変遷」（『日本考古学』第26号、日本考古学協会、2008年）。

(4) 井田川茶臼山古墳はMT15型式期からTK10型式期、保子里車塚古墳はTK10型式期、鎌切３号墳はTK10型式期からTK43型式期、山添２号墳はTK43型式期ととらえておく。なお、時期は田辺昭三氏による須恵器を用いた編年を参照し、各型式に期を付加して呼称する。三重県教育委員会『井田川茶臼山古墳』（1988年）。町田章「三重県井田川茶臼山古墳の鉄地銀象嵌捩じり環頭大刀について」（『井田川茶臼山古墳』三重県教育委員会、1988年）。東京国立博物館『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（近畿Ⅰ）（1988年）。中村浩「保子里古墳出土須恵器について」（『古墳時代須恵器の編年的研究』柏書房、1993年）。津市教育委員会『稲葉古墳群・鎌切古墳群発掘調査報告』（2005年）。松阪市教育委員会『山添２号墳発掘調査報告書』（1998年）。田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1981年）。

(5) 後藤守一「所謂消火器形埴輪について」（『考古学雑誌』第22巻第７・８・12号、1932年）。白石太一郎「玉纒太刀考」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集、1993年）。

(6) 前掲註(3)髙松論文。髙松雅文「継体大王期の政治的連帯に関する考古学的研究」（『ヒストリア』第205号、2007年）。

(7) 森下章司・高橋克壽・吉井秀夫『琵琶湖周辺の６世紀を探る』平成６年度科学研究費補助金一般研究Ｂ調査研究成果報告書（京都大学文学部考古学研究室、1995年）。中司照世「椀貸山・神奈備山両古墳と横山古墳群」（『福井県立博物館紀要』第８号、福井県立博物館、2001年）。

(8) 倉野憲司・武田祐吉校注『古事記　祝詞』（日本古典文学大系（新装版）、岩波書店、1993年）。坂本太郎･家永三郎･井上光貞･大野晋校注『日本書紀』上･下（日本古典文学大系（新装版）、岩波書店、1993年）。

(9) 畑井出「継体畿内進出の背景」（『古代史論集』直木孝次郎先生古稀記念会、1988年）。平野卓治「ヤマト王権と近江・越前」（『新版古代の日本』第５巻近畿Ⅰ、角川書店、1992年）。

(10) 坂本太郎･平野邦雄監修『日本古代氏族人名辞典』（吉川弘文館、1990年）。志田諄一『日本氏族の性格と伝承』（雄山閣、1971年）。

(11) 前掲註(8)。

(12) 三重県『三重県史』資料編古代（上）（2002年）。

(13) 前掲註(10)。

(14) 前掲註(6)髙松論文。

(15) 前掲註(8)。伊賀市『伊賀市史』第１巻（2011年）。

5　東条１号墳出土の四獣形鏡

a　鏡の特徴・時期

四獣形鏡[1]の文様構成として、内区主文部に４体の獣像を半肉彫りで描き出しており、その外側に櫛歯文帯をめぐらせ、さらに複線波文帯および外向きの鋸歯文帯を配置する。獣像は求心式の配置をとり、いずれも頭を右、体躯を左に向けた姿、すなわち右半身が描かれており、反時計回りの方向に駆ける。体躯の肩には環状乳に由来する表現が認められることから、本鏡の獣像は画文帯環状乳神獣鏡などに遠い祖形をたどり得る。

内区主文部の外縁付近には、短い弧線をいくつか重ねるように配置する。この弧線は交互式神獣鏡[2]において福永伸哉氏が指摘した「重弧線文」[3]に近い。東条１号墳鏡の場合は、文字をデザイン元とした可能性があるが、いずれにしても当該期の仿製鏡においてみられる特徴といえる。

本鏡の最も大きな特徴として、内区に乳を配置しない点があげられる。乳は内区を均等に分割する役割をもつ。乳によって分割された後、それぞれの区画に主文様が描かれるのである。しかし、本鏡はこの割付け行為を放棄している。

乳を設けない仿製鏡は５世紀後葉～６世紀に製作されたことが森下章司氏の研究によって明らかにされている[4]。さらに、本鏡は森下氏分類の旋回式獣像鏡系３式と考えられることから、その時期は５世紀後葉～６世紀前葉に納まる可能性が高い。なお、こうした乳配置を行わない鏡の類例として、名張市尻矢２号墳などがあげられる[5]。

b　評価

これまで、仿製鏡のもつ意義・生産については、４世紀を頂点として直線的に低下し、５世紀末には生産が衰えたととらえられてきた。しかし1990年代以降、森下氏、車崎正彦氏、福永氏の研究によって、新たな評価がなされつつある[6]。森下氏によると仿製鏡は４世紀、４世紀末～５世紀中葉、５世紀後葉～６世紀の３段階に分けて理解でき、各段階で鏡の種類が大きく入れ替わるという。

４世紀の段階は、古墳時代のなかで最も多くの種類・量が生産される。代表的な仿製鏡として、単頭双胴神鏡系・方格規矩四神鏡系・内行花文鏡系などが登場する。４世紀末～５世紀中葉の段階は、鏡の生産が低調となる。多彩な系列のほとんどが姿を消すとともに、新たに登場する系列もわずかで、有力な系列というべき存在はあまりない。斜縁四獣鏡Ｂ系がこの段階の代表的な例といえる。

５世紀後葉～６世紀の段階は、交互式神獣鏡系・旋回式獣像鏡系・乳脚文鏡系という新しい系列が登場するとともに、４世紀末～５世紀中葉より量も増加する。森下氏は、５世紀後葉～６世紀の段階に仿製鏡生産が復興したと評価する。さらに、こうした背景に中国南朝との交渉によって入手された同型鏡[7]が関連するのだという[8]。すなわち、この時期に同型鏡と仿製鏡が相互に補完して新たな秩序が形成されたと論じる。特に交互式神獣鏡系は同型鏡を模倣して生み出されたものと推定されており[9]、福永氏は交互式神獣鏡の一群が６世紀の有力古墳に副葬される点に注目する[10]。

これまでの研究をふまえると同型鏡と交互式神獣鏡系が最も上位で、その下位に旋回式獣像鏡系と乳脚文鏡系を位置づけることができよう。旋回式獣像鏡系と乳脚文鏡系の関係、その他の鏡種の位置づけなどが、この秩序を明らかにしていくうえで今後の課題となる。これらの課題を明らかにする際に、東条１号墳は良好な資料となるだろう。　　（髙松）

【註】

(1) 樋口隆康『古鏡』（新潮社、1979年）。
(2) 森下章司「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」（『史林』第74巻第６号、1991年）。森下章司「仿製鏡の変遷」（『季刊考古学』第43号、雄山閣、1993年）。
(3) 福永伸哉「いわゆる継体期における威信財変化とその意義」（『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団、2005年）。
(4) 前掲註(2)森下氏論文。
(5) 名張市遺跡調査会『尻矢古墳群』（1995年）。
(6) 前掲註(2)森下氏論文、註(3)福永氏論文。車崎正彦「隅田八幡人物画像鏡の年代」（『継体王朝の謎【うばわれた王権】』宇治市教育委員会編、河出書房新社発行、1995年）。
(7) 川西宏幸『同型鏡とワカタケル』（同成社、2004年）。
(8) 前掲註(2)森下氏論文。
(9) 前掲註(2)森下氏論文、註(6)車崎氏論文。
(10) 前掲註(3)福永氏論文。

6　東条１号墳出土の玉類

ａ　玉類の概要

東条１号墳の玉類は全て埋葬施設２から出土しており、総数は508点である。石製玉類の内訳は勾玉２点・管玉16点である。ガラス製玉類の内訳は勾玉４点・管玉７（破片含め９）点・丸玉126点（うち重層ガラス１点）・小玉358点である（第17表）。

玉類は、生産地によって形状や素材が異なり、流通に時期的・地域的特徴がみられるため、その組み合わせを検討することで当時の流通を推測することができる。またガラス製玉類については、国産ガラスの生産が開始される７世紀後半以前に日本列島で流通したものは全て舶載品とされるため、様相の把握は、対外交易を解明する手掛りとなる。

今回は、理化学的な分析は行えなかったため、基礎ガラスの種類や着色材は不明であるが、以下では肉眼観察から得られた特徴を述べる[1]。

ｂ　石製玉類の様相

翡翠製勾玉　丁字頭の装飾が施された翡翠製勾玉が１点出土した。石材は糸魚川周辺のもので、生産も糸魚川周辺と推測される。本体の反りは緩やかで、その形態から製作時期は４世紀前半と考えられる。

他の玉類と比べて製作年代が古いが、翡翠製勾玉については、古墳時代前期に生産され、畿内で長期間保有されてきた玉が、中期後半の段階で再び分配される傾向があるという指摘[2]がある。そういった一群のひとつが、中期後半から後期にかけての時期幅で、畿内から伊賀に搬入されたのであろうか。

翡翠製勾玉は、三重県では20点程度知られている。古墳時代中期から後期における伊賀地域では、二の谷古墳・鳴塚古墳・高猿１号墳・久米山44号墳・横山14号墳・だんな山古墳からの出土が確認される。このうち、二の谷古墳からは東条１号墳と同じＮｗ型の翡翠製勾玉が出土しており、古墳の時期は前期末から中期前半頃である[3]。

瑪瑙製玉　瑪瑙製玉類の生産地は、茨城県・栃木県・埼玉県などの北関東を除けばほぼ出雲地方に限定される。山陰産の瑪瑙製勾玉は、古墳時代前期のものは大型品で透明感のある赤白色が多く、中期以降のものは小型品で透明感に乏しく赤色・橙色といった濃い色調となることが指摘される[4]。東条１号墳出土勾玉の製作時期は、形態や色調の特徴から中期前半と考えられる。他の玉類と比べて時期が古いため、５世紀前半に山陰で製作されたものが伊賀に分配され、在地で伝世した可能性が高い。

碧玉製管玉　石製管玉は16点出土し、太く長い一群と、太く短い一群が確認されたが、石材はいずれも出雲の花仙山で産出される碧玉である。

紐孔の穿孔方法は、割れ円錐が認められる片面穿孔が８点、両面穿孔が８点と、同数であった。両面穿孔の場合、内孔の中央部にわずかな食い違いが残り、両側から非対称に穿孔されているようすがわかる。花仙山産碧玉の片面穿孔については、山陰では古墳時代中期後半以降、畿内曽我遺跡周辺では、中期後葉から後期前葉に強く志向されるが、非対称な両面穿孔を少なからず含んでいるとされる[5]。

曽我遺跡に代表される畿内の生産地では、花仙山産碧玉を多量に搬入して加工しており、その生産には出雲の製作集団の関与が想定されているため、両地域の製作技法や規格は同一である[6]。すなわち、消費地の個体については産地を特定することができない。しかし、製作地における出土量の多寡から推測すると、曽我遺跡の生産量が他より非常に多いため、東条１号墳の管玉が畿内産である可能性は高い。

ｃ　ガラス製玉類の様相

重層ガラス　細片が１点出土した。サンドウィッチガラスとも呼ばれるもので、２種類のガラス管を密着させるものである。地中海沿岸地域で製作され、日本には５世紀から７世紀に伝来する。外層と内層の間に金装・銀装を貼るものが多いが、東条１号墳の重層ガラスには金箔等は見られないため、製作が簡略化した段階のものと考えられる[7]。

ガラス製勾玉・管玉　勾玉は４点、管玉は７（破片含め９）点で、全て淡い青緑色不透明である。材質はソーダガラスで、なかでも高アルミナソーダ石灰ガラスと考えられる。素材の原産は東南アジアに求められ、同じような色調のガラス玉は九州で多くみられる。ガラス玉の原産国では勾玉・管玉という形状は好まれないことから、６世紀代に日本列島か韓

第17表　埋葬施設２出土玉類の出土地点と種類

種類	勾玉			管玉		丸玉		小玉		合計
質	翡翠	瑪瑙	ガラス	碧玉	ガラス	重層ガラス	ガラス	ガラスa	ガラスb	
胸部周辺	1		4	16	7（＋3）	1		94（＋3）	5	133（＋6）
左手周辺		1					7	256（＋5）		264（＋5）
右手周辺							110	1		111
棺内北端							3	2		5
合　　計	1	1	4	16	7（＋3）	1	120	353（＋8）	5	508（＋11）

（）内は、実測を行わなかったガラス破片数である。詳細は以下の通り。
胸部周辺…ガラス管玉３点（0.36g・0.59g・0.87g）、ガラス小玉ａ類３点（0.075g）。
左手周辺…ガラス小玉ａ約５点（1.375g。すべて破片資料のため、平均 0.27g/1 点で算出した場合５点）。

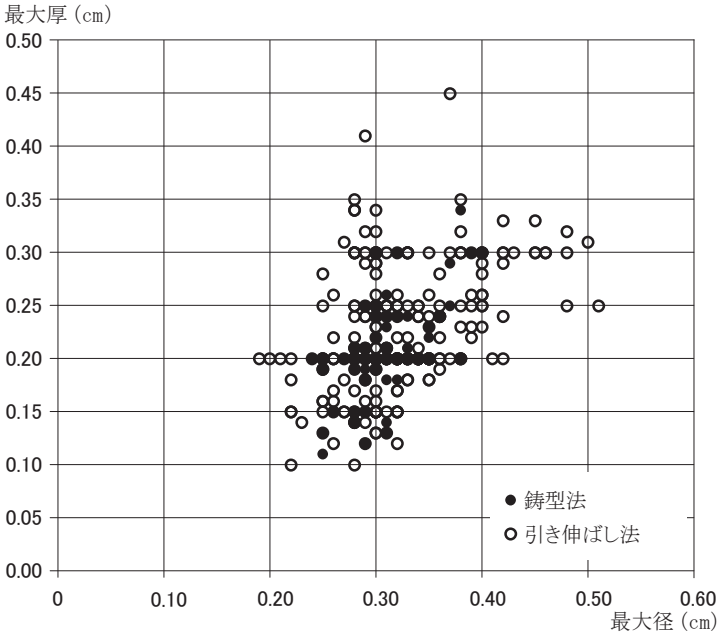
第18表　ガラス製小玉ａ・ｂの出土地点と色調別個体数

類	a（径 6mm 以下）							b（径 6mm 以上）		合計
色	淡青色	濃青色・青色	紺色	黄緑色・淡青緑色	青緑灰色	紫紺色	濃紫褐色	濃青色	紺色	
胸部周辺	3	33	53	2		3		4	1	99（＋3）
左手周辺	32	74	133	5	1	9	2			256（＋5）
右手周辺	1									1
棺内北端		1	1							2
合　　計	36	108	187	7	1	12	2	4	1	358（＋8）

（）内は、実測を行わなかったガラス破片数である。

第19表　小玉ａの色調別個体数と製作技法

色調	引き伸ばし法	鋳型法	合計
淡青色　透明	22	0	22
淡青色　半透明	12	2	14
青色　透明	2	0	2
青色　半透明	1	0	1
濃青色　透明	104	1	105
紺色　透明	109	77	186
紺色　半透明	1	0	1
黄緑色　半透明	5	0	5
黄緑色　不透明	0	1	1
淡青緑色半透明	0	1	1
濃紫褐色　透明	2	0	2
青緑灰色　透明	1	0	1
紫紺色　透明	11	1	12
合　　計	270	83	353



第35図　ガラス製小玉ａの製作技法別法量散布図

第20表　小玉ｂの色調別個体数と製作技法

色調	引き伸ばし法	鋳型法	合計
濃青色　透明	4	0	4
紺色　透明	1	0	1
合　　計	5	0	5

第21表　ガラス製丸玉の材質と製作技法

材質	引き伸ばし法	連珠法	包み巻き法	合計
ソーダ石灰ガラス（植物灰）	117	1	0	118
ナトロンガラス	0	0	2	2
合　　計	117	1	2	120

半島で二次加工を施されたものと考えられるが、明確な生産地は特定されていない。

製作工程については、管玉は比較的大きなガラス塊を引き伸ばして成形したもの、勾玉はガラス塊の一端をつまんで屈曲させながら引き伸ばして成形したものである[8]。勾玉と管玉は色味が近く、大きさも類似するため、セット関係として一緒に動いていた可能性が高い。日本列島内における主な流通時期は、６世紀中頃である。同色の管玉は、三重県内では名張市丸尾山古墳（MT15 型式期）[9]、明和町曽祢崎３号墳（TK209 型式期）[10]、四日市市北山Ｃ遺跡[11]から出土している。

なお、いずれの勾玉も尾部が欠損しているが、石製・ガラス製勾玉の場合は、たとえ一部が欠損しても、孔が使える限り欠損部を磨いて使い続ける場合が多いとされるため、当古墳の勾玉についても意図的な破砕ではないと考えられる。ただし、尾部の破断面は新しく、研磨されていないことが特筆される。

ガラス製丸玉　紺色直径が６mm を超えるガラス製丸玉は、120 点出土た。そのうち 110 点が腕輪として使用されていた。

製作技法は、引き伸ばし法が 117 点・連珠法が１点・包み巻き法が２点確認され、その大半は引き伸ばし法であった（第 36・37 図）。

引き伸ばし法は、管状のガラス棒を切断して成形されるもので、「管切り法」とも呼称される[12]。引き伸ばし法は、気泡列が孔と平行して縦方向に走ることが特徴で、東条１号墳の場合は丸玉・小玉ａ・小玉ｂで確認できた。このうち丸玉は直径が６mm を超え、コバルト着色であることから、低アルミナソーダ石灰ガラスのなかでも植物灰ガラスとみられる[13]。これら丸玉の原産地は、西アジアから地中海付近である。日本列島では古墳時代中期後半から流通が始まり、５世紀後半から６世紀前半の古墳から出土する。特に、畿内で好まれる傾向にある。

連珠法は、引き伸ばし法で作られたガラス管を用いる。再加熱させたガラス管に工具で括れを入れ分割する方法である。側面形は丸みが強く、上下の小口面は未調整でタマネギのようである。材質は、引き伸ばし法と同じ植物灰ガラスである可能性が高い。

包み巻き法は、融解したガラスで芯棒を包む方法である。丸玉２点（445・489）の材質は、その形態と透明感を欠く点から、低アルミナソーダ石灰ガラスのなかでもアルカリ原料としてナトロンを使用したナトロンガラスであると考えられる。ナトロンガラスは比較的希少性が高く、産地は西アジアから地中海地域である。日本列島では弥生時代後期後半以降で見られ、古墳時代中期前半に事例が増加する[14]。

ガラス製小玉ａ　ガラス製小玉の総数は 358 点である。遺存状態が悪く破片化しているものが８個体分あるため、それらを含めると 366 点となる（第 18 表）。このうち、径の小さい小玉ａは 353 点である。

小玉ａの色調は、淡青色（透明・半透明）、青色（透明・半透明）、濃青色（透明）・紺色（透明・半透明）、黄緑色（半透明・不透明）、淡青緑色（半透明）、濃紫褐色（透明）、青緑灰色（透明）、紫紺色（透明）が確認された。淡青色は水色、濃紫褐色は黒色に近い色調である。青色・濃青色・淡青色と合わせて、青系統だけで全体の 94％を占める（第 38 図）。着色材については、紺色はコバルトイオン、黄緑色は銅イオンと錫酸鉛、青～青緑色は銅イオンによるものと考えられる[15]。

小玉ａ 353 点の製作技法は、引き伸ばし法が 76％、鋳型法が 24％である（第 39 図）。

引き伸ばし法によるガラス製小玉は 270 点で、直径は 0.25cm～0.50cm である。小口面は、滑らかで曲線的な一群と、ガラス棒を切断した状態のままで直線的な一群があり、前者は小口面を再加熱して整形したと考えられる[16]。材質は、ソーダガラスが 96％、カリガラスが４％である（第 40 図）。ソーダガラスの小玉は、いわゆる「インド－パシフィックビーズ」で、南インド～東南アジアからの舶載品である高アルミナソーダ石灰ガラスと考えられる。紫紺色の小玉 11 点はすべてカリガラスである。

一方、鋳型法は日本国内において破損品の再利用を目的として製作されたもので、古墳時代前期に出現する。細片化したガラス片を鋳型によって高温で溶かす方法であるため、ベースガラスの種類まで特定することはできない。ただし、紫紺色１点のベースはカリガラス、紺色の一群はコバルト原料のソーダガラスが主体と考えられる（第 41 図）。

ガラス製小玉ｂ　径の大きい小玉ｂは５点のみ確認

された。製作技法は引き伸ばし法のみで、材質はソーダガラスである。色調は濃青色透明が４点、青色が１点で、いずれも銅着色の系統である。

ｄ　玉類の時期差と地域差

組成と搬入経路　東条１号墳出土玉類は、器種によって製作年代や入手時期が異なっている。

まず、器種ごとに様相を整理する。翡翠製勾玉は４世紀前半に北陸で製作され、畿内で伝世し、６世世紀の段階で伊賀に運ばれたものである。瑪瑙製勾玉は５世紀前半に山陰で製作され、時期を置かずに伊賀に搬入されたと考えられる。碧玉製管玉は出雲花仙山産の碧玉を用いているが加工地は畿内である可能性が高く、製作時期は５世紀後葉から６世紀前葉である。ガラス製勾玉・管玉はアジアで再加工されたもので、６世紀中頃に多く見られるタイプである。ガラス製丸玉の日本への搬入時期は、ナトロンガラス２点が５世紀前半以降、引き伸ばし法の一群が５世紀後半から６世紀後半である。

次に、伊賀に搬入された経路を時期ごとに整理する。まず、５世紀段階に瑪瑙製勾玉が伊賀に搬入され、在地で伝世する。ナトロンガラスはガラス玉類のなかでは流通時期がやや異なるが、丸玉や小玉は１点１点単体で運ばれたとは考え難く、運ばれる段階である程度は腕輪や首飾り状に連ねた状態であることが想定されるため、伊賀への流入時期は他のガラス製丸玉と同一である可能性が高い。その他の器種は、東条１号墳が築造される６世紀前半には概ね流通している器種である。

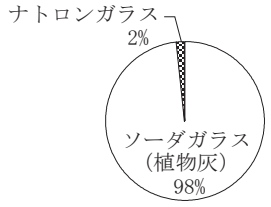
搬入経路については、翡翠製勾玉の保管状況や、コバルト着色によるガラス製丸玉の流行範囲などから、まずは畿内を介した経路が想定されよう。

ガラス製小玉ａの製作技法　東条１号墳出土ガラス製小玉ａの製作方法は、引き伸ばし法が76％、鋳型法が24％であった。この比率は、舶載品であるガラス製品の入手に際しての優劣を反映しているという指摘がある[17]。例えば、古墳時代中期前半の大阪府風吹山古墳では１割程度が鋳型法であるが、後期後半以降は地域差が顕在化し、三河以東では８割程度が鋳型法であるとされる[18]。

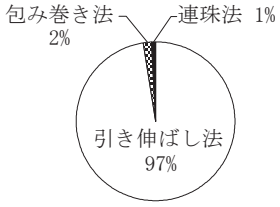
伊賀地域出土ガラス製小玉を見てみると、６世紀後半の天童山８号墳[19]でガラス製小玉が99点出土し、鋳型法が27～28％程度確認される。これは、時期はやや異なるものの東条１号墳と概ね同じ比率であり、伊賀地域における６世紀代の状況を示すものといえよう。

ｅ　装身具の復元

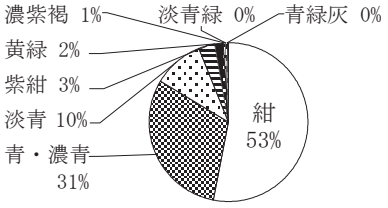
首飾りの復元　碧玉製管玉列とガラス製管玉列は、出土状況で別の単位であるため、首飾りは二重であったことがわかる。翡翠製勾玉と碧玉製管玉16点を結ぶと約37cm、ガラス製勾玉・管玉を結ぶと約13cmである（第42図）。ガラス製小玉94点を結んだ約31cmを各管玉列に足したとしても、どちらも女性の首を全周できるものではない。したがって、首飾りは胸元前身のみに玉類が巡り、首の後ろ



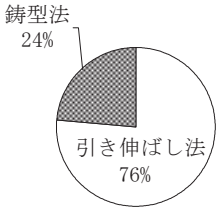
第36図　ガラス製丸玉の材質
（ｎ＝120）



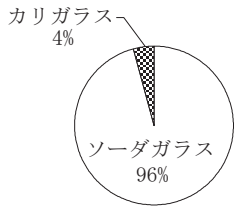
第37図　ガラス製丸玉の製作技法
（ｎ＝120）



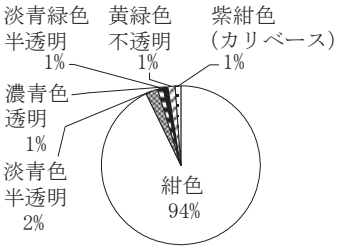
第38図　小玉ａの色調
（ｎ＝353）



第39図　小玉ａの製作技法
（ｎ＝353）



第40図　小玉ａ（引き伸ばし法）の材質（ｎ＝270）



第41図　小玉ａ（鋳型法）の色調
（ｎ＝83）

は紐が露出する状況であったと考えられる。碧玉製管玉は、出土位置から連結の復元が可能で、層位を重視した場合、両端で大きいタイプと小さいタイプが交互に連なる状況となる（第42図）[20]。

左手腕輪の復元　瑪瑙製勾玉１点、ガラス製小玉ａ256点、ガラス製小玉ｂ５点を結ぶと約58.5cmである。銅釧の円周は約23cmであるため、玉類は手首に３重に巻き付けられていたと考えられる。

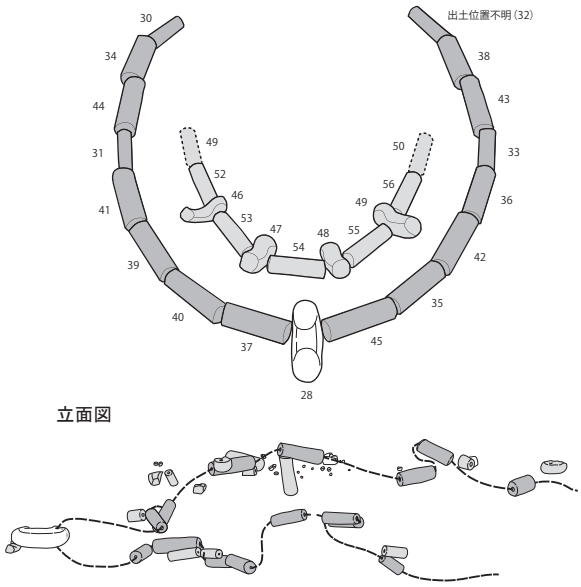
右手腕輪の復元　コバルト系のガラス製丸玉110点を結ぶと約67cmとなり、これは細めの女性であれば手首に４重に巻き付けることが可能な長さである。

ｆ　評価

東条１号墳出土玉類は、伊賀のなかでも突出して点数が多く、器種も豊富である。器種によって搬入時期に幅が認められる点が特徴的であった。

柘植川流域には二の谷古墳・だんな山古墳・浅子谷古墳群など多くの玉類が出土した古墳が点在しており、東条１号墳と近接する外山・鷺棚古墳群にも同じような副葬品を有する古墳がある可能性が高い。

いずれにしても、東条１号墳は消費地における当該期の状況を示す基礎資料となろう。玉類の産地・材質や製作技法は、過去の調査報告に記載のない項目であるため、比較できる資料は少ない。今後は、それらの再整理や分析を行って資料を蓄積したうえで、古墳・地域ごとの検討が必要となろう。（相場）



第42図　首飾り復元図（スケール任意・復元図は写真図版14と対応）

【註】

(1) 玉類の所見は大賀克彦氏のご教示による。
(2) 大賀克彦「弥生・古墳時代の玉」（『考古資料大観』小学館、2002年）、同「稲童古墳群の玉について－古墳時代中期後半における玉の伝世－」（『稲童古墳群』行橋市教育委員会、2005年）。
(3) 翡翠製勾玉が出土した古墳は、以下の文献による。伊賀市『上野市史』考古編（2005年）、三重県『三重県史』資料編考古１（2005年）。
(4) 大賀克彦「山陰系玉類の基礎的研究」（『出雲玉作の特質に関する研究－古代出雲における玉作の研究Ⅲ－』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、2009年）。
(5) 大賀氏のご教示による。
(6) 米田克彦「穿孔技術から見た出雲玉作の特質と系譜」（『出雲玉作の特質に関する研究－古代出雲における玉作の研究Ⅲ－』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、2009年）。
(7) 福島雅儀「ゴールドサンドウィッチグラスの玉・一例」（『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ、1985年）、島根県立八雲立つ風土記の丘『ガラスのささやき～古代出雲のガラスを中心に～』（2001年）。
(8) 大賀克彦「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」（『月刊文化財』565、文化庁文化財部、2010年）。
(9) 名張市教育委員会『横山古墳群』（1999年）。
(10) 三重県埋蔵文化財センター『曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群』（1997年）。
(11) 三重県埋蔵文化財センター『北山Ｃ遺跡第５次発掘調査現地説明会』（2014年）。
(12) 小瀬康行「管切り法によるガラス製小玉の成形」（『考古学雑誌』第73巻第２号、1987年）。
(13) 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦「材質とその歴史的変遷」（『月刊文化財』565、文化庁文化財部、2010年）。
(14) 斎藤あや「御茶屋通遺跡第３地点１号方形周溝墓出土のガラス小玉について」（『上ノ山遺跡群御茶屋通遺跡第３地点』株式会社盤古堂、2012年）。
(15) 肥塚隆保・田村朋美「⑤古墳時代のガラス」（『隣接科学と古墳時代研究』古墳時代の考古学８、同成社、2012年）。
(16) 東条１号墳出土ガラス製小玉の小口面の処理については、研磨されているものとされていないもの、どちらも観察される。西嶋剛広「管切り法・連珠法によるガラス玉に関する一考察－長目塚古墳出土資料の観察－」（『長目塚古墳の研究』熊本大学、2014年）。
(17) 肥後隆保・大賀克彦「弥生・古墳時代におけるガラス玉類の生産」（『季刊考古学』第94号、雄山閣、2006年）。
(18) 前掲註(8)。
(19) 三重県埋蔵文化財センター『天童山古墳群発掘調査報告』（2006年）。
(20) このように碧玉製管玉の規格が一定しない点は、大きさを変えてバリエーションをもたせていたという指摘がある。羽曳野市教育委員会『史跡古市古墳群峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』（2002年）。

【参考文献】

・大賀克彦「日本列島におけるガラス製小玉の変遷」（『小羽山古墳群』清水町教育委員会、2002年）。

7　古代・中世の東条地区

a　伊賀国府跡と屋敷の下遺跡（西地区）

今回の調査で、屋敷の下遺跡（西地区）から平安時代中期の土器が出土した。谷状地形で見つかった数点のものだが、合子状に合わされた土師器坏と皿があり、何らかの祭式が行われたことを示している。この出土土器は、伊賀国府跡SK1035出土土器[1]に類似することから、９世紀後半頃のものと考えられる。

当時の伊賀国中枢である伊賀国府は、当遺跡の東方約700ｍにある。伊賀国府と屋敷の下遺跡との直接的な関係は不明とせざるを得ない。しかし、東条地区の南には、第Ⅱ章で見た「古東海道」が通っている。また、東条地区や西隣の西条地区では、「東条・西条」という呼称が国府との関連として伝承されている[2]。

屋敷の下遺跡では、平成26年度の調査でも古代の土器が出土している[3]。したがって、屋敷の下遺跡と伊賀国府跡とは、何らかの有機的関係にあったと考えておく。

b　中世の屋敷の下遺跡（西地区）

第Ⅱ章で見たように、東条古墳群の南方平地部（扇状地）には、山出氏館跡・屋敷ノ下館跡・倉田氏館跡などの中世城館が見られる。これらは近接して造成されており、一連の城館群として把握が可能である。

一方、土塁は伴わないが、東条古墳群のある丘陵内にもいくつかの区画が見られる。第Ⅱ章で見たように、東条２号墳の東には「コ」の字形区画がある。３号墳の墳頂部には五輪塔残欠や石仏があり、４号墳の墳頂には、近世以降のものながら「秋葉三尺坊」の石碑があった。

今回実施した屋敷の下遺跡（西地区）は、一見すると耕地（水田）を画する法面である。しかし、以上のような周辺環境を考慮した場合、この法面は近代以降のそれではなく、第Ⅱ章で見た「セイコウ寺」あるいは菰枕神社の一角だったのではないかと推測できる。つまり、東条地区には中世以来の地割りが良好に遺存している可能性が高いと考えられる。

現況の地割り（法面を含む）を近代以降のものと安易に結論付けず、中世の影響を色濃く残した「遺構」として見ていく姿勢が必要である[4]。　（伊藤）

【註】

(1) 三重県埋蔵文化財センター『伊賀国府跡（第４次）発掘調査報告』（1992年）。
(2) 平松令三監修『三重県の地名』日本歴史地名体系第24巻（平凡社、1983年）。
(3) 平成26年度三重県埋蔵文化財センター調査。詳細は、今後刊行予定の報告書に拠られたい。
(4) 平成26年度に三重県埋蔵文化財センターが調査を実施した屋敷の下遺跡（西地区第２次）でも、このことを示す遺構が検出された。

8　総　括

東条１号墳・屋敷の下遺跡の発掘調査では様々な成果を得ることができた。最後に、その意義を確認して総括としたい。

a　東条１号墳の位置づけ

東条１号墳と屋敷の下遺跡の調査成果を列挙する。

①上野盆地を望む極めて見晴らしの良い立地。
②前身となる古墳時代前期初頭頃の墳墓の存在。
③２棺並列する古墳時代後期前半の、直径10ｍ程度の小規模な円墳。
④捩り環頭大刀・四獣鏡・玉類など豊富な副葬品。
⑤副葬品は、この時期としては古い様相。
⑥長大な割竹形木棺を用いるのも古い要素。
⑦須恵器祭式に畿内との強い関係。
⑧鉄鏃・玉類・須恵器は「寄せ集め」。
⑨その後横穴式石室を同一墳丘内に造成。
⑩丘陵裾に古墳時代後期の遺物を多く包含。

このうち、①・④・⑦などの要素は、この古墳が重要な地域的・歴史的背景のもと造作されたことを示している。一方、⑧の要素は、畿内との強い関係を有しつつも、突出した存在ではないことを示している。⑤・⑥の要素は、「時代遅れ」なのか「伝統重視」なのか判断が難しいが、⑧の要素を絡めれば、「時代遅れ」の感が強い。②・⑨の要素に窺われる、狭隘な地に造作せざるを得なかった何らかの背景があることも関連を有するであろう。

以上のことから東条１号墳は、所在する伊賀北部地域のなかで極めて重要な意味を持つ古墳ではあるが、被葬者は畿内（中央政権）と直接つながっては

いないと考えられる。つまり、地域のなかではもう一ランク上の首長があり、その下に位置づけられる被葬者の古墳だと考えられる。

東条１号墳の近隣には、ほぼ同じ時期の前方後円墳として鷺棚２号墳（全長約 45 m）がある。東条１号墳の発掘調査により、前方後円墳と同じ時期に豊富な副葬品を持つ小規模古墳が併存することが判明した。これは、この地域の有力者が重層的に存在していたことを示したことになる。

ｂ　地域史のなかの伊賀北部

伊賀北部地域には、弥生時代以降の重要な遺跡が極めて濃密に分布する。東条１号墳の近隣には、御墓山古墳（古墳時代中期）、外山・鷺棚古墳群（古墳時代中期～後期）、勘定塚古墳（古墳時代後期）などの優秀な古墳が集中する。奈良・平安時代では、伊賀国府跡のほか、伊賀国一宮の敢國神社がある。東条古墳群の南には奈良時代の東海道が通っていた。

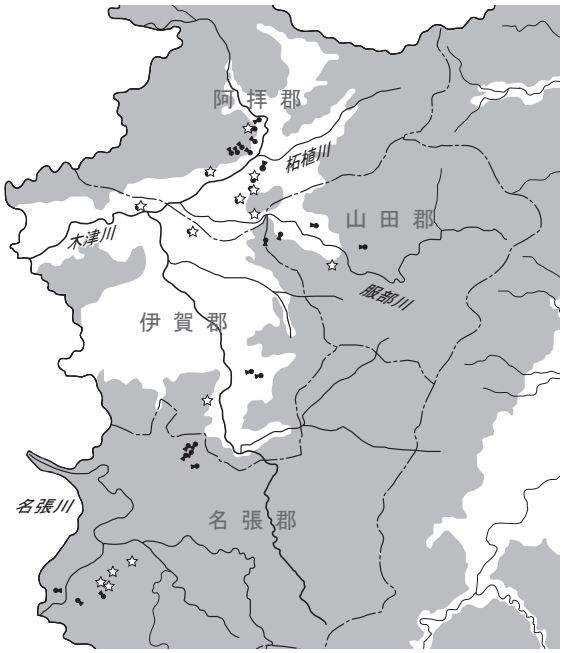
このうち外山・鷺棚古墳群は、東条１号墳と同じ時期に造営されたと考えられるが、発掘調査が実施されていないため、その中身はよく分かっていない。とくに、東条１号墳が築造された古墳時代後期前半の状況は把握されていなかったといってよいだろう。

伊賀北部の勢力は伊賀最大の前方後円墳（御墓山古墳）を造成し、その後は伊賀国府を当地へ誘致するに至った集団だと考えられる。古墳時代の前方後円墳と鏡の出土地分布[(1)]を見ても、伊賀のなかで伊賀北部は際立っている（第 43 図）。

この地は伊賀国阿閉郡に相当するため、古代氏族である阿閉氏の関与が想定される[(2)]。伊賀の阿閉氏に関する資料は少なく、その実態は定かでは無い。しかし、東条１号墳に見られた優秀な副葬品や須恵器祭式からは、間接的とはいえ畿内中枢部との関係が窺われる。ここから、この古墳が阿閉氏ないしはその前身が関与していたと見ることは、それほど荒唐無稽な想定ではないだろう。

ｂ　埋蔵文化財包蔵地の把握と開発への対応

東条１号墳は工事中に発見された。遺跡地図が整備されていない地域では、こういったことはよく発生するが、伊賀市は精力的に把握がなされている地域である。今回の事例は、このような地域であっても、不時発見は起こり得るということを肝に銘じなければならないということを示している。



第43図　伊賀の旧郡と前方後円墳・古墳時代鏡出土地の関係　☆…鏡出土地（古墳など）

不時発見の理由は、東条１号墳の地点が古墳と断定できなかったことに起因する。屋敷の下遺跡（西地区）も同様で、周辺状況からは未知の古墳の存在すら想定できるのである。

以上の状況は、今後も発生し得る。東条１号墳の発見経緯を考えれば、墳丘の認識はかなり困難だと考えられるからである。

次善の策としては、尾根部に対する開発に注意し、周知の埋蔵文化財包蔵地以外にも相応の対処をしていくことである。また、今回の経験を踏まえ、新たな見方で再分布調査を実施することも必要となろう。周知の埋蔵文化財包蔵地以外をも意識して対処することは、学問や法令云々以前に、地域の歴史を正確に把握し、次世代へと継承するために重要であることをとくに指摘しておきたい[(3)]。　（伊藤）

【註】

(1) 第 43 図の作成にあたっては、伊賀市編『上野市史』考古編（2005 年）および、三重県編『三重県史』資料編考古１（2005 年）を参照した。
(2) 伊賀市編『伊賀市史』第１巻通史編古代中世（2011 年）。
(3) 才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群では、発掘調査の実施と併行して周辺丘陵の踏査を行った。その結果、数多くの古墳群を新たに確認するに至った。こういった地道な作業が行政対応として必要であることを強調しておきたい。三重県埋蔵文化財センター『才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群ほか発掘調査報告』（2013 年）。

写 真 図 版

東条１号墳埋葬施設２出土遺物集合

写真図版１

遠景（1）

東条１号墳遠景（南から）

東条１号墳遠景（東から）

東条１号墳からの展望（北から）

調査前状況（南から）

調査前状況（北から）

作業風景（南東から）

作業風景（北西から）

写真図版３

全景（1）

埋葬施設１・２全景（南から）

埋葬施設１全景（北から）

埋葬施設２全景（北から）

全景（2）

埋葬施設１・２完掘状況（北から）

埋葬施設１・２完掘状況（北から）

写真図版５

埋葬施設１（1）

埋葬施設１全景（北から）

墓壙土層断面（南から）

墓壙内・棺内遺物出土状況（北東から）

写真図版７

埋葬施設１（３）

墓壙内須恵器出土状況（南東から）

墓壙上須恵器出土状況（北から）

木棺据形（南から）

鉄鏃出土状況（南東から）

鉄刀出土状況（北から）

須恵器・鉄刀出土状況（東から）

埋葬施設２全景（北から）

埋葬施設２全景（東から）

写真図版９

埋葬施設２（2）

棺内遺物出土状況（西から）

首飾り周辺遺物出土状況（北から）

鏡・管玉出土状況（南東から）

腕輪出土状況（東から）

鏡出土状況（東から）

左手腕輪出土状況（東から）

左手腕輪出土状況（東から）

右手腕輪出土状況（西から）

墓壙内・棺内出土状況（北から）

墓壙内須恵器出土状況（南から）

墓壙内須恵器出土状況（東から）

墓壙内須恵器出土状況（北から）

墓壙内須恵器出土状況（南から）

刀子出土状況（南から）

写真図版 13

墓壙土層断面（南から）

屋敷の下遺跡（西地区）土層断面（南東から）

屋敷の下遺跡（西地区）土師器出土状況（南から）

屋敷の下遺跡（西地区）東端土層（南から）

埋葬施設１・２　出土遺物

埋葬施設２　鏡・首飾り

写真図版 15

埋葬施設１　出土遺物

埋葬施設２　出土遺物

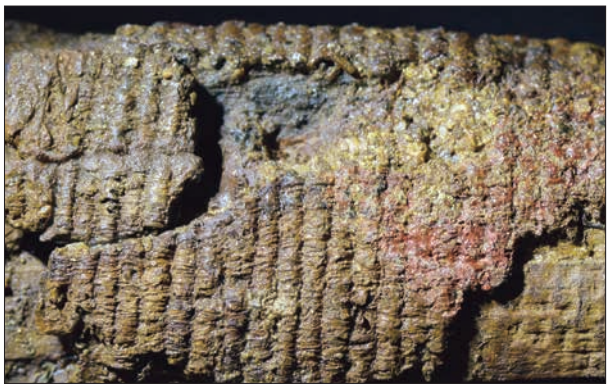
埋葬施設２　腕輪

埋葬施設２　腕輪

写真図版 17

大刀の柄（佩表）

大刀の柄（佩裏）



柄の葛巻きとその断面

柄のたすき掛け

柄縁の平織物

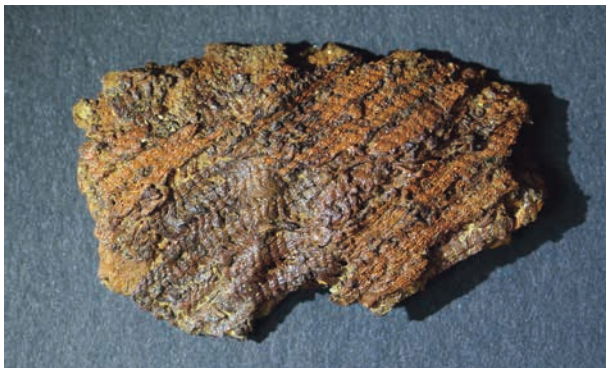
柄の組紐巻き

写真図版 19

大刀に残存した鞘の有機質装具１（１－1a・1b）

大刀に残存した鞘の有機質装具２（１－1c）

鞘の破片（１－９）

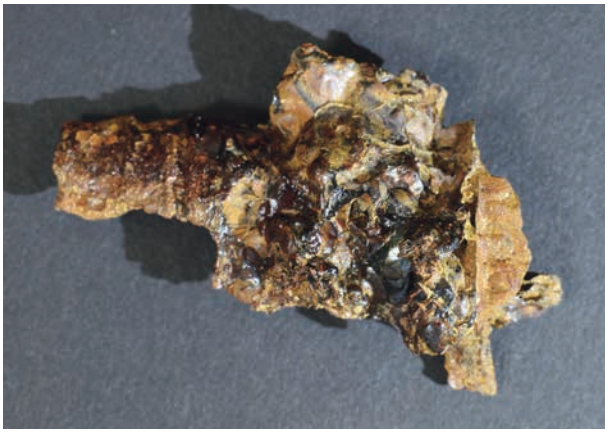


鞘の破片（１－４）

鞘の破片（１－３）

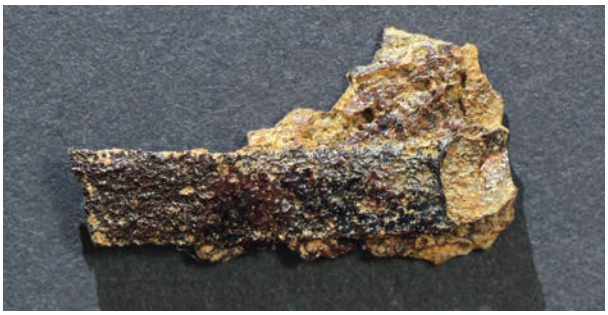
鞘の破片（１－６）

鞘の破片（１－７）



鞘の破片（１－８）

鞘の破片（１－２）



鞘の破片（１－５）

写真図版 21

14

20

24

15

21

25

16

22

17

23

26

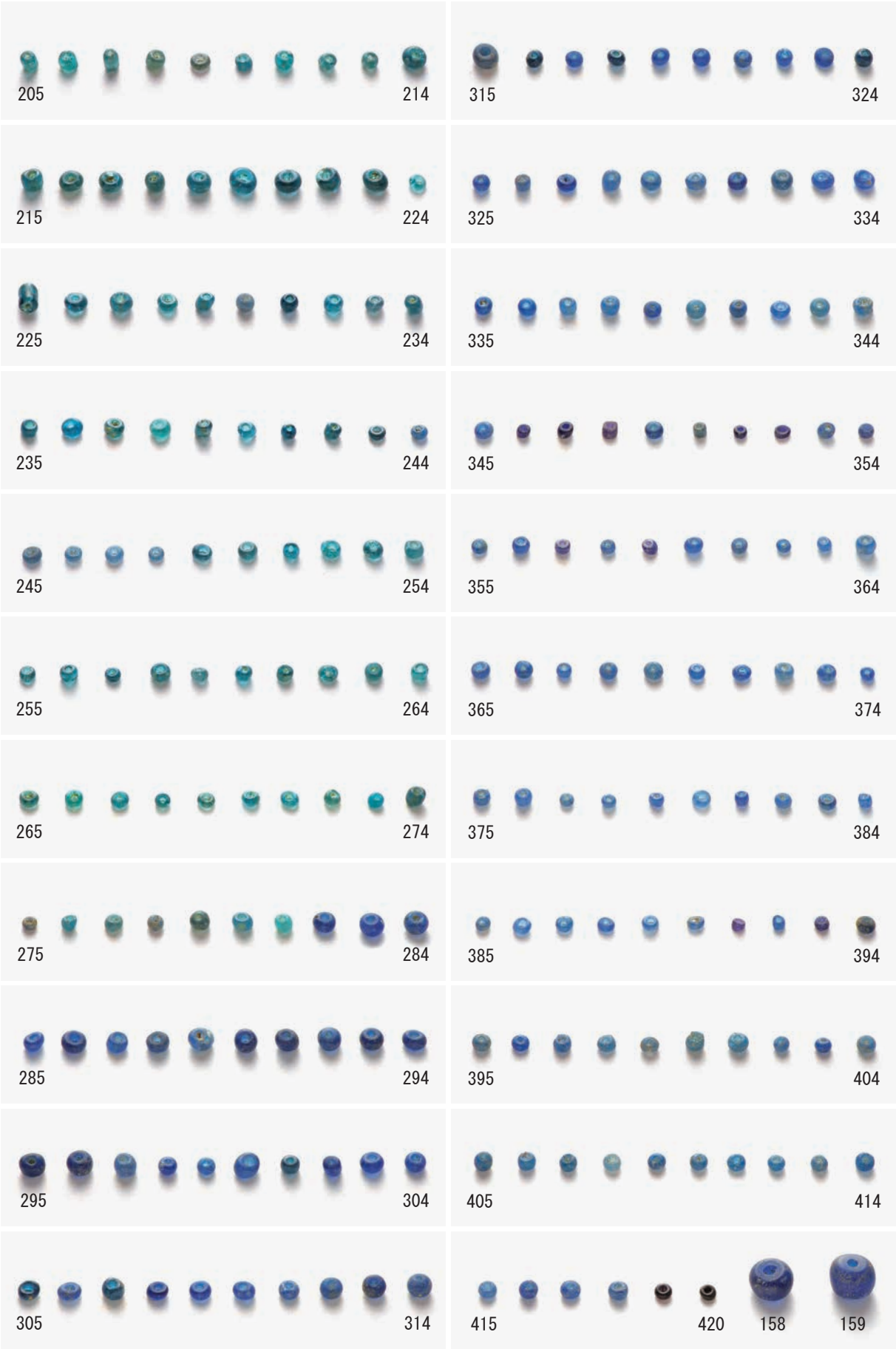
18

19

27

28
157
46
47
48
49
30
45
50
56
117
126
127
136
57
66
137
146
67
76
147
155
77
86
165
174
87
96
175
184
97
106
185
194
107
116
195
204

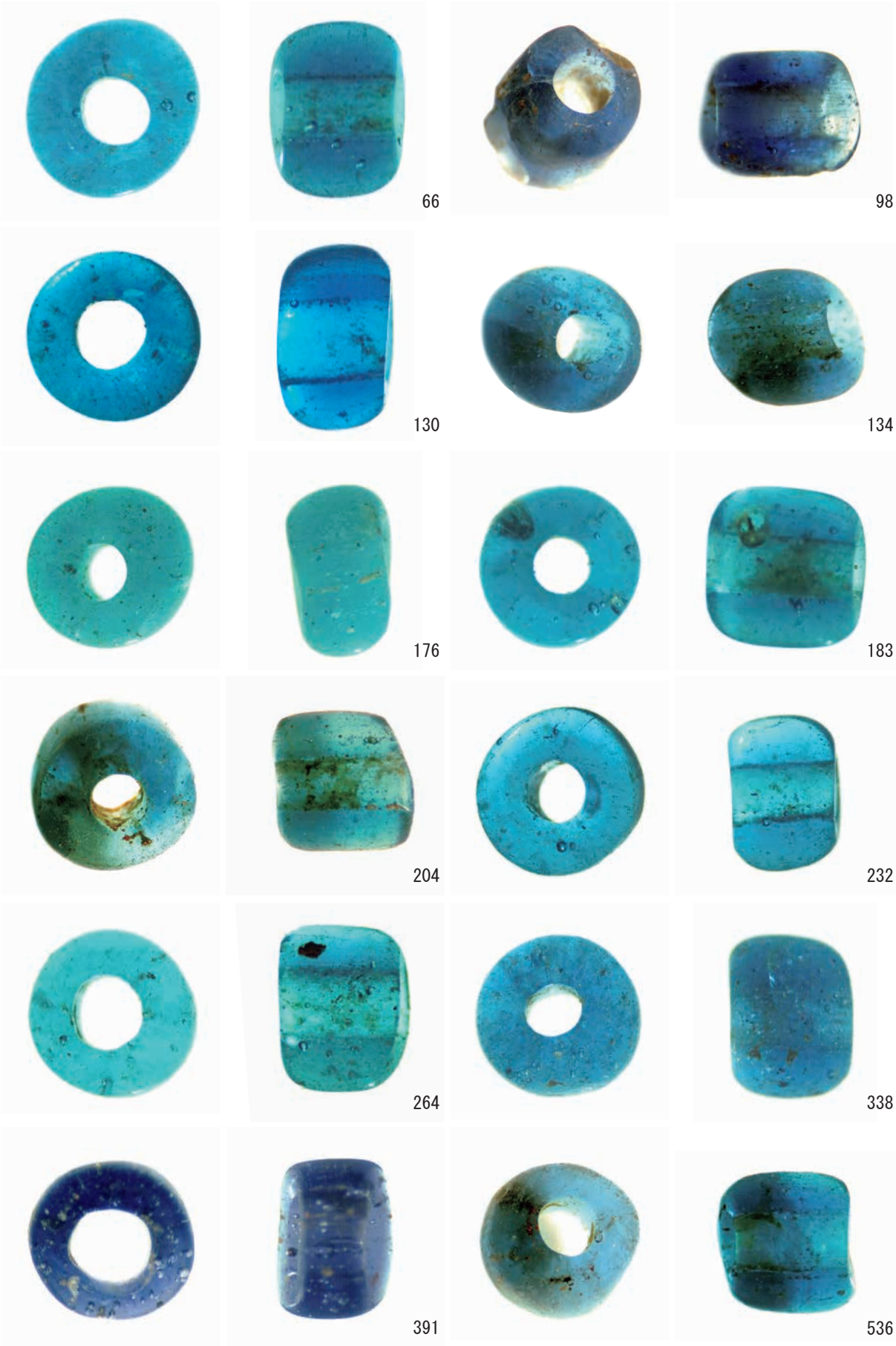
写真図版 23

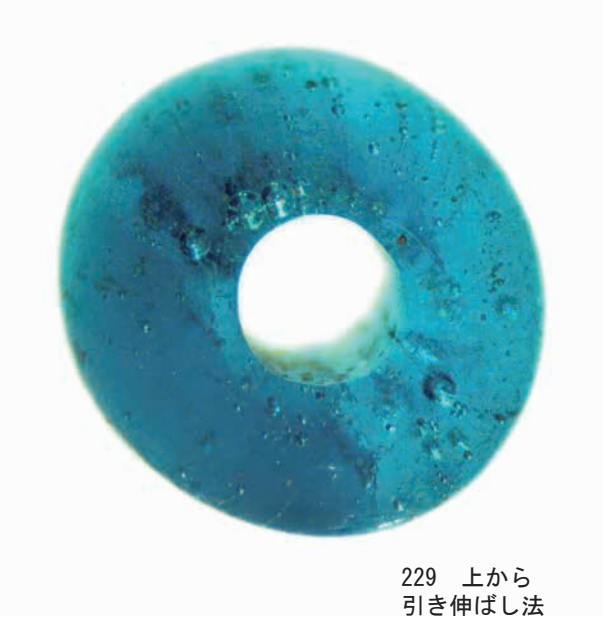

205
214
315
324
215
224
325
334
225
234
335
344
235
244
345
354
245
254
355
364
255
264
365
374
265
274
375
384
275
284
385
394
285
294
395
404
295
304
405
414
305
314
415
420
158
159

160
164
476
480
421
425
481
485
426
430
486
490
431
435
491
495
436
440
496
500
441
445
501
505
446
450
506
510
451
455
511
515
456
460
516
520
461
465
521
525
466
470
526
530
471
475
531
536

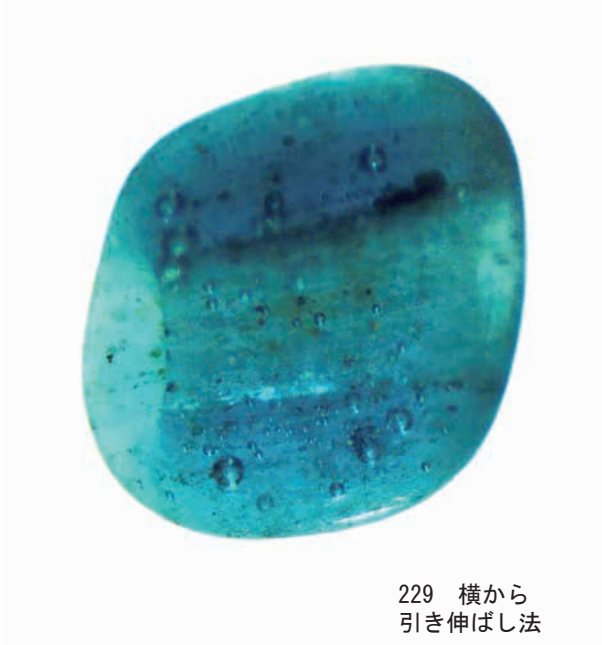
写真図版 25

出土遺物(12)　埋葬施設2　玉類

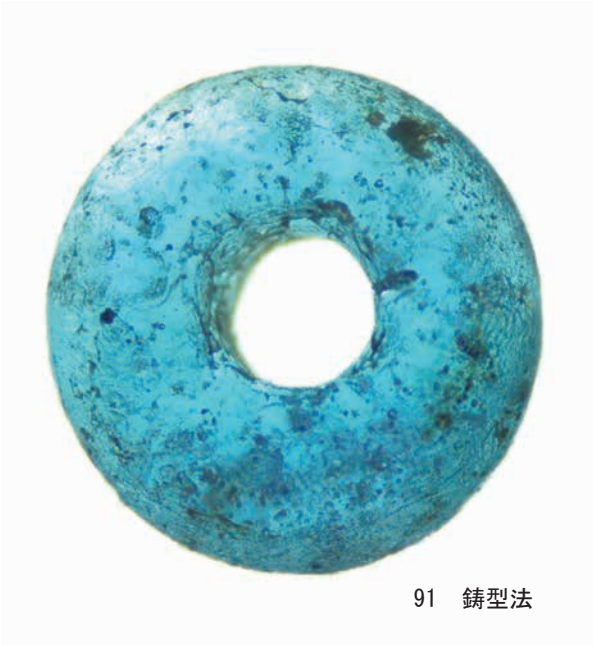




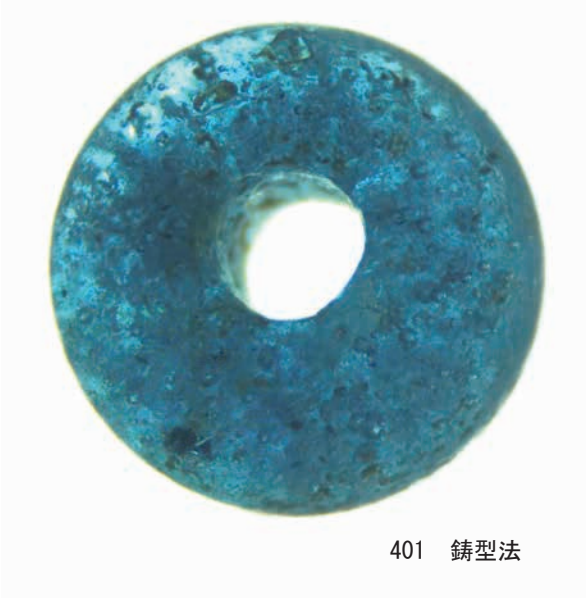
229　上から
引き伸ばし法



229　横から
引き伸ばし法



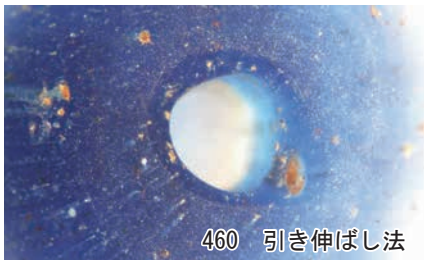
91　鋳型法



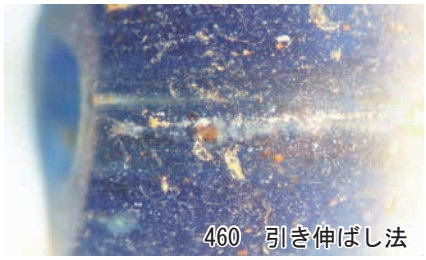
401　鋳型法

421　連珠法

489　包み巻き法



460　引き伸ばし法

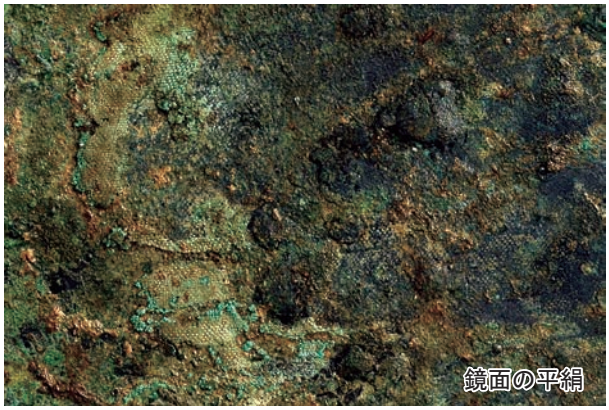


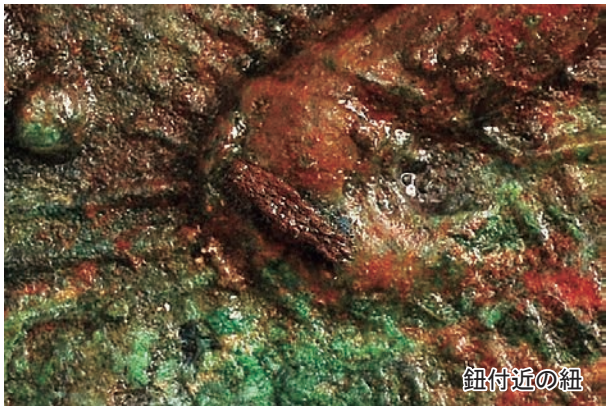
460　引き伸ばし法

537

鋸歯文

内区主文部


鏡面の平絹


鈕付近の紐

156

538

545

546

539

549

550

写真図版 29

540

548

561

541

551

565

542

552　553-a　553-b

571

556

572

543

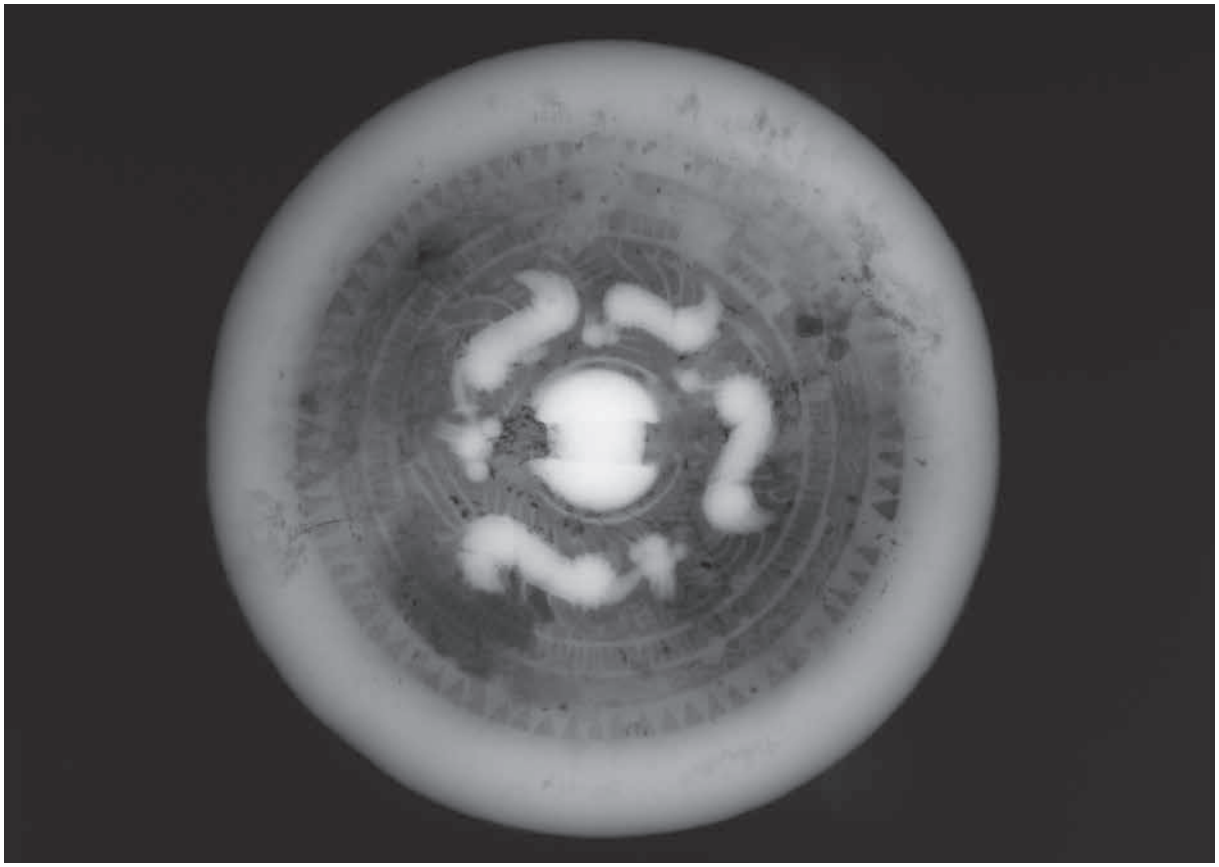
557

573

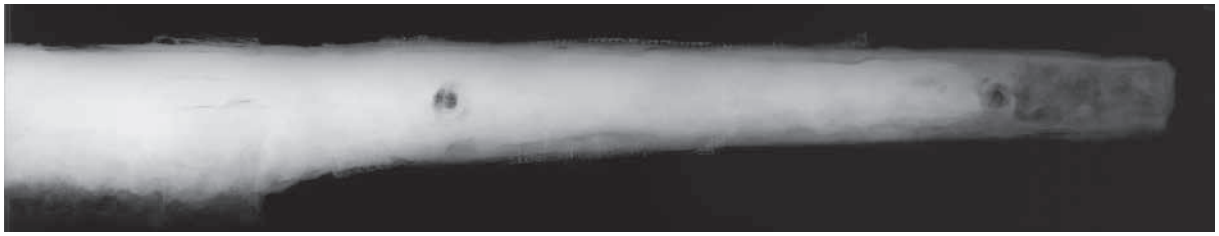
544

570　567　568　563　564　562　569

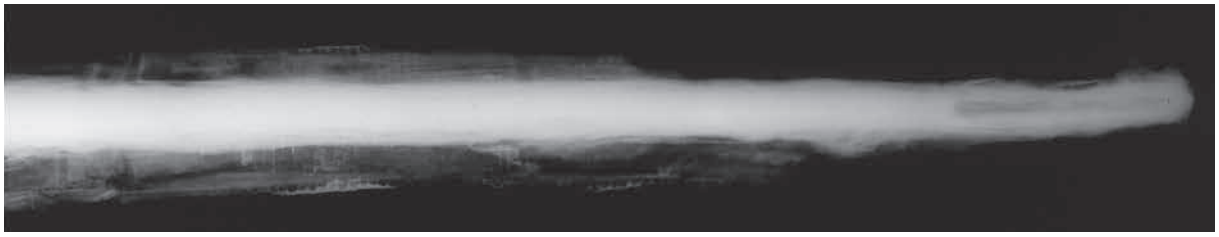
547



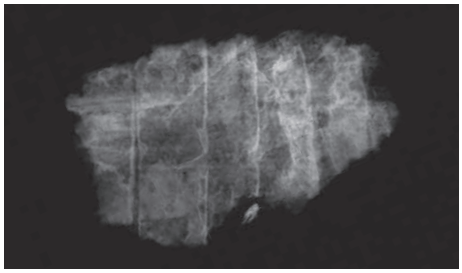
四獣形鏡



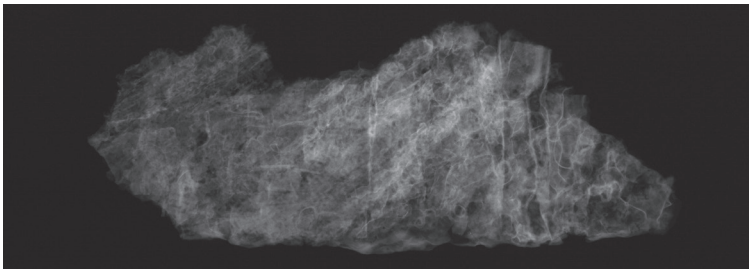
１－１　大刀柄平面



１－１　大刀柄側面



鞘の破片（１－４）



鞘の破片（１－９）

報告書抄録

ふ り が な	ひがしじょう１ごうふん・やしきのしたいせき
書　　名	東条１号墳・屋敷の下遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	３６０
編 著 者 名	伊藤裕偉・相場さやか・髙松雅文
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒　515-0325　　三重県多気郡明和町竹川503　　℡　0596(52)1732
発行年月日	2015年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
東条１号墳 屋敷の下遺跡	伊賀市東条 字屋敷ノ下	24216	a1327 a939	34°48’7.28″	136°9’1.73″	20121126～20130116	92 60	平成24年度県営地すべり対策事業（府中６期地区）

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
東条１号墳	古墳	古墳後期	埋葬施設３基 木棺直葬２基 横穴式石室１基	捩り環頭大刀、鉄鏃、四獣形鏡、銅釧、勾玉管玉・丸玉・小玉、刀子、須恵器・土師器	副葬品が極めて良好
屋敷の下遺跡	散布地	古墳 平安 中世	落ち込み	須恵器・土師器	

要約

東条１号墳は、工事中に不時発見された。古墳時代後期前半（６世紀前半）の小規模墳。木棺直葬墓２基と、横穴式石室１基の、合計３基の埋葬施設があった。木棺直葬墓は、男女と見られる２基の割竹形木棺が並列埋葬される。副葬品は捩り環頭大刀・四獣形鏡・銅釧・玉類など豊富。大刀は拵の遺存が良好で、糸巻き構造がよくわかる。玉類は、首飾り用とともに、銅釧とあわせ腕輪として用いられたものもある。伊賀の後期古墳を代表する内容で、資料価値が極めて高い。横穴式石室は大部分が調査区外で、詳細は不明だが、木棺直葬墓よりも後出する。

屋敷の下遺跡は東条１号墳の麓にある。古墳時代後期の土器類の他、祭式に伴うと見られる平安時代中期の土師器坏皿が出土した。伊賀国府に近いため、何らかの関連があると見られる。

三重県埋蔵文化財調査報告３６０

東条１号墳・屋敷の下遺跡

２０１５（平成27）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　　株式会社アイブレーン